

【更新凍結】魔法少女 ハーレムなのは

雨を飴だとアメンしたアメンボ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

【更新凍結】

誠に申し訳ありません。自身でも何を書いているのか分からなくなってきたので、凍結させていただきます。最新話まで読んでいただいた方には申し訳ありません。また別の形で書きたいと思います。

私、こと茅野かすみは考えた。

愛しのなのはちやんの愛らしさ・可愛さを万人に知らしめたいと。

私には前世の記憶がある。私は前世でオタクの限りを尽くして生きていた（前世でも女）。そのためこの世界が『魔法少女リリカルなのは』の世界と酷似していると知ってい

る。

基本原作通りを予定。

日常ものが多くなると思います。

ギャグ中心の少しシリアスを考えております。

序でに他の連載作品とは一切違う設定作品です。御気を付けて。

目次

プロローグ① 魔法少女ハーレムなのは

計画 作成中 | 1

プロローグ② 魔法少女ハーレムなのは

計画 草案 | 13

第一話 魔法少女ハーレムなのは計画

始動 | 32

第二話 魔法少女ハーレムなのは計画

実行 | 47

第三話 魔法少女ハーレムなのは計画

再実行 | 68

魔法少女ハーレムなのは計画 再考中

（閑話休題） | 90

第四話 魔法少女ハーレムなのは計画

記録 | 105

第五話 魔法少女ハーレムなのは計画

協道 | 130

第六話 魔法少女ハーレムなのは計画

邪魔 | 155

第七話 魔法少女ハーレムなのは計画

主人公 | 179

第八話 魔法少女ハーレムなのは計画

フェイト | 210

プロローグ① 魔法少女ハーレムなのは計画 作成中

私、こと茅野かすみは考えた。

愛しのなのはちゃんの愛らしさ・可愛さを万人に知らしめたいと。

私には前世の記憶がある。私は前世でオタクの限りを尽くして生きていた（前世でも女）。そのためこの世界が『魔法少女リリカルなのは』の世界と酷似していると知っている。つまり、限定的とはいえこの後の展開が分かるということだ。

私は死んだとき、神様（自称）にあつた。神様は私に一つ転生特典なるものを授けてくださった。私はその能力と前世での知識をなのはちゃんのために使う。私の天使、私のアイドル、私のヒーロー、そしてこの世界の主人公、高町なのはちゃん、その人のために！

「どうしたの？ かすみちゃん。急に立ったりして」

「いや、なんでもないよ、なのはちゃん♪」

やばいやばい。なのはちゃんに変な子だと思われちゃうところだった。自らの決意を再確認しガッツポーズをしてみました。自分を見失う。しかし、仕方がないと思う。それだけ私は「魔法少女ハーレムなのは計画」を実行することに熱意をもやしているのだ

から。

不思議なものを見るようなのはちゃんのおどけない表情。めつ、ちや可愛い。もう一度言う。めつ、ちや可愛い！

「そう？ならいいんだけど・・・それでね、その二人と仲良くなったからね、明日のお昼休みにかすみちゃんにも紹介したいの！いいかな？」

「うん！わかった♪なのはちゃんのお友達なら大歓迎だよ！」

この二人というのは、アリス・バニングスちゃんと月村すずかちゃんのことだ。なのはちゃんとこの二人の出会いには原作と同じ流れであつたらしい。しかし、本当に残念なことにその日に限つて熱を出してしまつて、あの大事な大事なシーンを見逃してしまつたのだ。かすみ、一生の不覚なり。今さつきその話を聞いてなのはちゃんの勇士を見れなかつたことに心の中で涙する。・・・え？決意表明しながらよく話が聴けたかつて？バツカ！そんなんでなのはちゃんLoveを語れません！私の脳のリソースは半分なのはちゃんのためにある。それぐらい常識でしょ。

そんなことを考えていると、大人の女性が近づいてくる。なのはちゃんのお母さん高町桃子さんだ。手にはお皿でここ翠屋名物のシュークリームがのつている。

「はい、ふたりとも」

「あ、お母さん、ありがとう」

「ありがとうございます。桃子お母さん」

「ふふ。元気なのはいいけど、ふたりともお店ではあまりはしやぎすぎないようにね」
「はーい！」

桃子さんは本当に優しく、そしてきれいだ。あの年で高校生くらいの見た目。将来のなのはちゃんが楽しみだ。序でに高町家とは色々あって、今では桃子さんは私にとつて第二の母ともいうべき人。だから、「桃子お母さん」と呼んでいる。桃子さんも嫌な顔をせず、逆にうれしそうにしてくれるから本当に幸せな気持ちになる。親子そろって私のハートを打ち抜いてくれて・・・本当に罪深い。

「そうだ！明日の放課後、ふたりの用事がなかったらここに連れてこない？」

「あ、いい考えなの。私、アリサちゃんとすずかちゃんのメールアドレス知ってるから今日訊いてみるね」

すでにメールのやり取りも行っているらしい。まだ数日しか経っていないのに。というか、私というこの世界にとつてイレギュラーがいるのにも関わらず、原作通りになっていることに気が付いた。なのはちゃんがアリサちゃんたちと出会ったのは昼休みの中で、本当ならなのはちゃんは私とお昼を食べていたというのに。それも熱で数日休んだことで数日ともお昼を一緒に食べたとか。世界の修正力というものか？それよりもアリサちゃんとすずかちゃんがうらやましい。・・・まあ、土日はなのはちゃん

を独占できたから許すとしますか。それにいずれは同志となるのだから恨むのは筋違いか。そう思うと今すぐに会いたくなってきたな。

「今日はふたりとも何か用事でもあるの？ ないのなら今からでも会いたいのだけど…」
「ああ、うん。そうだね♪今から訊いてみるよ」

そう言つてなのはちやんは携帯電話を取り出して、操作する。終始ニコニコなのはちやん。友達同士が友達になるのが楽しみなのだろう。その気持ちはどこことなく分かる気がする。私も前世で読んだ漫画でいまだ接点のないキャラクターが友達になつていくのを楽しみにしていた記憶がある。・・・あれ、少し違うか。

「あゝアリサちゃんからメールが来たよ」

「はやい！」

まだメール送っていないというのにこの速さ。アリサちゃんになのはちやんポイント10Pを上げよう。

「えつとね・・・ひまだから今から会えないかな、つて。すずかちゃんにも送つてるみたい」

「ならいまから翠屋に集合〜♪」

さてと、これからどうやってふたりをなのはちやんの魅力に憑りつかせようか。本当に楽しみだ。


~~~~~

私はアリサ・バニングス。数日前仲良くなった月村すずかっという紫髪のおとなしい女の子と一緒にもう一人の友達高町なのはの家族が経営する喫茶翠屋に赴いた。

それはいい。こつちから暇だから会いたいと言ったのだから。正直友達なんて今までできたことがなかったから勇気を出して送ったのだ。それから翠屋に赴くことになったのだが――

「――という訳で、ふたりはどれがいいと思う？」

「.....」

今日の前に大量の写真。そのどれもに、私の友人なのはが写っていた。

「か、かすみちゃん／＼／＼／」

写っている本人はゆでだこのように恥ずかしがっているのが分かる。それもそうだろう。写真は色々なものがあり、中でも水着写真や寝間着写真なども私だったら絶対悶絶しそうな服装や格好のものが半数を占めている。まあ、残り半分もよくよく見れば家族の思い出のようなものばかりで、どこか親ばかっぽさを感じさせた。

「でっ！どれがいい？」

「うわっ！近いわよあんた！」

急に顔を近づけられてびっくりする。どれがいいと訊かれても、これは少し困る内容だった。

隣を見れば同じように困った表情のすずかの顔がある。

「ええつと、どれかを選べというなら、これかな？」

「つて！何選んでんのよ！」

ちよつとやばい。すずかは少し混乱しているわね。確かにこんな状況で何をすればいいのか、と訊かれたら何がベストなのかはわからないが、少なくとも下着姿の写真を選ぶのは違うと思う。ほら、なのはだつて、あまりの恥ずかしさに湯気が出ているし。というかこれ写真のなのはカメラに気づいてないんだけど。もしかして隠しカメラ？はあ、一体どうすればいいというのだろう。新しい友達が犯罪を犯している状況。．．．あれ？一瞬すずかの瞳の色が変わった気がするけど．．．気のせいかな。

目の前の少女を見る。黒髪黒目の日本人形を思わせる容姿。つまり可愛いのだ。なのはやすすずか、それから自惚れでなければ私もだけど、私たちは結構可愛いと思う。それはまあ周りから言われているというのもあるし、そもそもなのはたちは本当に可愛い。ただそれとは別の可愛さをかすみは秘めている。なのはのような小動物っぽい可愛さやすすずかの色っぽい可愛さ。それとは違う可愛さだ。．．．もちろん、なの

はの写真にデレデレしていなければの話だが。何だかもつたない気がする。

最初は私たちよりもなのはの友達になっっているっていうことが少しばかり気に入らなかった。いや、本当に少しだけで別に私よりもなのはと仲良しなことに嫉妬したとかじゃなく、……ただなんとなくはじめての友達をとられたような気がして。けど実際に会ってみると拍子抜けでなんか気を張り詰めていたこつちが恥ずかしい。

なのはが写真を隠そうとするがそれをかすみが阻止している。なのはは凄く必死なのに対してかすみは凄く幸せそうな顔をしている。たぶん、彼女はどんななのでも好きなのだろう。だから、からかわれているなのも好きということだ。

私は目の前の光景からテーブルにある多量の写真に目を移す。正直ここまで量を撮り溜めていることに呆れかえるしかなかった。私服姿なのは。髪を下したなのは。逆にサイドに髪を結ったなのは。寝ぼけたなのはにシャッター光に目を細めるなのは。色々あり過ぎてちよつと笑えてきた。なんだか新鮮というか、五六年の短い半生でこれだけの思い出があるということに素直な驚きも混じっていた。

ふと、一枚の写真が目につく。それを手に取って目の前に持ってくる。もし、どれか一枚を選ぶとすればこの写真かな。

「アリサちゃんはその写真にしたの？どれ見せて♪」

「あつ、ちよつとー」

私の手元から写真が離れていく。手にした写真をみるかすみは少し感心した顔になった。

「流石アリサちゃん♪なのはちゃんポイント100Pを差し上げます」

「何そのポイント!!」

気づいたらなのはと一緒に声を上げていた。少し大きかっただろうか。他にお客さんがいなくてよかった。まあ、いてもいなくても悪いことだけど……。まあ、私よりもうるさい奴がいるからいいか。

「ふふふ、説明しよう！なのはちゃんポイントとは、なのはちゃんに対する、愛を測るための数値である！」

「愛って……」

本当に呆れてものが言えない。ん？なのはが顔を赤くしてこちらをちらちらとみている。どうしたのだろうか。

「どうしたのよ、なのは。急にモジモジして」

「え、えつと……」

「ん？どうしたのかな、なのはちゃん。ちょっとか「あんたは黙つときなさい！」」

どうせろくなことを言わないかすみを黙らせて再びなのはを見る。本当にどうしたのだろうか。具合でも悪いのだろうか。かすみからの辱めで熱でも出たのだろうか。そ

んなことを思いながら珈琲の入ったカップに手を付ける。もちろん砂糖ミルク入り。

「え、えつと、アリサちゃんって、私のこと愛してるの?」

口につけたコーヒーを正面に吹き付けてしまった。な、なんてことを急に訊き出すんだこの子は。あれ?でもさつきポイントのことを話していたからその時のか。結局かすみのせいなのね。そう思い前を向くと珈琲まみれのかすみがいた。……まあ、自業自得よね。コーヒーもつたいないことしたけど。

「えつと、アリサちゃん。私、人がふくんだ珈琲をおいしくいただくほど変態ではないのだけれど」

「もちろんそんな勘違いしていないわよ!というか変態っていうのは認めているのね!」

「ア、アリサちゃん、結局私のこと好きなの?」

「ああああ!もう、あんたはちよつと素直過ぎ!そんなことあるわけないでしょ!」

「じゃ、じゃあ、きらいなの?」

「それもちがつ!ああああもう!本当にめんどくさい!」

嘲笑を向けるかすみ、泣き顔になるのは。ああああ、誰か話を收拾してほしい!こいつら本当にめんどくさい!いや、友達をめんどくさがるのはどうかと思うし、なのは単体ではいいやつだからこいつが加わると一気にカオス度が上がってしまうのだ。

つまり、かすみが悪い。

「私としては、アリサちゃんがどの写真を選んだのか気になるよ」

今まで黙っていたはずかが急に話し出した。いや、引つ込み思案な彼女にとつて言い出すタイミングはここがベストだったのかもしれないが、私としては早くこの話題から離れてほしいのだ。つて、なのは興味持った顔しているし！

「ふふふ、アリサちゃんが選んだ写真はね・・・ジャガジャガジャガジャン！これです！」

そういつて写真をふたりに見せるかすみ。なのははそれをみて、最初にかすみとした表情とは違つてよくわからない顔をした。ただずか合点が行つたようだ。それは予想外。

「ねえねえ、かすみちゃん。どうして制服姿の私の写真を選んだだけでアリサちゃんが私を愛している理由になるの？」

「だからそこ！愛しているとか言いなさんな！」

「ふえ？なんで？かすみちゃんは”好き”だとか”愛している”とか言えば言うほどともだちになれるつて言っていたよ？」

結局お前のせいか、かすみいい！！してやつたりみたいな顔するなよおお！

「さてと、大分場もあたたかくなつてきたことだし、そろそろこの写真を選んだ理由をア

リサちゃんの口から教えてもらいましょうか」

なんか言い出したこいつ。そんなこと言うとなのはもすずかもなんだか期待するよ  
うな視線を向けてきた。どうしてそこまでそんな目で見てくるのかわからない。いつ  
の間にか逃げ場がふさがれているこの現状。

少し渋ったが、この状況からはどうしても逃げれないと悟り溜息を一つ吐く。そし  
て、自宅で試着でもしたのか、その写真を見つめる。

「・・・私とすずかは、かすみと違っているままでなのはの制服姿しか見ていなかったのよ  
？今回初めて私服を見たし、写真で水着とか寝間着とか、あ、あと下着とかも見たけ  
ど、・・・やっぱり私にとってはなのはらしいと言えば制服姿になるのよ」

まあ、当たり前と言えば当たり前の理由だ。これがどうして愛とかなんだとかに繋  
がっていくのかは正直分からない。そして、キツとかすみをにらむ。

「これはね、なのはちゃん。まだ制服姿のなのはちゃんしか見れていないから寂しいと。  
それでこれからも仲良くなって色々ななのはちゃんを見たい、という潜在欲求の表れな  
んだよ」

「んなわけあるかあ！」

「ふえ？アリサちゃんは私と仲良くなりたくないの？」

「ああああもうちがあーう！」

やっぱりこの二人、というかかすみ存在は私の安穩を妨げるものと確信した。

その後、流石に桃子さんに怒られた。

笑顔でも恐さをだせると初めて知った瞬間である。



## プロローグ② 魔法少女ハーレムなのは計画 草案

アリサちゃんとすずかちゃんと友達になって二年の月日が流れた。原作開始の年だ。まだ春休みだが。

「速いようで速かった。あつという間でした。丁度話数にすると書かれずに飛ばされるくらいには。」

まあ、何もなかったわけではなく、みんなで遊んだり、勉強したり、アリサちゃんやすずかちゃんのお屋敷に行ったり、犬や猫にまつたりしたり、家でまつたりしたり、ハーレムなのは計画の具体案を考えたり、いい案が出ずにムラムラしたり、なのはちゃんの写真で発散したり、色々忙しい毎日を送らせてもらいました。え？何かおかしいだろうって？気のせいじゃないの？

「取り敢えず、今は自宅にいる。今日はおじいちゃんが昼から出かけているから暇。なんでもゲートボールとか。いつもは私も連れて行ってもらうのだが今日はそんな気分ではなかったので遠慮した。たまにはおじいちゃんも友達同士だけでプレイするのもいいんじゃないかと思って。何だか残念そうな顔をしていたけど……。」

ゲートボールがない日は決まっておじいちゃんは面白い話を聞かせてくれる。でか

い魚みたいなやつと戦った時の話とか、迷子になった森で大きな戦艦みたいな遺跡を発見したとか。・・・あれ？おじいちゃんって管理世界の人？でも魔力はない気がするんだよね。というか「魔力がないわしじやがくく」というのがその話をするときの口癖だからないのだろう。よく素手だけで戦ってきたなおじいちゃん。うん、何にしても明らかに管理世界の人だよ。なんでここにいるんだろうか。

とまあ、そんなこんなで暇すぎてどうかなりそうだ。学校の春休みの宿題もすぐ終わったし、なのはちやんは翠屋のお手伝い。アリサちゃんとすずかちゃんは習い事だとか。だから、私だけ暇。序でに、以前働くなのはちやんを撮りすぎていたらしばらく出禁を食らった。親しき者にも礼儀あり。

.....  
暇だ。

取り敢えず、畳から起き上がって伸びをする。この家は純日本家屋って感じで前世では感じられなかった落ち着きを感じる。一步出れば民家なのだが、昔からあるお侍さんの家ということで残っている。おじいちゃんはたしか五代目とか言っていた気がするがまあ、特に関心はない。

「予習でもするかな.....」

学校の予習をすることにした。以前私は一度体験したから大丈夫だろうとたかをく

くっていたのだが、しかし意外と内容が難しい。代数を使えば簡単に解ける問題を違う方法で解いたり、厳密には間違っても小学生に分かりやすくするためにあえて違う表現をしたり、いちいち面倒くさい。つまり、ある程度知識があるものにとつては逆に小学校のお勉強は難しいのだ。だから、予習復習しないと特待生から落ちてしまう。序でに特待生は授業料だけでなく入学料及びその他の設備費等を払わなくてもよいのだ。払うものと言えば修学旅行の積み立てぐらいかな。まあ、私立だけあって高いが。おじいちゃんはお金のことは気にするなどは言つたが、ただにしてくれるのならいい話はない。余り迷惑もかけたくないしね。

と考えながら歩いていると蔵が見えた。

まあ、蔵があるんですねこの家。なのはちゃんの家は道場があるから特に珍しくはないのかもしれないけど。敷地面積で言うところの家はなのはちゃんところより少し狭いぐらい？それでも広いほうだ。蔵があるくらいだし。まあ、お嬢様たちと比べると雲泥の差なのだが。

しかし、この蔵。一度も入ったことがない。別に入るなとかお化けが出るとかそんなことは言われてはいない。ましてや鍵なんて最初からかかってすらいらないと言つていた。泥棒対策はどうしているのだろうか？今まで気にならなかつただけだ。……取り敢えず、入ってみようかな。

庭用のサンダルをひっかけ蔵に向かう。小学生の身とはいえやはりこの蔵は大きい。二階建てぐらいよりは低いが三メートルはあるだろう。幅もなのはちゃん所の道場を少し狭くした感じで、立派な蔵だ。扉もそんなに大きくないが厳かな感じが出ている。

扉に手をかける。開かない。

扉を引く。開かない。

扉を強く引く。開かない。

両手で思いっきり引く。開かない。

体重をかけて両手で思いっきり引く。開かない。

「ちよつ、かたー!」

全くビクともしないこの扉。たとえ小学生の非力な身なれど、流石にここまで固いのはおかしい。これだとおじいちゃんでも開けられないのではないだろうか。これは何かの呪文がないと入れない感じかもしれない。だからおじいちゃんが入るなどは言わなかったのか。そもそも開けれないのだから。そう考えると無性に入りたくなる。

「でも、どうやって入れば……ん?」

ふと下を見ると違和感があった。近づいてみて気が付いたのだが、引き戸になくはならない溝がない。

「……もしかして、これって」

「そう言い、扉を両手で持ち上げる。そして、扉を外した。

「……………  
めつちや簡単に開いたわ。これっていちいち取り外さないと出入りできないのかしら？」

あれだ。よく古墳とかで入口の前にかぶせるだけの石の戸。あれに似ている。この扉の場合は木製で軽く、上下の枠にはめてあるだけの感じ。まあ、開いたことだし入りますか。

中は普通に片付いていた。流石おじいちゃん。几帳面な性格が出てます。ところどころものが倒れないような工夫がしている。箆筒とかはつつかえ棒で固定していて、地震が起きても大丈夫そうだ。ものはたくさんあるが、通りやすいように道を作っており奥に進みやすそうだ。これも流石おじいちゃん。

蔵の中に入る。天井近い小窓と扉からの光しかなく暗い。こういった雰囲気は、何だかわくわくする。古いものの匂い。それはかび臭いにおいだけれど、どこか冒険心をたぎらせる。男の子っぽいと言われるかもしれないが、まあ前世でも子供の時はよく男子どもと遊んでいたからそのせいかもしれない。……今思ったのだが、精神が肉体に引つ張られている気がする。前世を含めると私はすでに三十過ぎだ。それなのに冒険心とか。いや、もちろん大人になっても大事なものはあるが、私はそう言ったも

のを高校の時に完全に捨てたと思っていたのに。

ひとつ目に付く箱があった。白い箱。他のは黒く、わずかな光しかない蔵の中では陰に隠れてしまつて存在感がない。しかし、この箱は少しの太陽光を倍にして反射している。そんな感じを与えてくる。

「・・・」

周りを気にする。誰もいない。

「開けていいかな・・・？」

ちよつといけないことをしている気分になる。べつに何も言われていないのだが、それはつまり中のものを見ていいという訳でもないだろう。もちろんおじいちゃんやメな場合は前もつてちゃんとと言うから大丈夫だとは思ふのだが、なんだかそう思つてしまふ。・・・いや、たぶんこれはそう思いたいのだろう。いけないことをしたい。子供は意外とそう言ったのにあこがれるのかもしれない。いけないことをする罪悪感とそれを上回る好奇心。その二つの感情のせめぎあいこそ子どもをドキドキさせるのだ。

というわけで、白い箱開けました。まあ、色々と考えたけど、結局は好奇心を持つことが子供の特権だからしょうがないということ。

開けたはいいいけど特に何も起こらなかつた。浦島太郎さんみたくならなかつたよ。

それかおおいつつらかちいさいつつらか。大ききからして小さいつつらだと思っただけれどこれで蟲ばっかりだったらいやだなく。

そう思いながらもゆつくりと中身を見る。

そこには、尖った形の水晶があつた。アメジスト紫水晶だ。たぶん。あれだ。ムーオンとかでてきたやつだよ。ちつきく、私の手のひらに収まるくらい。って、勝手に手に取つたけど大丈夫かな？

「なんだろう、これ……」

「Good afternoon, pretty lady♪」《こんにちは、可愛いお嬢さん♪》

「っーしゃ、しゃべっ……あ」

「Ouch! Be careful, please!」《痛いわよ! 丁寧に扱ってよね!》  
急にしゃべりだした宝石を慌てて落としてしまった。幼い子供の声だった。いやいやふつうそうなるでしょ。流石にこの世界魔法があると分かっているにも急にしゃべりかけられたら驚くよ。そもそも実際には魔法はまだ見ていないから知識だけしか知らないわけだし。落としたのは仕方がないことだったのだ……。というか大丈夫だろうか壊れていないだろうか。これって、なんていうのだけ。え、えっと。

「…… Could you pick up me as soon as you

「ickly?」《早く拾ってほしいのですが?》

「え、えつと、．．．はいしません」

なぜしやべるとかなぜ英語なのに意味が通じているのかとか、それはおいておいて取り敢えず拾うことにした。

「え、えつと、．．．しやべれるんだね」

「Yes. Of course!」《ええ、もちろんよ!》

何だかテンションの高い子だ。というか、これつてあれだよ。リリカルな世界のデバイスとかいうものだよ。それもしやべれるというからたぶんインテリジェントデバイス。レイジングハートやバルディッシュと同じ種類の。取り敢えず、訊いてみるしかない。しかし、何故管理外世界の人知っているのかとか、どこまで知っているのかうだとか訊かれるのめんどくさいから、いちいち遠回りの質問をしないといけなくなる。まあ、べつに自分が転生者でこの世界が向こうの世界の作品になっているとか言ってもいいんだけど、精神科か脳外科をすすめられるだろうし、それなら知らないふりして、そして少し頭が切れるようなキャラでいきますか。まあ、そんな場面は少ないだろう。うしいつもは普段通りにしても大丈夫な感じで。

「えつと、色々と質問したいことが多いのだけど．．．」

「Yes, I think so too, because this world i



s Non-TSAB administrator.」《ええ、そう思います。ここは管理外世界であるのだから》

よかった話に分かる子で。取り敢えず、落ち着ける場所がいいということで蔵から出た。もちろん扉はまた持ち上げて閉めたのだが、デバイスから驚かれた。独特な閉め方です、ということ。

まあ、話は居間で聞いた。今はまだおじいちゃんがないから自分の部屋じゃなくてもいいだろうと思つて。

彼女の名前はアルファスデアムゾル。かつこ良きそうな名前だが女性らしい。デアムゾルが高い身分の少女を表しているらしい。訳すると”一番の淑女”だと。なんか違う気がする。長いからアルファスと呼ぼう。

色々な説明をされた。そして、彼女はミッドチルダ出身らしい。もちろんミッド式のインテリジエントデバイスで、魔法使いの杖という説明を受けた。これはもしかしてオリ主フラグですか？ご都合主義展開のテンプレですか？いやいや待て待て、だいたいここで期待させておいて後であなたリンカーコアがありませんよとか言われるパターンだよ。

「訊きたいんですけど、私って魔法使えるんですか？」

「Oh, I expected your saying, I'll make s

ure of your magical nature. Please take  
me in your hand!」《ああ、それは予想してました。あなたの魔力  
資質を確かめましょう。私を手にとってください!》

「ハハハ」

「Yes, and keep your mind, follow my saying  
please. All is below alpha.」《そうです。そして、心を  
落ち着かせて、私の言葉が続けてください。全てはアルファより下である。》

「全てはアルファより下である。」

「Alpha goes up all. The firsts of all have  
the origin, and Alpha is the one of all.」《アルファはすべての先に行く。全てには起源があり、全ての起源はアルファである。》

「アルファはすべての先に行く。全てには起源があり、全ての起源はアルファである。」  
「Thus we must know it. Alpha's damsel, set  
t-up!」《従って、我々はそれを知るべきである。アルファステアムゾル、セット  
アップ!》

「従って、我々はそれを知るべきである。アルファステアムゾル、セットアップ!」

「……と言いか、何この呪文？ パスワードとか？ 長いんだけど。意味もよくわからぬ。とか思っているとなんか紫色の光の柱が立っている気がするのですが、これ他所の人が見たらどう思われるのだろう？ ちよつとそこら辺考えていなかったわね。まあ、そんなことはこの際どうでもよくて、これは魔法が使えるということではないのか？」

「First of all, you should imagine your barrier-jacket and magical stick.」《取り敢えず、バリアジャケットと魔法の杖をイメージしてください。》

「あ、はい」

えっと、どんなのがいいかな？ あまり明るすぎるのは自分の髪型から似合わないのに分かっているし、なら黒系？ 黒系っていうとあれだ。クロノくんのバリアジャケットが思いつくな。ならあれをベースにして、少しかわいい感じにまとめてつと。それから魔法の杖はシンプルにすつと伸びたステッキに先が逆円錐。それに決めたつと。

すると、光がはじめて変身が完了していた。あれ？ 変身シーンは？

「It is complete.」《完成です。》

私のバリアジャケットはクロノくんの服の趣が一切ないゴスロリの長袖ロングスカートでところどころ白と紫が混じっており、杖は黒色で先端にアルファスの待機状態

がはまつっている逆円錐型の枠が取り付けられていた。もう少しクロノくんっぽい想像していたが、まあかつこかわいい感じになっていっちゃいるのだが。

……普段ならうれしく思うのだけど、今はそれどころではない。

「ちよ、ちよつと、ええ〜〜！これでおしまい？うそ?!変身シーンは？あれだけ？一瞬だったよ！服がはじめてどんどん服が現れてつてのがなかったよ!!」

「Transformation scene? There is no problem in particular.」《変身シーン？特に問題はありませんよ。》

「いやいや、あるよ！大ありだよ！魔法少女もので変身シーンがないっていうのはね、陸に引き上げられた魚、風のない鳥のようなものなのよ！」

「I'm sorry, but I can't understand what you mean.」《ごめんなさい。あなたが何を言っているのか理解できません。》

いや確かに意味わからないこと言っているよ。前世でも特に魔法少女もので変身シーンを重要視していたわけではないし、べつに私が変身シーンで素っ裸になりたいわけでもない。でも、今の私にとってはとても重要なことなのだ。変身シーンがない。それはつまり—————

「なのはちゃんの変身シーンが見れないって、ことだよおおおおおっ！」

私は膝をつきうなだれた。

~~~~~

月村すずかです。春休みも残りわずかとなつてまいりました。今はかすみちゃんの家になのはちゃんとアリサちゃんと一緒に邪魔しています。

「かすみちゃん！助けて〜！」

「なのはちゃんの頼みなら全力全開ですべて引き受けるよ！」

「ちよつとかすみ！あまりなのはを甘やかしすぎないの！」

今日集まった理由は残りの宿題を終わらせよう、というもの。去年はアリサちゃんの家で集まったから、今年はまだ行ったことがないかすみちゃんの家にしようということになりました。

序でに言うど、かすみちゃんとアリサちゃんはすべて終わっていて、私は計画通りあと少し。なのはちゃんは……苦手な読書感想文やこくごドリルなどの国語の教科が全然終わっていない。それ以外は全部終わっているのだけど……。涙目のなのはちゃん、いいかも。

「なのは！あんた、去年も言ったけど、ちゃんと計画通りやってたの!？」

「ちよつと、アリサちゃん。言い過ぎだよ」

「いや、これぐらいがちよつどいいのよ、なのはには」

凄く落ち込んでいるなのはちゃん。少しかわいそう。それを必死に写真に収めているかすみちゃんはちよつと騒がしいかも。まあ、かすみちゃんの家だし、しようがないか。後で写真貰おうかな。

「な、なのはだつて、今回は計画通りしようと思つていたよ」

「じゃあ、なんで終わっていないのよ」

「いや、そのね。えくと……にやははは」

「笑ってごまかそうとしても、そうはいかないわよ!」

アリサちゃんがどんどん追い詰めている。またシヨボーンとするのはちゃん。かわい。アリサちゃん頑張れ。．．．．．あれ、私どっちの味方だっけ?

「だ、だって、分らないところが多すぎて」

「分らないところがあつたら、他の人に聞くとかそう言ったことができるでしょ!」

「だ、だからね、かすみちゃんに訊いたんだけど．．．．．」

かすみちゃんの名前が出た途端、場の雰囲気が変わった。．．．．．またかすみちゃんのせいなんだ。なのはちゃんに何かあればそれはだいたいかすみちゃんのせいって言うのが、定着しだしているような気がするのだけど．．．．．。

「．．．．．はあ、．．．ごめんさい、なのは。またかすみのせいなのね」

「ちよ、ちよっと、どうして私のせいになるのよ!」

「あんた。なのはから宿題についてたずねられた時いったい何をしたのよ?」

「別にいつも通りだったよ。取り敢えず、電話で聞いてなのはちゃんの家まで行って、この間作ったメイド服とかゴスロリ衣装とか着せて写真撮影。でそのあと色々変身ものの作品の変身ポーズをしてもらって「何宿題の邪魔してんのよ!」

いいな、かすみちゃん。私もメイド姿なのはちゃん見たかったな。

「というか、なのはもなのはよ!普通に断ればいいじゃないそんなの!」

「にや、にやはははは……」

「……もしかしてだけど、それって毎回？」

「ええそうよ。ほぼ毎日なのはちゃんから電話があつて、もうね、幸せ絶頂の春休みでした♪」

「……なの、今度からかすみじゃなくて私かすみに訊きなさい」

「え？なん「なんでもよ！」……はいなの」

なんだか、アリサちゃんがヒートアップしてきた。いつもは冷静なアリサちゃんだけどころなつてくるとたまに言わなくていいことも言ってしまうことがある。流石に止めるべきだと思ふのだけど。……ちよつと入りづらい。

「ちよつとまつてよアリサちゃん！私から至福の時を奪おうというの！」

「知らないわよあんたのことなんて」

「そ、そんな。確かになのはちゃん魅力的だからと言って、独り占めするのはどうかと思うな！私的独占の禁止及び公正取引の確保に関する法律に違反するよ！」

「独占禁止法ね。なのはものじゃないのよ！もの扱いするあなたよりはちゃんと友達として見る私たちのほうがなののためになるわよ！」

「流石だよ、アリサちゃん！」

かすみちゃんはすぐ笑顔でアリサちゃんをほめた。なんだろうこれ。ぼんぼんと

出てくる漫才みたい。

「いや、冗談で言ったとはいえ、すぐにそんな返しをできるとは思わなかったよ！流石アリサちゃんだ！なのはちゃんポイント200Pを差し上げましょう！」

「……はあ。こいつに何を言っても仕方ないわね」

「おやおや？そんなことを言ってもよいのかな、アリサちゃん？」

そう言つてポケットから何かしら機械を取り出した。それを皆に見せるようにポタンを押す。

『ちよも、ちよつとまつてよアリサちゃん！私から至福の時を奪おうというの！』

『知らないわよあんたのことなんて』

『そ、そんな。確かになのはちゃんが魅力的だからと言つて、独り占めするのはどうかと思うな！私的独占の禁止及び公正取引の確保に関する法律に違反するよ！』

『独占禁止法ね。なのははものじゃないのよ！もの扱いするあなたよりはちゃんと友達として見る私たちのほうがなののためになるわよ！』

カチャ。取り出したのは録音機でした。

「これでアリサちゃんは愛するものとしてなのはちゃんをもの扱いする輩から正義のお説教をした。つまり、アリサちゃんのなのはちゃんに対する愛が再確認できたということだ！」

「かすみ、またそのパターンなわけ？流石に疲れてきたんだけど……」

心底うんざりした顔でローテールに突っ伏すアリサちゃん。こういつた会話はこれで何度目だろうかと数えてみるが少なくとも二十回以上は繰り返しているはず。

「そ、そんなことより手伝ってよ……！」

なのはちゃんの絶叫。さっきのやり取りの間ずっとなのはちゃんは宿題をしていた。手伝いたいのだが、かすみちゃんみたいに手伝ったらなのはちゃんのためにならない。横からアドバイスをするくらいしか私たちにはできることがないのだ。

「さてと、流石にまじめな話をしましょうか。……なのはちゃん、終わりそう？春休みあと一週間しかないけど……」

「……かすみちゃん」

「アリサちゃん、ここは「駄目よ！」なのはちゃんが困っているんだよ！助けようよ！」別に助けるのはやぶさかじゃないんだけど、あんたの場合答えをただ教えているだけじゃないの！本当にそんなんでなのはのためになっていると思ってるの？」

「い、いや。だってね、こんな簡単な問題、どうやって教えたらいいか分かんないんだもん」

「……どうせなのはは、そんな簡単な問題も解けないの」

「あああ、いや違って、なのはちゃん違うの！これは言葉のあやというか」

「かすみちゃんなんて知らない！」

「グフツ！」

かすみちゃんに精神攻撃。効果は抜群だ。かすみちゃんは畳の上に倒れた。かすみちゃんは今にも息絶えそうだ。しかし、アリサちゃんは見て見ぬふりをした。

「さてと、やつぱりここは教え上手なすずかだけが頼りよね」

「すずかちゃ〜〜ん！」

「はいはい、なのはちゃん♪」

まあ、色々とありましたが、結局いつも通りになりました。

「そう言えば、あんた。さつきメイド服とか作ったって言ってたけど．．．．まだ復活してないわね」

「あ、そうなの。かすみちゃんね、洋服作るのとっても上手なの。なんでもかすみちゃんのおばあちゃんのお部屋に布類が多くて、捨てるに困るからってこととかすみちゃんがお洋服にしているんだって」

「はあ、意外な才能ね．．．．」

第一話 魔法少女ハーレムなのは計画 始動

夢を見た。始まりの夢。すべてはここから始まったのだ。

なんて考え深くなってしまった朝。寝起きはいつも通り五時。え？小学生にしては早いって？朝食を作るにはちようどいい時間だと思っただけれど。最初の頃はおじいちゃんを作っていたのだが、台所が悲惨なことになるので今は私が作ることになっていく。まあ、前世でも料理はできるほうだったので別に苦も無くおじいちゃんも味に対しては特に何も言わないので楽といえれば楽である。これって、オリ主系二次創作のテンプレだよ。まあ、だいたいのオリ主が小学生で独り暮らしっていう意味の分からない設定だけど……。

話を早起きに戻すが、ここから学校までちよつと距離がある。だから、歩いて登校するにはちようどいい時間なのだ。え？バスがあるじゃないかって？月一万よ！高い！私のおこづかい半年分が飛んでしまうよ！そんなことに使うのならなのはちやんに着せる衣装を作るのに使う。それが私の信条よ。なのはちやんもバス通だから一緒に登校できるじゃないかって？そんなこと知っているわよ！ただ違う方向だから同じバスじゃないのよ！ちくしよおおおつ！

そんな重要で悔しいことを再確認しながら布団を片付け替え終え部屋を出る。途中居間で新聞を読んでいたおじいちゃんにおはようを言っつて、台所に向かった。

夢はあの夢でした。物語の始まり。男の子が襲われている不思議な夢。なのはちゃんも同じ夢を見てその日にフェレットを拾い魔法の世界へと踏み入れていく。そんな始まりの夢。

……今思っただけど、私なのはちゃんと同じ夢見たんだ。やったー！めっちゃうれしい！確か同じ夢を見てしまうのは同じことを考えているからだとか。やばい朝から頬が緩みっぱなし。

ま、まあ、そんな妄想は取り敢えずおいて、朝食の準備を。いつも通り、ごはんに味噌汁、目玉焼きに納豆と軽くサラダ。おじいちゃんが朝はこれじゃないと調子が出ないらしい。私もその生活に慣れてしまつて朝食はこれ以外を考えられなくなつてしまつた。

さてと本日はどうしますかね。なのはちゃんたちは今日は塾だ。そして、その行きにユーノくんを発見するというのが原作の流れ。

しかし、私は塾には通つていない。これもお金がかかるからという単純な理由で。本当は学校も公立のほうに行こうとしていたのだが、なのはちゃんがいるほうがいいだろうということでおじいちゃんが私立に通わせてくれている。バス代も出そうと言つて

くれたんだけど、ねえ。……まあ、負担をかけたくないので勉強は頑張っています。

だから、そこでの原作介入はたぶんできないだろう。できるとすれば今夜。ジュエルシードの暴走体なのはちやんを襲うとき。

こちらにはデバイスのアルファスがある。アルファスによれば私の魔力資質は魔力量が約50万で推定魔導士ランクはAA?。ジュエルシードがAAかAA?ランクのロストロギアだった気がするからギリで封印できない。魔力量を増やす訓練や魔法の練習はしているのだが、たったの数週間では間に合わなかったようだ。やはりなのはちやんが封印する形になるのだろう。

つまり、私の役目はなのはちやんが絶対に怪我をしないようにすることだ。まあ、それぐらいしかできないとも言えるし、気をぬいたらそれすらもできないということでもある。

そして、私の目標も忘れてはいけない。そう、『魔法少女ハーレムなのは計画』だ。原作のフェイトちゃんやユーノくんなのはちやんとの関係はどこか期待させてくれるような気がするが、私はそれ以上の数をなのはちやんに熱中させたい!男も女も関係なしに!なのはちやんに恋い焦がれる!そのための第一段階は現在も継続中だ。

と、ごはんが炊けたので朝食にしますか。

そう言えば、なぜアルファスはおじいちゃんの家にあつたのだろうか？やはりおじいちゃんが管理世界の住人だからかな？でもおじいちゃん魔力ないから使えないし疑問が。アルファスは何も覚えていないとしらを切っているが明らかに何かを隠している。まあ、なんとかなるだろう。

料理を居間に運び並べて手を合わせていただきます。今日もごはんはおいしいです。別に私が作ったからじゃないよ。誰かと食べるのがとてもおいしいから。

~~~~~

「将来か……」

そんな言葉が口から出る。先程の授業。将来の仕事について。深く考えたこともあれば、しかし答えが出るものでもなかった。今はお昼休み。友達のアリサちゃんとすずかちゃんと一緒にお昼ご飯を食べているところ。かすみちゃんは少しの間職員室で先生とお話し。あとで屋上に来るそうだ。

「アリサちゃんとすずかちゃんは、もう結構決まっているんだよね？」

「うちは、お父さんもお母さんも会社経営だし、いっぱい勉強して跡を継がなきゃ。……ぐらいいだけど？」

「私は機械系が好きだから、工学系で専門職がいいな、と思っているけど」  
「そっか、・・・ふたりともすごいよね」

無意識のうちにうつむいてしまう。たぶん、こんなにも具体的な将来の夢がある友達二人が少しうらやましくて。

「でも、なのはは喫茶翠屋の二代目じゃないの？」

「うん、・・・それも将来のヴィジョンの一つなんだけど・・・」

私が翠屋で働く姿を想像する。今でもお店のお皿洗いや給仕を手伝うこともあるし、何より働く両親の姿を間近で見ってきたから他の仕事よりも具体的にイメージができる。あそこでお客さんの接客をしコーヒーを入れたりケーキを作ったり、時々クリスマスの時みたいな書き入れ時に忙しくて徹夜したり。瞼を閉じれば将来あの店にいるのがたやすく思い浮かぶ。

だけど、

「やりたいことは何かあるような気がするんだけど、・・・まだそれが何なのかはつきりしないんだ。私、特技も取柄も特にないし」

「バカチンツ！」

大きな声とともにレモンが飛んできた。驚いて顔を上げるとアリサちゃんが立ってこちらを睨んでいる。



「自分からそういうこと言うんじゃないの!」

「そうだよ!なのはちゃんにしかできないこときつとあるよ!」

すずかちゃんからも彼女にしては大きな声でアリサちゃんの言葉にうなずいた。

「だいたいあんた!理数の成績はこの私よりもいいじゃないの!それで取柄がないとはどの口が言う訳!」

飛び掛かるアリサちゃん。逃げようとしたのが逆に背中から押さえつけられて口を引つ張られる。

「ひ、ひたいよ!あふいらちゃん!だった、なによは、ふんへいひはてやし!」

「ああ”ん!」

「はいくもにはてはし!」

「ちよ、ちよつとふたりとも!だめだよ?ね、ねえつてば!」

「何してるの?三人とも?」

私たちとは違う声でした。みんなそっちのほうを向くと、お弁当を小脇にカメラを構えたかすみちゃんがいた。カメラから絶え間なくシャッター音が聞こえてくる。

「はふみひゃん!はふはてー!」

「ごめんね、なのはちゃん。何言っているのかはわかるけど、今可愛く撮れているからちよつと待ってね」

自分で言つといてなんだけど分かるんだ。

「……………あんたもたいがいね」

そう言つて私を開放するアリサちゃん。ううゝ、お口がちよつと伸びたよ。

「あれゝ？そんなこと言えるのかな、アリサちゃん。周りに人集めて、なのはちやんとイチャイチャする人には言われたくないな」

「な!？」

口元をなでながら周りを見ると、確かに学校のみんなが面白そうなものを見るかのように集まっていた。

「い、いやこれはっ!」

「流石の私でもここまで人を集めてまではしないな。と言う訳で、アリサちゃんになのはちやんポイント30P」

「ちよ、あんたは黙つときなさい!これは全部なのはのせいよ!」

そう言いこちらを指さすアリサちゃん。そこで面白いことを思いついた。少しだけ体を起こしアリサちゃんのほうに斜めに体を傾ける。顔は少しそらし軽いこぶしを口元に添える。

「あ、アリサちゃん。なのはのここと愛してくれるのはうれしいんだけど、ちよつとゴ—インだったの」

「ちよっ！ちがつっ！うわああああああつ！／＼／＼」

あつ。アリサちゃん崩れ落ちた。うなだれて顔は見えないが、真つ赤な耳が髪の間から出ている。すずかちゃんが遠いものを見るようにアリサちゃんを見ていた。なのはの口を引つ張ったお返しなの！かすみちゃんから教わったアリサちゃんをノックアウトする方法、覚えていてよかつた♪ポイントはしゃべりながら恥ずかしそうにチラツチラと視線を動かすこと。

「ぐふっ！」

微笑むと、今度はかすみちゃんも崩れた。

「え？え！な、なんでかすみちゃんも!？」

「……な、なのはちゃんの、悪戯っぽい笑顔に、……やられ（ガクツ）」

「ちよ、ちよつと、かすみちゃん！かすみちゃんああああああん！」

ふたりが復活するまで少し時間がかかりました。

「そ、そう言えば、かすみはなんで職員室に呼ばれたの？」

まだ少し顔が赤いアリサちゃんがかすみちゃんのほうを疲れたように訊く。今度はかすみちゃんも入れてお弁当を一緒に食べている。

「あ、ああ、あれね。えっと、春休みの自由研究があつたじゃない？それで呼ばれたのよ」  
「あれ？何か問題でもあつたの？」

「すずかちゃんが不思議そうに訊ねる。」

「問題というか、逆で……」

「？何よ、歯切れが悪いわね。あんたの自由研究がどうかしたのよ？」

「たしか、かすみちゃんの自由研究つて、重力定数がどうとかつて話だつたよね？」

「ああ、うん。振り子を使った重力定数の求め方。えっとね、それがなんだか大学の先生に好評で、生徒たちの実験の見本にしたいとかで……」

「……やつぱりかすみちゃんもすごいな。そう言えばこの間先生がかすみちゃんのことを「この学校始まつて以来の神童」と言つていたのを小耳にはさんだことがある。さつきアリサちゃんは私が理数の教科がすごいと言つてくれたけど、正直な話かすみちゃんには敵わないんだよね。学校の点数は同じ満点を取ることが多いけど、私と違つてかすみちゃんは大学の初歩の計算ができると言つてたし。……やつぱり私には取柄がないんだよね。」

「かすみちゃん、すごいね」

「いや、なのはちゃんに言われると先生に言われるより数万倍もうれしいよ♪」

「やつぱりすごいよ……」

「?・・・それより、さっきはどんな話をしてたの?」

私の声が少し暗いの気が付いたのか、話を変えようとするかすみちゃん。けれど、結局それは元に戻るだけで、私に夢がないことを再確認してしまうだけ。

「えっと、将来の夢について話してたの。私は工学系、アリサちゃんは経営関係。かすみちゃんは? 将来何になりたいとかあるの?」

「なのはちゃんのお嫁さん」

「即答かい!」

「にや、にやはははは・・・」

なんだか、想像できてしまうのがある意味怖い気が。でも、それならやつぱりかすみちゃんも将来の夢は決まっていらないのかな。自分だけで悩んでしまったけど、正直まだ小学生だし、そんなに深く考えるようなことでもないのかも。かすみちゃんの夢を聞いたらずし安心した。

「あんたねえ、少しはまじめに答えなさいよ・・・」

「ん、まあ、真面目な話をする、このまま何もなければ理論研究者とか面白そうではないんだけどね」

ズキッ

「理論って、物理?」

「そうそう！特に素粒子や宇宙ってロマンがあると知らない？」

ズキズキツ

「あんた、ときどき男の子っぽいこと言うわよね」

「ええ、女の子が考えてもいいでしょーが。ロマンや夢って言うのは人が恋い焦がれるものなんだよ！それを持った時の人間は本当に素晴らしくうつるものなの」

ズキズキズキツ

「あ、なんとなくだけど分かる気がするよ、かすみちゃん」

「すずかちゃんも工学とはいえ理系だからね。アリサちゃんはどちらかというと文系だしこの気持ちを理解できないんだろうな」

「なによそれ」

「ね、なのはちゃん♪なのはちゃんもそう思うよね♪」

「・・・」

「あれ？なのはちゃん？」

「ふえ？」

気が付くとかすみちゃんが心配そうにこちらを見ていた。

「どうしたの？なのはちゃん。何か悩みごと？」

「あ、えっと、」

「そうそう、それでね！なのはったら、将来の夢が思いつかないからって自分は特技も取柄もないって言うのよ！ちよつとふざけているとおもわない！」

アリサちゃんがまた飛び掛かりそうな勢いで怒鳴りあげる。だって、本当のことだもん。自分には特技も取柄もない。だから、みんなのように何かに対してロマンや夢を感じたりしない。あまり面白くない子。

「……………なのはちゃんはね、やさしいじゃん」

「……………え？」

顔を上げるとかすみちゃんが優しく微笑んでいた。屋上の風はかすみちゃんの髪を流す。その髪は私を包み込もうとしているようだ。そんな気がした。

「なのはちゃんの特技はね、困っている人や悲しんでいる人が困っているって悲しんでいるって気が付くところ。なのはちゃんの取柄はね、困っている人を助けようとするって。悲しんでいる人に話しかけようとするってこと。……………言葉で言うのは簡単だけど、たぶんほとんどの人ができない。それほど難しいこと。でも……………それをできるのはちゃんは多くの人を救える。救われた人はきつとなのはちゃんのこと大好きになる。アリサちゃんやすずかちゃん、もちろん私だって。そうだよね？アリサちゃん、すずかちゃん」

呆気に取られていた二人に言葉を投げかけるかすみちゃん。

「え、ええ、もちろんよ！なのはがいなかったら私たち友達じゃなかったんだから」  
 「そうだね・・・私もただ臆病で引つ込み思案な性格から変わらなかったと思うし」

投げられた言葉を拾って返すアリサちゃんとすずかちゃん。そこには一切誇張がないと思えた。私の勘違いでなければ、三人とも純粋な気持ちをそのまま伝えてくれる。

「それとも、私たちを疑っている？こんなにもなのはちゃんのが大好きなのに」

「・・・・・・・・え、えつと、ごめんなさい」

「そこは謝罪じゃないでしょうが」

アリサちゃんの呆れた声が耳をくすぶる。なんだか今日は、みんなには心配してもらってばかりだな。一生懸命に伝えようとしてくれて、そのおかげで一つ一つの言葉に「大好き」って気持ちが感じられる。なんですぐに気が付かなかったのかな。少し恥ずかしくなってきた。どうしよう。でも、ここまで言ってくれたのだからちゃんと言わないと。小さくて短い、でも確かな言葉。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ありがとう、みんな」



「……………グハツ！」

かすみちゃんが血を吐いて倒れた。

「えーちよ、ちよつと、かすみちゃん!?」

「え?!ほ、ホント大丈夫なの?!ちよ、ちよつと、血が出てたけど!」

「か、かすみちゃんってば!どうしたの?!」

急に倒れるのはいつものことだけど、今回は血を出した。ただ事ではない雰囲気現場が苦しいものになってくる。

かすみちゃんが必死に何かを言おうと口を動かす。焦る私は取り敢えず口元に耳を

近づけてどうにかかすみちゃんの言葉を聞き取ることができた。

「・・・恥ずかしがりながらの、ありがとう、最高・・・」

満足そうな顔からは、絶え間なく鼻血が出ていた。

もう、かすみちゃんなんて知らない。

## 第二話 魔法少女ハーレムなのは計画 実行

念話が来るまで準備をしておく。

といつても、服とかをすぐに着替えれるようにつけてだけなんだけど。

今のところ原作介入はなのはちゃんの補助だけを考えている。だから、防御系・回復系・結界系・拘束系の魔法を先に覚えた。あれ？ユーノくんと同じ立ち位置？まあ、前半はユーノくん怪我で魔力がないから、まあいっか。

普通魔導士は使う魔法に適正の有る無しを伴うらしい。つまり、攻撃魔法が得意な人が必ずしも防御魔法が得意と言う訳ではないということだ。原作のなのはちゃんは防御攻撃回避ともに得意な感じだが、回復系の魔法はほとんど使っているシーンがない。あつたとしても、海上のジュエルシードでフェイトちゃんが無理したときに魔力を分けた、という微妙なラインでだ。

まあともあれ、アルファスとは初戦になるだろう。実際自分自身にあまり期待ができない。アルファスが言うには、魔力量が少ないのは対人戦の場合うまくやれば勝てるが、ロストログア関係の戦闘では明らかに魔力量がものをいうらしい。神様からもらった転生特典もうまく使えば戦闘でも使えるが、それは対人の場合でジュエルシードの思

念体にはあまり意味がないだろう、と思う。

そのとき、ノイズ音が聞こえた。波長の合っていない電波の独特な音。それがだんだんとチューニングされていくかのように、音が男の子の声へと聴こえてくる。

『ローローこえますか？僕の声が、聴こえますか？』

はい、聞こえました。待ってたよ。

「My lady! This is the transmission of mine to wide area!」《お嬢さん！これは広域思念通話よ！》

「だ、だれが、送ってくるのかな？」

ユーノくんが送っています。知っているけどアルファスには内緒なので、そうやって演技しておく。自分でやつといてなんだが、すごく白々しい。

『聴いてください、僕の声が聞こえるあなた！お願いです、僕に少しだけ力を貸してくださいー！』

「I catch where of sender. What will you do?」《場所を特定できたわ。どうするの？》

『お願い！僕の所へ！時間が！危険が！もう！』

そこで念話はプツリと消えた。

「……行こう！アルファス」

ここで行かないという選択肢もあった。原作介入して本来の物語から姿を変えてしまふという恐れもある。危険な思いをして最悪死んでしまうこともあり得た。世界が滅びる可能性も考えられる。しかし、そんな可能性のことはこの際どうでもいい。もちろん重要なことではある。いや、決して無視してはいけないことである。だけれども、なのはちゃんが危ない目に遭っている。優しいなのはちゃんが可愛いなのはちゃんが苦しい思いを辛い思いをしてしまう。私が原作介入をする理由はそれだけでいい。

もちろん、私が死ぬことも世界が滅びることも絶対に阻止する。なぜなら、なのはちゃんが悲しむから。これも理由はそれだけでいい。たくさん理由を考えるのもいいことだが、こちらのほうがシンプルでかつ核心を突いていると思うから。

「取り敢えず、ばれないように、っと」

「誰にばれないようにじゃ?」

「だれって、・・・お、おじいちゃん!」

おじいちゃんが入り口の引き戸からヒョコツと顔をのぞかせていた。あれ?これってなんかフラグ立ってた?

~~~~~

「ご、ごめんなさあああああい！」

パトカーのサイレンが鳴り響く中、私高町なのはその場から逃げ出すのであった。胸に抱くのはフェレットさんと魔法の杖レイジングハート。絶賛今していることは国家権力からの逃亡。悪い人をお世話するのはいいけど、私をお世話してくれるのはごめんこうむりたいの〜！

息が苦しくなつてきても走り続ける。取り敢えず、どこか落ち着けてお巡りさんにも見つかりにくい場所は……。公園！ちかくの公園までとにかく頑張ろう。

「はあ、はふ、はあ、はあ、hあ……。…」

取り敢えず椅子について落ち着く。パトカーは公園の脇を通っただけでこちらに気が付いていない様子。ひとまず安心かな。

「すいません」

「あ、起こしちゃった？ごめんね、乱暴で」

フェレットさんが目を覚ました。先ほどの戦闘、どうやらこのフェレットさんは無理をしていたらしくあの後すぐに意識を失っていたのだが、起きてくれた。

「怪我痛くない？」

「あ、けがは平気です。もうほとんど治っているから」

そう言って巻いていた包帯をほどく。

「ホントだ。怪我の痕がほとんど消えてる。すごい」

「助けてくれたおかげで、残った魔力を治療に回せました」

「よくわかんないけど、そうなんだ。……ねえ、自己紹介していい？」

「あ、うん」

「えっへん♪私、高町なのは。小学校三年生。家族とか仲良しの友達のはなはって呼ぶよ」

「僕はユーノ・スクライア。スクライアは部族名だから、ユーノが名前です」

「ユーノくんか。可愛い名前だね♪」

そう微笑んだのだが、フレットさん改めユーノくんはどこか申し訳なさそうに頭を下げた。

「すいません。あなたを……なのはだよ……なのはさんを巻き込んでしまった」

「あ、その……」

あまりにもすまなさそうに首を垂れるユーノくん。そんな姿に一瞬だが言葉が止まってしまう。そんな悲しそうにしないでほしい。どうにかしてあげたい。そう思ったから、

「えへ♪えっと、たぶん、私平気。あ、そうだ。ユーノくん怪我してるんだし、ここじゃ

落ち着かないよね？取り敢えず、私の家にいきましよう。あとのことはそれから！……ね♪」

~~~~~

「こんなことって……」

私頑張ったよ。おじいちゃんを何とかごまかし、寝室に連れていき一応睡眠魔法で眠らせて、身支度してセットアップして、認識阻害の魔法をかけてそれで空を飛んでやってきました。というか、睡眠魔法とかあったんだ……。やっぱリアルフアスに原作のことを秘密にしておくのは不便かな。

眼下に広がるのは、ぼろぼろになった動物病院。何かしらの戦闘が行われたような光景。しかし、そこにはこの光景を作り出した存在がもうすでにいない。

「……………うそでしょ、ほんとに」

そんな声は爆発騒ぎを聞きつけた野次馬と今も鳴っているパトカーの音にかき消されていた。ゴスロリ調のバリアジャケットが風に揺れる。

今頃なのはちゃんはユーノくんとの自己紹介でもしているのだろうか？それともすでに家に帰っていて恭也さんの説教でも受けているのだろうか？何にしても私が言う



べきことは

「遅すぎたよ……」

空中で肩を落とす。何よ！誰がこんな展開を望んだのよ！誰も望んでないよ！！おいつ！こんな展開にした奴出てこい！！こんな悲劇は私は認めない！いや、悲劇は救いがあるからまだいい。これは惨劇だよ！さ・ん・げ・き！！え？喜劇だつて？なのはちゃん  
の勇士が一切見れなかったのに喜劇であるはずがないでしょが！！分かつてんのか  
こんにやろおおおおおおおつ！！

……むなしくなつてきた。疲れてるわね。……ああもう。見れなかったよ。  
なんなのこれ？本当にこんな仕打ちないよ。……真夜中の出来事、黒い影、狙  
われるマスコットキャラ、魔法の力を手に入れて、活躍、だけどピンチに、そこで登場  
する友人、ふたりの力で敵を封印、そして秘匿すべき魔法、ゆえに秘密を共有するふた  
り、今まで以上に仲良しさんに。……そう妄想していた時が私にもありました。……  
え？今でも十分仲良しだつて？いやね、最近はアリサちゃんとすずかちゃんになのは  
ちやんとられ気味なのよ。なのハーレムが着実にできていくのはいいんだけど、私と  
なのはちゃんの時間が最近めつきり減つててね。一緒にいてもたいていアリサちゃん  
かすずかちゃんがいるし。もちろんふたりともいい子だよ。私もふたりのこと大好き  
だよ。でもねえ、……。

そう言えば最近、アリサちゃんもすずかちゃんもどんなのはちちゃんと仲良くなつてきて、時々私よりもなのはちやんのこと詳しくったりするし、なんだか幼馴染ポジションが脅かされてきたな～。いや、すでにそんなのなか。A・HA・HA・HA・HA・HA・H A . . . . . 。なのはちやんポイントも私だけマイナスだし。これじゃ私だけ置いてきぼりになつちゃうよ . . . . . 。

なんだか久しぶりにネガティブになつてきた。

そもそもなのはちやんの近くに居れるだけで十分幸せというのに、私は欲張つてそれ以上をとろうとしたからこんな仕打ちを受けたのかな？なのはちやんのためだとか言つておきながら結局自分のために、自分の欲望のためになのはちやんを見ようとしているように見える。それつてあれだよ。エゴつて言うんだよね . . . . . 以前アリサちゃんが言っていた独占禁止法のがひしひしと伝わってくる。あの時は冗談だったけど、もしかしたら潜在意識の中になのはちやんをもの扱いしていたのかな？ . . . . . なんだかな、そう思つてくるとひどく自分が醜く見える。なのはちやんとはじめて出会つた時、私のせいで傷つけてしまったし、苦しめてしまったし、ひどくひどく自分のことしか見えていなかった。あのときからなにも . . . . . 。

つて！この話は解決したの！いちいちぐじぐじ考えていたらまたなのはちやんが悲しそうな顔するからダメつて自分で決めたじゃん！どんなときでも、私は私らしく！な

のはちゃんのため私は生きるって決めたんだ！こんなことでまた振出しに戻ってもただ自分を責めたという自己満足だけで終わってしまう！そんなのダメえっ！

よし！かすみ、闇落ちエンド回避!!これはあれだよ、あまりにも落ち込み過ぎたからとかじゃなく、演技だよ！演技！そう、過去に闇があるほうが格好いいみたいよ！失った片目がうずく、とかそんな感じ！って、それ厨二病じゃん!!私厨二病だったの?!いやいや、私はなのはちゃんを愛している！それだけ!!厨二病でも何でもない!!

あれ？なんか話が全然関係ない所に行っている気がする？と、取り敢えず、今日は本当に何の役にも立たなかった。いいですよ。どうせ役立たずですよ。本当にどうしようかな。取り敢えず、原作介入の計画は最初っからやり直しになった。まあ、計画通りに物事が進むほうが少ないんだから、これぐらいじゃへこたれません。

．．．．今思ったのだけど、私が原作介入する意味ってあるのかな？戦闘ではユーノくんと同ポジションになりそうだし。よくよく考えたら原作でなのはちゃんが怪我したのって確かフェイトちゃんとの初戦闘、次元震、あとはA'sでヴィータちゃんとの初戦闘、空白期間での撃墜、ゆりかごでの戦闘、その後の後遺症．．．．普通にありますね。でも、前半だけで見るとひどい怪我がない。もちろんなのはちゃんに怪我をしてほしくないし、後半のは本当はどうなるか分からないからなのはちゃんを守る方向で決定はしているのだけれど．．．．前半は逆に要らないんじゃないのかな？フェ

イトちゃんとの戦闘を通しての話し合い。これはフェイトちゃんを救う上でもフェイトちゃんをなのはちゃんの虜にさせる上でも必要不可欠だ！そうすると逆に、私邪魔な気がするのだけど……。かすみちゃん邪魔！とか言われたら私立ち上がれなくなるんじゃないかな……。

……取り敢えず、今日のところは帰ろうかな。

方向転換しようとしたところで少し目が留まる。大勢の野次馬。こんな時間でもよくこれだけ集まってくるよね、と思うのだが。その中でどこか見たことがあるようなアツシユグレーの肩に流れる長髪。背筋はピンツとしてどこか礼儀正しそう。そして、なんとなく猫っぽい……。目が合ってしまった。

「……」

少し距離があり認識障害もあるのに、バツチリ目が合った。あれ？なんかやばくない？

取り敢えず、……逃げろ！

訳が分からず、取り敢えずやばいというのを理性のどこかが判断した。思い出した！あれは確か双子の猫の使い魔、姉のほうのリーゼアリアさんだよ！なんでここに?! ヴォルケンリッターの皆さんはたしか十月くらいに闇の書から出てくるはずだよ?! こんな

早い時期にそれもこのタイミングでいるとは思わないでしょ！あり得るとしたら、早めの下見？何かしらの不安要素を叩き出して闇の書に集中したいとか？そんなのいつだっていいでしょうに！何故に今日?!

と、取り敢えず、こっちは自分が出せる最速で逃げてきた。あと少しで家だ。目が合つてすぐに逃げてきたし、流石に追つてこれないよね？

後ろを向く。誰もいない。

上を向く。誰もいない。

下を向く。誰もいない。

左右確認。誰もいない。

もちろん、前も誰もいない。

ここでようやく速度を落とす。流石に疲れた。本当の本気で逃げてきたからね。魔力と集中力がない。色々と無駄が多いのだろう。もう家が目の前————

「Lady!」《お嬢さん!》

「へ?・・・ふああ?!」

いつの間にか二本の輪っかに縛られた。はい?!どこから飛んできたの?!目視ではどこにもいないし、アルファスも気づいてなかったみたいだし!

「時空管理局リーゼアリアと言います。あなたに少しでもだけ訊きたいことがあるんですけど」

いつの間にか目の前にさつきはなかった猫耳と尻尾を生やしたお姉さんがいた。

~~~~~

「なのはちゃ〜〜ん!!!」

バスを降りるとなのはがかすみにしがみ付かっていた。

「か、かすみちゃん! どうしたの?」

「昨日辛い目に遭ったから慰めてほしいの!!」

詳しいことは言わなかったが、昨日やりたいことがあつたが他人に邪魔されたとか。そんな感じの話。呆れてものが言えない。

「まったくそんなことでいちいちなのはを頼りにしてたらなのはの身が持たないわよ」

「うう〜〜、ご、ごめんね、なのはちゃん」

「あ、いや、私は別にいいよ♪かすみちゃん身体温かいから気持ちいいし」

「夏場は暑いけどね」

「なのはちゃ〜ん! アリサちゃんがいじめる〜〜!」

「もう、アリサちゃん。駄目だよ？かすみちゃんが泣いちゃうよ」

「はいはい、教室行くわよ」

もう本当にやってられない。

かすみは教室までずっとなのはから離れなかった。それがあまりにも目について他の生徒が奇異の目で見ていた。こいつ昨日は私かなのはとイチャイチャしていた時周りの目がどうたらと言っていたのに人のこと言えないじゃないの！まったく……。あつ、……。いや、別にあれはイチャイチャしようとしてイチャイチャしたわけじゃなく、いやいやそもそもあれはイチャイチャではなくて、ほ、ほらあれ、ものの例えというか、そう！言葉のあやというか、なのはがイチャイチャしてほしそうだからイチャイチャしただけで、つて、ちがつ、イチャイチャじゃない！えつと、これは、そ、そうだ！全部かすみが悪いのよ！かすみがイチャイチャとか、好きだとか、愛しているとか、そんな感じのことばっかりなのはに教えるから、こつちがそれに流されてしまっているのよ！そうよ！全部かすみのせいよ！ああもう！顔が熱い！

「どうしたの？アリサちゃん？」

「っ！な、なのは！な、なんでえ!？」

いつの間にかなのはが目の前で顔を近づけていた。

「いや、アリサちゃん、顔赤いよ？」

その言葉を聴いて、私は教室までわき目も降らず走った。なんなのよ！顔合わせられないじゃない！！

教室につくとすぐあとからさすががやってきた。

「アリサちゃん、だめだよ？廊下を走っちゃ」

「そんなの知らないわよ。全部かすみが悪いのよ！」

子供のような理論だ。ちよつとそれはなく、と自分で思ってもどうも止められない。悪い自分が出てしまっている。なんて情けないのだろうか……。といふかずかも同じバスだから走ってきんじやないのかしら？

すずかは困ったように自分の席に戻る。私も少し腑に落ちないことがあったが席に行きカバンの中の荷物を机に入れていく。教科書、ノート、筆箱……。次々と入れていく。

「あ」

一冊ノートを落としてしまった。とりあえず、机の中のものを入れてからにしよう。落ちたノートを見る。衝撃でページが開いていた。そのページを上になっている。開いたページには、友人たちの似顔絵が……。

「……………うわあああああああつ！」

しまった！こっちのノートを持ってきてしまった！昨日の授業時間中にぼくと友

達の似顔絵を描いたのだ。無意識のうちに描いたものだったからさすがにばれないうようにしてたのに!? 消せばよかったのかもしれないが、描いたものとはいえ友人を消すのは嫌だった。だから、新しいノートに替えたというのに!!

「アリサちゃん、何してるの?」

かすみが現れた。なのははこちらを見ているが自分の席に行つて荷物整理をしている。序でに私の席は窓際、一個飛ばしの隣がなのは、その斜め右後ろがすずかで、なんとかすみは私の前。

「あ、ノート落としてるよ?」

そう言つて拾おうとするかすみ。この後の展開が見えてしまった。「流石アリサちゃん♪なのはちゃんへの愛がこもっているね♪なのはちゃんポイント5000Pだよ♪」と言われていじられる。もしくは泣きまねして「ううう、ここまでアリサちゃんがなのはちゃんのことを好きだったなんて・・・これはなのはちゃん!なのはちゃんも大好きな気持ちを抱き着いてアリサちゃんに教えないといけないよ♪」とか言われていじられる。絶対そんなこと言わせるかああああああああつっ!!!

拾つて持ち上げるかすみの腕からノートをひったくる。

「・・・」

「・・・」

.....
何の反応もなし。これは見られてないわね。きよとんとした顔をしている。本当に何が起こったのか分かっていない様子だ。

「ど、どうしたのよ、そんな顔して？ハトが豆鉄砲でも食らったような顔よ」

ノートをそつと机の中に隠しながらそう言う。よし！私の平穩は無事守られたわ！しかし、このあともこのノートを護らなければならない。そこが問題よね。

「.....ねえ、アリサちゃん？」

「ん？なによ？」

「今のつて、なのはちやんとすずかちゃんと.....私？」

「うわあああああああつ!!!」

本日二回目。顔を押しえて机に突つ伏す。今日もまたこれをネタに一日中いじられてしまう。私の平穩はいつ来るのよ.....

.....あれ？追撃が来ない？

おかしいと思つて顔を上げると、じつと私を見ている。

「な、なによ？」

「いや、その、感慨深いというか、その、私もその中にいるんだ、というか.....」

「はあ？そんなの当たり前でしょうが。なにいつてんのよ？」

そう言うのと今度は目を丸くして驚かれた。なに？こいつ？私友達として思われていなかった？いや、そんなことはない。いつも「大好き」とか直接言ってくるし、三年の付き合いだし。もしかして私から友達として見られていないと思ってたの？……あり得る。あり得るからこそ、なんかむかつくわね。いっつもお気楽に私をいじり倒す癖にそんなこと思ってたの？こつちがどんだけ迷惑かけられているのか分かってないのかしら？ほんとにむかつく奴。

……いや、そうじゃない。たとえあいつが本当にそう思っていたとして、それでも私はあいつに怒っているんじゃない。こつちは友達として見ているのにちゃんと伝わっていないかったことに対して、そしてそんな状況にした伝えなかった自分に対して、むかつく。

「かすみ」

「ん？なに、アリサちゃん？」

「私、あんたのこと大好きだから」

「う

ん。

へ？」

……あれ？あれ！ちよ、ちよつと待って！私大好きとか言っ

しまった！なんで!? あ！かすみだ！かすみのせいだ!! かすみがよく「好き」とか「愛してる」とか言ううしなのはに言わせるしでつい自分の口から言ってしまった! つられて言うみたい!! 何してんのよ、私い!!!

「え、えつと、アリサちゃん? そ、その、あの、えつと……」

かすみの頬がだんだん赤くなっていく。明らかに困惑していた。……こいつ自分が予想した展開じゃないとテンパるんだつた。してやったわ! つて、そうじゃないでしょ!!! 今かすみ明らかに勘違いしているじゃない! 早く誤解を解かないと!!

「ちよ、ちが、えつと、と、友達としてよ! 友達として!! こっちは友達として見てるんだから、しつかり自覚しなさいよね! それとも何? あんたは私のこと友達として見てないとか言うんじゃないでしょうね!」

「い、いや、そんな訳! そ、そっか、友達ね、友達……そ、そうだよね。アリサちゃんにはなのはちゃんがいるし、私にもなのはちゃんがいるし、どっちも先約があるよね。あはははは」

「そ、そうよ! 先約があるものね……って、ちよつと待ちなさい!」
「ふえ?」

こいつはまだ混乱しているのか? それとも素なのか? 狙ってやっているのか? ……いや、今回は狙ってないわね。またきよとんとしているし。これって、一から説明しない

といけないのかしら？頭が痛くなってきたわ……。

「かすみちゃん？どうしたの？」

「あゝなのはちゃん♪なんでもないよ〜」

なのはとずすががやってきた。正直助かった。あのままだとちよつとどうしていいかわかなかつたから。今回のように途中で入ってくれるのは凄く助かる。

「そうなの？」

「そう言えば聞いた？三人とも？昨日行った動物病院で爆発事件だつて。フェレットさんだいいじょうぶかな？」

「？なにそれ？私聴いてないんだけど？」

「あつ、そう言えばかすみちゃんは一緒にいなかったよね。塾の行きにね怪我をしたフェレットさんをなのはちゃんが見つけてね、それで獣医さんに診てもらったんだけど。そこで事故だつて。なんでもガス管が破裂したとかで」

「へえー、そのフェレットさん大丈夫かな？」

「あ、あの、えつと、」

「ん？どうしたの♪なのはちゃん♪」

「そのフェレットさんただけどー……」

私は少し疲れて話を聞くだけにした。途中で相槌とかは打った気がするが、まあ先程

のやり取りが強烈すぎて仕様がなと思う。一応昨日のフェレットがなのはの家で飼えることとフェレットの名前をユーノって名前にしたのは聞いた。

そうして、予鈴が鳴った。

一時間目。国語。正直簡単すぎて詰まらなかつた。

少し欠伸をしていると、前から紙を渡された。見ると

”アリサちゃん、ありがとう。私昨日少し悩んでいたんだけど、アリサちゃんの「大好き」って言葉を聴いて悩んでいたときの不安がなくなりました！本当にありがとう！私もアリサちゃんのこと大好きです。大好きな人に「大好き」って言われるとすごく温かい気持ちになれるよね。だから、私もアリサちゃんに「大好き」ってちゃんと声にして後で言います。アリサちゃんからもまた「大好き」って言ってほしいな♡

あなたが大好きな友達 茅野かすみ”

私は恥ずかしさで顔を机に突っ伏した。
今日も一日からかわれるのか、と違って。

第三話 魔法少女ハーレムなのは計画 再実行

次の日。

次の日っていうのは、リーゼアリアさんに捕まった次の日ね。あの後のことは正直思
い出したくない。ん？何があったかって？な、なに恥ずかしいこと言わせようとしてん
のよ!?!こっちは長時間拘束プレイを強要されていたのよ!?!なのはちゃんならまだ知ら
ず、他の女の人からそんなプレイをされても喜ばないよ!!え?なのはちゃんならいいの
かって?何そんな当たり前なこと訊いてんのよ!?!勿論でしよーが!!そのあとスターラ
イト・ブレイカーで打たれたいよ!!!全力全開を感じたいのよ!!

・・・・とまあ、それはおいておいて。結論だけで言いうと、アリアさんからは
嚴重注意されただけでした。どうしてかと言うと、私がああ爆発事故を引き起こしたこ
とにしたからだ。何故って?今回のことはあまりにも予想外かつ原作大ブレイクの可
能性がありすぎる。そこでいつもは半分以上なのはちゃんに分けていた脳内リソース
も一部そこにまわしてアリアさんにどう説明するかを考えた。

まず前提として、原作関連の知識はいたずらに話さない。正直どうなっていくかわか
らないから。原作の知識は未来予知を超える。それは何が起きるかだけでなくどうし

て起きるかもわかるからだ。それほど強い力。だから、この世界の人たちには例外なく誰にも話さないようにしようと考えている。なのはちゃんが相手でもそう。たとえ迫られても……少し考えるかもしれないけど言わない。もちろん全体として良い方向に誘導はするだろう。なのはちゃんが辛くならない程度でね。しかし、原作知識としては教えない。……まあ、未来を知らないほうが良いこともあるしね。

次に、ありのまま起こったことを話した場合。つまり実際に私が経験したこと。アルファスに出会ったこと、広域思念通話で呼ばれたこと、行ったら誰もいなかったことを言うということだ。しかし、それだとジュエルシード事件に必ずリーゼさんたちが関わってくる。彼女たちも管理局員だからね。忘れていたけどこの時のリーゼさん姉妹は確かギル・グレアム提督とその使い魔として生きる伝説と呼ばれていたはず。つまり、現管理局最強戦力。もちろん彼女たちが戦闘に加わらなくてもアースラを呼んで原作よりも早く来る恐れもあった。そんなことになればなのはちゃんとフェイトちゃんの友情フラグがへし折られてしまうことに。それはフェイトちゃん闇堕ちフラグで、連鎖的になのはちゃんも自分を責めて同じく闇堕ちし、闇の書事件で誰も救えずにバットエンド。……もちろんこれは最も悪いケースであり、可能性の話だ。でも少なからずフェイトちゃんは救えない可能性は高い。救えたとしても時間がかかって闇の書事件に間に合うのか不安である。取り敢えず、リスクが高い気がする。まあ、なのはちゃん

がよりつらい思いをする可能性があったからその時点で言う気はなかったのだけど。

そして、ひらめいたのが、彼女たちの立ち位置を利用しようということ。リーゼさんたちは管理局員であり管理外世界で原因不明の魔法関連事件を無視できない。しかし、闇の書関連があるからあまり表だつて活躍したくない。それなら私が魔法の練習で事故つたと言えば、多少怪しまれても本人が言っているし反省の色も見せるし、そうするとおおごとにはならなくなる。と、思った。

それでも結構穴があるからどうなるかと思ったが嚴重注意といくらかの魔法禁止だけで済んだ。本当は管理外世界での過度な魔法使用はしっかりとした理由がない限り厳罰となるのだが、初犯ということで大目に見てもらえた。あと、魔法の管理外世界での秘匿もしっかりと叩き込まれて初めて解放された。何かあったときの連絡先も教えてもらったが、これは当分使わないだろう。上記の理由でA'sまでは封印かな。

しかし、魔法が使えないのは正直な話私にとっては大ダメージだ。魔法禁止でデータベースの一部が封印。もちろん、一定時間が経てば勝手に消えるのだが……。その期間はどのくらいと思う？一か月よ！一か月!!具体的に、一か月Bランクまでの魔法しか使えない!!私はAランク周辺の魔法ばかり覚えてきたからほとんど使える魔法がない。無印終わるまでほとんど何もできないじゃん!!え?なんで初級魔法を覚えなかったのかつて?それは転生特典の話になるから説明するのが面倒くさい!!べ、べつに

初級魔法のほうが私にとって難しいとかそんな恥ずかしい理由ではないよ？ほ、ほんただよ。

序でに、アリアさんがここにいた表向き理由は休暇で妹のロツテさんと一緒に遊びに来たとか。まあ、ありきたりな建前だよ。知っていない風に見せていたので騙された振りをした。向こうも信じてくれてたようだ。結構私って演技が得意なのかしら？こんど私がお姫様でなのはちゃんが王子様役の劇でも作ろうかな？もちろん逆でも、い・い・け・ど・ね♪

とまあ、それが昨日の出来事でした。あと、アルファスには流石に全部話した。私が転生者であるとかこの世界がアニメになっているとか、まあ色々。丁度なのはちゃんがユーノくんからジュエルシードについての説明を受けるのと同じように授業中念話で。アルファスは最初驚いた感じであったが、協力してくれることになった。これなのはちゃんを守り隊に強力な助っ人が登場した瞬間である。

そして、現在放課後。アリスちゃんとすずかちゃんとは先程分かれた。帰る方向が違うけど、久しぶりのなのはちゃんと二人つきりを味わいたかったので回り道だが途中まで帰ろうと二人並んだ帰宅道。

ジュエルシードが発動した。

「なんで！もっと二人だけの時間を増やしてよ！！いやね、今日がその日であることは知ってたよ。でもね、昨日さんざんな目に遭ってなのはちゃんに一日中甘えたいと思ってる時に限ってだよ！なのはちゃんか「ごめん！今日急ぎの用事があるんだっ！」と嘘をついた時の苦しそうな顔をして走っていったんだよ!?おい、誰だ!?なのはちゃんにあんな顔させた奴!!ジュエルシードゆるさん!!・・・まあ、行っても何もできないんですけどね。」

しかし、今回の私は違う！カバンを開けるとデジカメ。昨日も使うはずであったそれを取り出し、周り見る。そして、今度は特典を使ってセットアップして飛行魔法使って神社へ、レッツゴー。昨日の雪辱をここで晴らそう!!

~~~~~

「リリカル！マジカル！ジュエルシードシリアルXVI、封印!!」

桜色のリボンがジュエルシードの暴走体へと伸びる。光は弾け、そこには倒れた子犬と上から落ちてくるひし形の青い結晶体。封印が成功した。

「これでいいのかな?」

「うん、・・・これ以上ないくらいに・・・」

ジュエルシードをレイジングハートに格納してからそう訊くのはにそのままの感想が口から出た。正直な話、昨日魔法と初めて会った人とは思えない。ランクの高い封印魔法を使えるだけでも凄いとこののに、それに加えて大きい魔力量、それから来る高い防御力、魔法への素早い順応。明らかに魔法のセンスがずば抜けている。

「と、取り敢えず、この子どうしよつか？あの人のだよね・・・たぶん」

なのはが子犬を抱えて階段を上ってきた。気絶して倒れている女性のほうを見る。放つておくのは流石に心配だ。気が付くまでここにいることにしたほうがいいだろう。本当は僕が回復魔法でも使つてあげればいいんだけど、今は魔力が戻っていない。それだからなのはにも手伝つてもらうことになったのだし・・・。

「ユーノくん？どうしたの？なんだか暗い顔してるけど・・・」

「あ、いや・・・なんでもないよ、なのは」

「もしかしてなのはちゃんに迷惑かけたって落ち込んでるの？」

「そうなの、ユーノくん？」

「えっと、その、ごめん」

「べつに謝らないで。ユーノくんのお手伝いしたいって思ったのはなのはだよ。ユーノくんのせいじゃないんだよ」

「で、でも・・・」

「もう！なのはちやんがいいって言ってるでしょ！そんな暗い顔したらなのはちやんが悲しむからNG行為だよ。なのハーレム要員No. 3のユーノくん♪」

『なのハーレム？・・・って、君だれ!?!』

いつのまに！なのはの横にいる黒髪黒目のなのはと同じ学校の制服を着た少女。さつきまではいなかったはずなのに、さも当然のように会話の中に入ってきた。この子はいっいたい。なのも同様に驚いている。しかし、その驚きに違和感が。

「かすみちゃん！ええ!!?どうしてここに!?!」

「ふふふふ、なのはちやんいるところ、かすみありつてね」

「ふええ?」

ええつと。いったいどういう状況なのだろう。この子、僕と普通に話してたよね？フレット姿の僕と。なのとも知り合いのようだし、一体……。

『なのは、なのは』

『あ、ユーノくん?』

『ええつと、この子は?』

『ああ、茅野かすみちゃん。私と同じ小学校の友達だよ』

「どうしたの?急に黙り込んで?念話でもしているのかな?」

その言葉に僕は戦慄した。この子念話のことを知っている。魔法関係者?しかし、管

理局なら最初に現れたときに名乗りあげるし、それが無いってことは管理局とは関係ない人、最悪違法魔導士の可能性がある。

「ふええっ！ かすみちゃん、どうして念話のことを!？」

警戒を高める僕とは違って、驚きながらも親しいものへの表情を向けるなのは。なのはの友人だから別に警戒することもないのかもしれないが、今僕が集めているのはロス・トロギア・ジュエルシード。違法魔導士の手に渡ればどうなることかわからない。

「ふっふっふっふっふっ、私はなのはちゃんのことなら何でも知っている。先月買った下着の色がピンクで少しお子様っぽいと思っではいるけどお気に入り毎日鏡の前でニコニコしていることも。何も無い所で転んで周りを確認しながら恥ずかしそうに立ち上がってその場を後にしたことも。この間怖い夢を見ておねしよをしてみたい桃子お母さんに恥ずかしそうに報告していたことも。．．．全部知ってるよ♪」

「にゃああああああああっ!!」

なのはがその場でうずくまってしまった。．．．うん、しょうがないと思うよ。それは恥ずかしいよね。色々と。というかどうかしてこの子はそんなことを知っているのだろうか？魔法の気配は一切ないから探査魔法や監視魔法ではないと思うのだが。もしかしてレアスキルの類かな？

「あなたは、いったい．．．」

「あ、私は茅野かすみって言います。かすみって呼んでね。ユーノくん」  
「……どうして僕の名前を？」

「ん？だって、今日なのはちゃんか拾ったフェレットさんにユーノって名前を付けたって言ってたから」

「それならどうして驚かないんだい？今もだけど。この世界で動物は基本しゃべらないはず。それなのにどうして？」

「驚いたよ？でもそれはさっきの戦闘中に十分したから今は大分落ち着いているかな」

「魔法に関してまだ。この世界には魔法文化がない。それなのに君は驚いているような様子を一切しない。どういう事だい？」

「……もしかしてユーノくん。私のこと色々と疑っている？」

「えっと、……まあ、一応」

本当はさっきのなのはとのやり取りで大分警戒心は削がれたのだが、一応こちらの事情もあるのでかすみには悪いが少しきつい言いかたばかりをしてしまった。立ち直ったなのも心配そうにこちらを見ている。まだ若干頬が赤いが……。二人にはあとで謝ろう。

「うゝゝん。ユーノくんにどんな事情があるかは知らないけど、取り敢えず私はなのはちゃんの味方。それは絶対に変わらない普遍の原理だよ、それだけは信じてほしいな」



なんだか毒気をぬかれる。こう、真面目な話をしているはずなのに、どこか気の抜けた話し方。少しでも警戒しているのが馬鹿らしくなってきた。

その後、かすみの話を聞いた。春休みにデバイスのアルファステアムゾルと出会った話、それで魔法を練習しだした話、昨日広域思念通話が聴こえたが一緒に住んでいるおじいちゃんに見つかってごまかすのが大変だった話、遅れて着いたらなのはが逃げたのを見た話、管理局を名乗る人に捕まった話——

「——って、管理局員と会ったの!?!」

「あ、うん。休暇だって。でも、今日の朝方本局に帰るとかなんとか」

「れ、連絡先とかは!?!」

「あー、あれね。ちよつとアルファスが調子悪かったのかな? 間違つて削除してしまつたみたいで……」

「I'm sorry. I had errors.」《ごめんなさい。誤作動を起こしたようでした》

「そ、そんな……」

まあ、こつちに來るときに管理局には連絡をしたのだが、回収のための局員派遣は大分遅れるそう。だから、休暇中の局員がいるのなら手伝つてほしかったんだが……。

「そう言えば、なんでかすみちゃんがその警察みたいな人たちに捕まったの?」

「あ、えっと。だって、あれだよ?壊れた電柱、破壊された道路、そこから逃げるのはちゃん。……これってなのはちゃんが犯人のパターンだよ?だから、私が代わりに犯人になったわけだよ」

「え!!……ごめんね。私のせいで……」

そうしてこちらの事情を説明した。ジユエルシードを僕が発見したこと、それが次元船の事故か人為的な理由で墜落し散らばったこと、それを僕が集めていること、なのが助けに来てくれたこと。取り敢えず、昨日までに起きたことを簡潔に話した。最初かすみはうんうんと相槌を打ちながら聞いていてくれたのだが、昨日の話になると暗い顔をしてうつむいた。

「え、えっと、かすみさん?」

「……それで全部?」

「はい。これが昨日までに起きたことです」

「……あのさ、ユーノくん」

「はい?何でしょう?かすみさん」

「昨日のなのはちゃんの活躍……どうだったの?」

「え?えっと、とても初めて魔法にあつた人とは思えないくらいに魔法の才能を感じ」そ

うじゃない「え？」

かすみは顔を上げる。その顔は、すぐく真剣でどんなことを訊かれるのかと戦慄した。かすみの口が開くのを今か今かと固唾をのんで見守るしかなかった。

「……………」  
 「なのちゃんは、格好良かった？それとも可愛かった？」

「えっと、かつこかわいかったと……………あれ？」

予想外の質問に普通のことのように答えてしまった。あれ？僕普通に恥ずかしいことと言わなかった？なのはを見ると少し困ったようなでも恥ずかしそうな笑顔で頬を染めている。不覚にもドキツとしてしまった。顔が赤くなるのを感じる。

「えっと、にやはははは。ごめんね？ユーノくん。かすみちゃんが変な質問して」

「いや、えっと、べつに……………こちらこそごめん」

「ふえ？なんでユーノくんが謝るの？」

「ふふふ、これはユーノくんも落ちたかな？」

「ちよつと！かすみさん!？」

この人がだいたいどんな人なのか分かってきた。かすみは僕にウインクを返してくる。  
 「かすみって呼んで。なのはちゃんを」なのは「って呼んでいるのに私だけ呼び捨て

じゃないのはなんだか違和感があるわ。それと敬語も禁止ね」

それからかすみは今リミットがかかっているためほとんど魔法が使えず、手伝いと言つても後方支援ぐらいにとどまるだろうという話もした。こちらとしても残念だったが致し方ない。そもそも現地の子どもたちに任せている現状に罪悪感を覚える。しかし、今は頼るしかなかった。

~~~~~

「う~~~~ん！やつぱりここは落ち着くの♪」

今日はかすみちゃんが新しくビデオカメラを買いたいということで、四人で電気屋さんに来ています。なのはちゃんは相変わらず家電の匂いを嗅ぐのが好きなようで、猫さんのようにあつち行ったりこつち行ったり。なのはちゃん、可愛い♪

「しかし、急な話よね。まあ、どーせなのはを可愛く取りたいから！とか言うんでしょ？」

「流石アリサちゃん。正解♪撮った動画はダビングしてアリサちゃんにも上げるね♪」

「ちよつと、かすみちゃん~~~~ん／／／」

あ、なのはちゃんが戻ってきた。赤くなつたなのはちゃんは どうしてこんなに可愛いんだろう？ ちよつと世界の神秘だね。あとでかすみちゃんからもらつた写真と今度来る動画を見比べて検証しようかな。

「あれ？ すぐかちゃん、どうしたの？ 難しい顔して？」

「あ、いや、何でもないよ、なのはちゃん♪」

ああ、なのはちゃんが可愛くてどうかなりそうだよ♪ それでいて格好いいところもあるし。アリサちゃんにカチューシャをとられたとき一番に私を助けてくれた。おかげでアリサちゃんとも友達になれた。なのはちゃんと会ってから私にはうれしいことがどんどん訪れてくる。だから、なのはちゃんは天使でもあり王子様でもあるのだけけど、幸せを運ぶ女神様でもあるんだ。

……でも、それを思うたびに感じる痛み。私はかすみちゃんのように積極的なのはちゃんに近づくことができない。それはべつに恥ずかしいからとか奥手とかではなく、単純な理由。

私は人間ではないから。

「……ずかちゃん。すぐかちゃん？」

はつと気が付く。なのはちゃんが心配そうに顔をのぞきこんでくる。心の中を見られそうなほど瞳が近く、私は心臓の高鳴りを感じる。これはちよつとヤバイ。瞳の色が

変わりそう・・・！

「ご、ごめんね。なのはちゃん。それで何の話だったけ？」

顔をそむけながらそう訊く。なのはちゃんはまだ心配そうな顔をしている。

「もしかしてすずかちゃん、具合悪い？」

かすみちゃんも心配そうに近づいてくる。ああ、ちよつとだけ失敗しちゃった。こんな時にいやなことを思い出さなくてもよかったのに……。最近血を呑んでいないから余計に思い出してしまう。

「う、うん。ごめんね。少し立ちくらみがして……。その椅子で休んでるから三人とも買い物してきていいよ」

「ちよつと、すずかだけ一人にさせとくのもいけないわよ」

「そうだよ。私が残ろっか？」

「だめだよ、なのはちゃん。なのはちゃんはかすみちゃんからどんなのがいいか相談されてここにいてるんでしょ？ね、かすみちゃん」

そう言うとかすみちゃんは困ったように頷く。

「ま、まあ、そうなんだけど、……。すずかちゃんが体調悪いなら、帰ったほうがいいのかもね」

「ううん。大丈夫。少し休めば元気になるから……。だからね、なのはちゃんはか

すみちゃんの買い物に付いて行って、ね？」

それでも渋るなのはちゃん。もちろんかすみちゃんの用事もわかっているし、でも私が心配でもある。本当に優しい子。だから、私はなのはちゃんが大好きなんだ。そんな顔しないでほしい。

そんな中アリスちゃんは一つ溜息をついた。

「なら、私がすずかに付き添うわ。だから、かすみとなのははさつさと決めて買っちゃいなさい」

「で、でも、アリスちゃん。私といても詰まんないよ」

「はああ!?何言ってるのよ!友達といって詰まんないことなんてあるわけないでしょーが!!」

その言葉に胸が締め付けられるような気がした。友達という言葉。いい響の関係。結局アリスちゃんの言う通りにかすみちゃんとなのはちゃんはビデオカメラのコーナーまで行つた。そして、私とアリスちゃんは近くの長椅子へと座る。

「ごめんね、アリスちゃん」

「そこは、ありがとう」って言うところよ」

アリスちゃんの言葉にまた胸が苦しくなる。

夜の一族。それは昔から続く吸血鬼の一族。古より人間の血をすすり、生きながらえ

てきた。それを知っているのは一族と少しの人間だけ。私を友達だと思ってくれる三人はまだ知らない。それが「友達」という言葉に対して私が罪悪感を覚える理由。もしも3人に私のことを教えたら、今まで通り接してくれるのだろうか? 私には自信がない。

「ちよつとすずか! 話聴いてる?」

「つーご、ごめん。アリサちゃん。ちよつと考え事してて . . .」

「 言えないこと?」

「え?」

アリサちゃんは少し悲しい顔をする。

「友達の私たちにも言えないこと?」

「 うん ごめんね」

「 そつか、そうよね。友達でも言えないことくらいあるわよね . . .」

アリサちゃんがうつむいてしまった。そんな顔をしてほしくてアリサちゃんやなのはちゃんと友達になったわけではないのに どうしよう? どうすればアリサちゃんは笑顔になるの? このときかすみちやんがうらやましくなる。あれだけのことがあつたのにあんなに明るくできるかすみちやんが

「でもねっ!」

そんなことを考えていると、アリサちゃんがキツとかみつくような勢いでこちらを見た。何かを振りほどくようなその表情。私は怒られるんじゃないかと思つて震えてしまったがその瞳から視線が離せなかった。そして、しばらく見つめあつた後、アリサちゃんがふつと微笑んだ。

「言いたくなつたらいいさいよ。私もなのはもかすみも、あんたの友達だからね。たとえどんなことを聴いてもどんなことを知つても、私はどんなすずかでも受け入れるから」

「アリサ、ちゃん……」

なんだかその言葉は。温かかった。アリサちゃんの顔が赤い気がするが、きつと私も赤いのだろう。だって、まだ春先なのに顔が熱いから。

言つてもいいような気がした。私のこと。夜の一族のこと。でも、まだ少し勇気がでない。でも、それは恐怖から来るものではなく、もつと違う覚悟。今はまだ言わなくてもいい。だって、きつと言うから。それまで待つてね。アリサちゃん♪

「アリサちゃん、……カッコいいの」

声がしたほうを向くと感心した顔のなのはちゃんが立っていた。

「な、なのは！ いつの間に!?! って、かすみはどうしたのよ!?!」

「ん? かすみちゃんはもう買うの決めてレジで店員さんの話を聞いているところ。先に

行っているよって言われたからこっちに来たの。序でにここに来たのはアリサちゃん
がちょうど「友達でも言えないことくらいあるわよね」ってところからだよ♪」

「それって、ほぼ最初っからってことじゃないのおおっ!!」

アリサちゃんが崩れた。一気に顔がより赤くなっている。そ、そこまで恥ずかし
がるところもなんだかどん顔が熱くなってくる。『————私はどうなんすか
でも受け入れるから』いやああああああつ!あれれ!?ちよ、ちよちよちよちよ
と、それって、こここ告白っぽい気がしてきたよ!?

「まあまあ、アリサちゃんかっこよかったよ?ね、すずかちゃん……ってすずかちゃん
大丈夫?」

「え?えっ!あ、うん!?そうだね!アリサちゃんはいっただって私の王子様だから!」

あれれ!?私何いってんの!?!ちよっとうそれば!これこれってどうやったら収集で
きるの!?

なのはちゃん不思議そうな顔をしたが、すぐに微笑んで私の手を取った。てえええ
ええええええええええええっ!なのはちゃんが私の手を!?!なのはちゃんの手やわらか
い。じゃなくて!!

「私もね、すずかちゃんに言いたい。まあ、アリサちゃんが言ってくれたんだけど。私
もどんなすずかちゃんでも大好きだから、ね♪」

「……………ありがとう」

やっこのことで絞り出したのはそんなありきたりな言葉だった。恥ずかしさとうれしさと、色々と混じった気持ちぐるぐると体の中を心地よく回る。ああ、私死んでもいいかも。そう思ってしまうくらいには……………。

「あつ！そうだ。この間ね、かすみちゃんが教えてくれた友達を元気にする方法があるんだ。それをすずかちゃんにしてあげるね♪」

「……………え、えつと、かすみちゃんが？」

「うん♪」

なんだかすごく笑顔だけど、かすみちゃんからって言うのが不安。アリサちゃんはまだぶつぶつ言っているし誰も助けがない。

「え、えつと、なのはちゃん。それって具体的に何をやるの？」

「ん？それはね……………」

そう言つて、なのはちゃんは隣に座り顔を近づけて……………

ペロッ

「ひゃんっ！」

耳たぶをなめられた。

「ちよ、ちよつとなのはちや、ひゃんっ」

なのはちやんが左手で頭を右手で肩を抱いて逃げようとした私を固定する。

「すずかちゃん。頭動かすとなめずらいからじつとしていてね♪」

「ちよ、だから、ひゃん、あ、ひやめて。あんっ、ちよちよつと、あ、だめえ♡」

約十分後。

「えっと、これってどういう状況？」

戸惑っているかすみちゃん。立ち直ったアリサちゃんは顔を真っ赤にさせて、なのはちゃんはすごく満足そうな顔。 私は快樂におぼれて、たぶん半分目が死んでいると思う。

「.」

まあ、なのはちゃんが満足しているなら、いつか♪」

元凶のかすみちゃんの声がこだまする。かすみちゃん、いつか仕返しをするからね

魔法少女ハーレムなのは計画 再考中（閑話休題）

例題Ⅰ　これがイチヤイチャ度八割？だ!!

ーーーーーアリサの場合

私はアリサ・バニングス。バニングス社って言う海外企業の社長の一人娘。将来の夢はその会社を継ぐことよ。今から勉強を必死になつてやつてるわ。

私には大好きな友達が三人いる。この三人とは小学校一年の時から同じクラスでずっと仲良しな四人娘。

高町なのは。喫茶翠屋三人兄弟の末っ子。いつも元気で可愛い私たちのマスコットの立場の子。私たちが友達になれたのもこの子のおかげ。

月村すずか。月村重工業の二人姉妹の妹。おっとりして物静か、私たちが喧嘩したときはよく間に入ってくれる。しかし、本人も時々暴走するわ。

茅野かすみ。一番のトラブルメーカー。お祖父さんと二人暮らして色々大変なことも遭ったけど、本人のお気楽な性格で逆に周りを困らせている。一番困った奴。

そんな色々と笑いあり涙ありの毎日だけど、やっぱり好きな子たちと一緒にいられてるっていうことが一番の幸せだと、私は思う。

「……ごめん。ちよつと現実逃避しすぎて、違うキャラになっていくところだったわ。危ない危ない。」

目を前に戻すと、私の部屋にさつき話した友達がいる。それはいい。それはよくあることだ。だけど、

かすみがなのはをベッドに押し倒していた。

「なのはちゃん……私もう、我慢ができないのだけれど……」

「……かすみちゃん？」

ちよつとどうなってるのよおおおおおおつ!!たしか今日はお茶会に呼んで、それで私の部屋が見たいからとかかすみが言つて、だからそれでここに案内した。そしてこうなった。うん!わかるかあああああああああつ!!どうすればこう言った展開になのよおおおおおおおおおおおつ!!!

膝をなのはの脚の間に入れ、左腕は顔の横に。そうして、かすみは右手をなのはのあごにそつと添える。

「なのはちゃん、……キス、していい？」

「ふえ？」

「ちよおおおおおおおおおつと、待ちなさい!!」

私はかすみをなのはから引きはがした。「やんつ」とか言っていたけど気にしない！こいつはいつたいたい何をしようとしているんだ?!

「あんつ、アリサちゃん。ちよつと、強引だよ♡」

「うっさい!!知るかそんなの!!?」

「なら、私となのはちゃんがキスしようとしたから・・・嫉妬した?」

「嫉妬じゃない!怒ってんのよ!?!私の部屋で変なことすんな!!」

一通り叫んだら疲れた。のどが渴いたわね。飲み物も一緒に持つてくるべきだったわ。

「アリサちゃん。今のだ乾いたって思ったでしょ?」

「・・・それがどうしたのよ?」

床の上に乗ったんと座ったかすみがニコニコ笑っている。これはまだ何か考えているな。

「知ってた?キスつてのども潤せるんだよ?」

私は逃げた。しかし、かすみは私を追いかける。

「あんたはいつたいたい何がしたいのよおお!!」

「最近なのはちゃんとイチャイチャしてなかったから禁断症状が!!キスをしないと死ぬよおおおお!!」

「死ぬわけではないですよおおおがっ!!」

って、私に迫るってことはなのはじやなくてもいいってこと!?!わけわかんないわよ!!
「え、えつと、私ならべつにいいよ。かす「あんた何言ってるの!?!」ふえ?」

私はなのはの両肩を持つ。こいつの常識はかすみに歪められているからおかしいことになっている。私が何とか直さないといけない。

「いい?なのは?キスは大事な人としかしちやいけないのよ?」

「うん。だから、かすみちゃんとはしていいんだよね?」

「いったいどおとおおおおおおなってるのよ!!!」

「あつ、もちろん、アリサちゃんとすずかちゃんとも大事な人だから、キスしていいんだよね?かすみちゃん」

「ふふふふふ、アリサちゃん。もう手遅れなのよ」

いつの間にか後ろにいたかすみが私の肩をつかむ。

「ちよ、ちよつと、や、やめなさいよ・・・」

「ふふ、涙目のアリサちゃんもかわいいよ♪」

そう言つて、かすみの唇が私の唇とかさーーーーなる前に、手のひらにキスをした。
「かすみちゃん、駄目だよ。無理やりは」

なのはの手だった。って、私なのはの手のひらに、キキキキキスしちゃったの!?!

「それにアリサちゃんは、私とキスがしたいんだよね？」

「・・」

「え？」

そう言つてそつと顎を持ちあげるなのは。え？え？え？え？

訳が分からず、真正面のののを見る。もう目と鼻の先に淡い桜色の唇が。

「アリサちゃん、顔赤くして・・・かわいいよ♪」

クスツと笑うなのは。私は口をパクパクさせるだけしかできない。そして、なののは唇が私とかさーんーんーんー

~~~~~

そうして、目が覚めた。窓から入る日差しはさすががしくて気持ちが悪かつた。

私、なんて夢を・・・・・・・・。今日、学校行けるかな・・・。

んーんーんーなの場合は

「あれ？すぐかちゃん、どうしたの？」

ここはアリサちゃんの部屋。さつきアリサちゃんにキスをしたら崩れ落ちてしまつた。全然動かなくなつてしまつたのだ。かすみちゃんはアリサちゃんを必死に写真で

撮っている。

そうして、暇になったので周りを見るとすずかちゃんが部屋の隅でうずくまっていた。

「すずかちゃん？」

声をかけるが全然反応がない。そばによつて体をゆすつてあげて、やつとこつちに気が付いてくれた。

「なのは、ちゃん・・・？」

「そうだよ。どうしたの？すずかちゃん？何か悩みごと？」

そう訊くと、すずかちゃんはまたうつむいてそして頷いた。

「私ね、最近のけ者にされている気がするの・・・」

「え？のけ者って、私たちから？」

「・・・うん。でも、三人がのけ者にしようと思っていないのは分かるの。ただ・・・」  
「ただ？」

「私に勇気がないから・・・。私が壁を作っているから・・・。みんなそれに気が付いて・・・。すずかちゃんが泣き出した。とても静かに、だけど苦しそうに。友達がここまで苦しうにしているのに今まで気が付かなかつた。」

「・・・なのはちゃん、私ここにいていいのかな？」

「っ！もちろんだよ！」

すずかちゃんに抱き着く。今の私にはこれぐらいしかできない気がして。

「すずかちゃんがこんなな苦しんでいるのに、私友達なのに分からなかった。すずかちゃんが壁を作るのはきつと私たちを信じられないから。信じられる友達になれなかった。私こそすずかちゃんの友達失格だよ」

「そ、そんなこと！」

「でもね」

そう言っついていったん体を離す。すずかちゃんは名残惜しそうに服を引っ張るが別には離れるわけではない。すずかちゃんの瞳を見た。紫色のキレイな瞳。

「でもね、私がすずかちゃんのこと大好きなのは、信じてほしいな」

「なのはちゃん……」

すずかちゃんの口から声が漏れる。でも、それには続きがない。まだ、信じてくれないのかな。

「どうしたら、……どうすれば、すずかちゃんに信じてもらえる？」

つい、そんな質問をしてしまった。本当は、いやきつと自分で考えださないとイケなかったんだ。それなのに私はすずかちゃんの気持ちを分かかってあげないと————  
「なのはちゃん」

「ん？なに、すずかちゃん？」

「キス、して・・・」

「え？」

「キスしてくれたら、信じられる・・・かも」

すぐく赤くなっているすずかちゃん。なんだかかわいい。不謹慎かもしれないけど、でもすぐく抱きしめたくなった。

両手をすずかちゃん頬の頬に添え、目線を合わせる。すずかちゃんの顔がさらに赤くなった。

「なら、——」

私はそのまますずかちゃんの唇をうば————

くくくく

携帯のアラームが鳴った。布団からどうにか手を伸ばし携帯のボタンを押す。

朝だ。夢ははつきりとは覚えていないけど、何とも悲しいような、でもすぐく満たされたような、そんな夢だった気がする。

そつと唇に指を当てる。あつ、そつか。私キスしたんだ。誰と？大切な人と。

—————すずかの場合

なのはちゃんがキスをしてくれた。私が落ち込んでいたところにかさず訪れる。やはり、なのはちゃんは私の王子さま。でも、女の子だから、女騎士様？ どういえばいいんだろう？

なのはちゃんはまだ私に抱き着いてキスをしてくれている。甘いような柔らかかような。これが夢なら覚めないでほしい。きつと朝にはまた独りだ。夢は必ず覚めると独り。二人一緒に寝ない限り。

「それなら今度は一緒に寝られるね？」

どこからともなく声が聞こえた。気が付くとなのはちゃんはいつの間にかいなくなっており、場所もアリサちゃんの部屋じゃなくなっている。どこか暗い宇宙のような場所。

「ここは、どこ？ あなたは、だれ？」

「ここは、あなたの中。私は、あなたの憧れ」

そう言うて目の前に姿を現したのはかすみちゃん、だった。いや、髪の色と瞳の色がかすみちゃんとは違う。けど、ひどく似ている。

「かすみちゃんが、私の憧れ？」

そう言うとかすみちゃんはひょうひょうとした表情で頷く。

「そうだね。引つ込み思案なあなたは茅野かすみという自分にはないものを持っている

人物にあこがれを抱いている。しかし、彼女とあなたは一つだけ共通点がある」

「共通点？」

「高町なのはを好きなどころだ」

それは、・・・そうかもしれない。しかし、かすみちゃんのなのはちゃんが好きな気持ちと私のそれとはあまりにも差がありすぎるような気がした。

「ははは、気持ちというのには比べるものではなく、ただ自分の中にあるのを感じることもないんだ」

「？」

すると、景色が薄くなってくる。

「そろそろ目覚めの時だ。そうそう、来週は待ちに待った温泉だね。そのときにまた会いましょう」

その言葉を最後に私は意識を手放した。

~~~~~

目が覚めるといつもの私の部屋。だいぶおかしな夢だった。確かおかしな人で、えっとかすみちゃんか。かすみちゃんを私はあこがれていると。よくわからない。確かに私はかすみちゃんのバイタリティーは凄いと思っっている。私にはない彼女の魅力だ。でも、だからと言って普段の素行を見る限りでは憧れとは違うような・・・。

その前はどんな夢だっけ・・・えっと、確かなのはちやんがいて、なのはちやんに夢だからと思ってお願ひしたんだけど、なんの・・・あれ?あれ!?あれれええええええええええっ!!き、キスしたんだっ!何であんなお願ひをしてしまったのよ!!?いやいやそもそもなんて夢を見てしまったんだ・・・もしかして欲求不満?そうだ!!?かすみちゃんのせいだ!昨日の電気屋さんでのことは忘れていない。あれのせいで私はあんな夢を・・・かすみちゃんにはいつか仕返しをしないと。

―――学校

お昼休み。アリサちゃんとすずかちやんとかすみちやんと一緒にお昼ご飯。いつもの屋上。少し風が強いくらいかな。

「なのはちやん、今日は一日ご機嫌だね。何かいいことでもあったの?」

「あ、うん♪今日はね、夢を見たの」

「ゆ、夢!?!」

かすみちゃんの質問に答えるとアリサちゃんとすずかちやんが驚きの声を上げる。どうしたんだろう?私が昨日の夢の話をしている間ずっと下を見てぶつぶつ言っていた。なんだか顔も赤い気がするけど・・・。

「へえー。そんな夢見たんだ・・・」。アリサちゃんとすずかちやんはうつむいてど

うしたの?」

「いいいいや、べつに。．．．ね、すずか?」

「う、うん、そうだよ。なのはちゃんと同じ夢見てたなんてことないから．．．あ」

「え?すずか、あんたも．．．つて!」

「え?もしかしてすずかちゃんとアリサちゃんもおんなじ夢を見てたの!」

そう言ったこともあるんだ。たしかかすみちゃんが言うには同じ夢を見るのは同じことを考えているからだとか。仲良しの証なんだとか。なんだかうれしいな。ついついほっぺが緩んでくる。

「あ!なら、かすみちゃんも同じ夢見たんじゃ．．．あれ?どうしたの?かすみちゃん?」

今度はかすみちゃんが顔を下に向けてぶつぶつ言いだした。どうにかそれを聴きだそうと耳を近づける。やつのことで聞き取れた。

「．．．．．たしだけ、私だけ、．．．同じ、夢じゃない」

「．．．．．」

今日一日かすみちゃんが拗ねました。慰めるのにとっても疲れました。

例題2 ユーなの？すいません、なのユーっぽいのか思いつかなくて・・・

これは少しだけ先のお話し。

アースラに初めて乗った、その帰りの話。かすみちゃんとはすでに別れて一人と一匹。いや、ふたりだけの帰り道。ユーノくんは私の肩に、いつものように落ち着くように。私はそんな軽い重みに安心するように、だけどいつもよりはずかしい感覚を。それぞれ味わいながら歩いていた。ただ黙々と。

「え、えつと、・・・ユーノくんって男の子だったんだ」

「なののは？それってさっきも訊いてきたよね？」

「あ、あれ？そうだったっけ？」

うんそうだよ、と言って笑うユーノくんは本当にいつも通りだった。なんだかそれが私だけ落ち着いていないような気がして、まだ子供のような気がして、少しむっとした。

「なののはそんなに僕が人間だったことにおどろいたの？」

「それは驚くよ！だって、ずっとフェレットさんだって思ってたんだから。だから、着替えと入浴とか、その見られても何も思わなかったし／＼／＼」

「あ、ああああ！ご、ごめん！本当にその時はごめん!!」

「ううん。別にいいよ。そもそも私たちが誘ったんだし、ユーノくんのせいじゃないよ」

「で、でも・・・」

少し慌てて、そして少し訳なさそうな恥ずかしそうな顔をするユーノくん。ユーノくんの恥ずかしそうな表情を見ると、なんだかさつきまでむっとした気持ちが少し和らいだ気がする。これってもしかして――

「ねえねえ、ユーノくん。話変わるんだけど……」

「あ、うん。なんだい、なのは？」

肩にいたユーノくんを両手で目の前に持つてくる。ユーノくんは先程の顔からいつもの優しい表情をした。お父さん曰く、賢そうな、というのが付きそうな表情。そんなユーノくんを見ると今からする質問はすごく的外れな気がするが、でも悪戯心が上回った。

「ユーノくんって、なにをされたら恥ずかしい？」

「え？……ええええ!?!」

「ほら、何かあるでしょ？例えばお腹をくすぐられるのが恥ずかしいとか、ガムを口から出すのを見られるのが恥ずかしいとか」

「いやいや！何で急にそんなことを!?!」

「ん？私がユーノくんの恥ずかしがっている姿が見たいから、かな？」

「かな、って……」

呆れた顔をするユーノくん。あれ？私ってそんなに呆れられること言ったっけ？ま

たユーノくんが落ち着いた顔してる。むう……。あつ！そうだ！

「ねえねえ、ユーノくん？」

「な、なんだい？なのは……」

ユーノくんが警戒している。私が今からしようとしていいことを読み取ったのかな？私ってそんなに顔に出やすいのかな？でも、悪戯心は止まりません。

「ユーノくん？キスされたら、恥ずかしい？」

そう言つて、ユーノくんの返事を待たずに鼻先へチユツとした。

「……………え？え！ちよ、ちよつと、なのは!?!?!」

最初は何をされていたのか分からなかったような表情から真つ赤つかなお顔になるユーノくん。なんだかこころがすつきりする。こういった時かすみちゃんのアドバイスは役に立つよね♪あつ、そうだ！かすみちゃんがこういった時は、最後までどめを刺さないといけないんだつた。えつと……

私はユーノくんに悪戯つぽい笑顔を見せて、

「ユーノくん……今度は男の子の時に、する？」

♪
フェレット姿のユーノくんがガクツとなった。顔から湯気が出ている。これで完璧

私はユーノくんを抱えて、家へと向かった。

第四話 魔法少女ハーレムなのは計画 記録

私は何をしていたのかな。

なのはちゃんと秘密を共有してから数日。え？ユーノくんもいるって？いや、そんなんだけど、ほらそこは、ね。三人だけの秘密♪ってするよりかは、ふたりだけの秘密♡って言ったほうがいいでしょ。まあ、それは横に置いて、私はそこでやっとなのはちゃん魔法戦闘シーンをカメラに収めることができました。……めっちゃくちやぶれてたよおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!

え？なんで？あんまり激しい戦闘ではなかったよね!?それでも結構動きがあったからそれでぶれてしまったの!?!?!本当に何してんのよ!!!これで三回目だよ?こういうたの!

一度目、なのはちゃんとアリサちゃんとの喧嘩のシーン。熱を出して行けず!

二度目、なのはちゃんの初戦闘シーン。おじいちゃんに阻まれて行けず!

三度目、ぶれてちゃんとした写真がなかった……。二度あることは三度あるとは言うがここまで律儀にまもらなくても……。もしかして呪われている?お祓い行ったほうがいい?

しかし、次はすぐ目の前だ。だから、落ち込んでいる暇など私にはありはしない！ここで、私はひとつひらめいたのだ。ビデオカメラにしようと。これならある程度被写体が動いてもぶれない。何でこんなことを今まで思いつかなかったのよ!!? 私はバカなの？阿保なの？間抜けなの？

これを思いついたのは、前世で見たとあるカード系魔法少女の親友ポジを思い出したからだ。そうだよ！知○ちゃんだよ、○世ちゃん!!一応私も服作れるし、主人公に対する愛も彼女と双璧をなすものだと思負している。まあ、お嬢様ポジシオンはアリサちゃんとすずかちゃんに、ビデオ操作の知識はなのはちゃんに譲るしかないのだが、結構いいアイディアだと思うよ!!これでなのはちゃんの勇士を一瞬の間でも見逃さずにとり収めていく。あれ？でもそっちの話だと、最後ライバルポジシオンの子に完全に取られるんだよね？なのハールム作れるの？・・・ま、まあ、そこは頑張るよ。そもそもなのはちゃんの幸せが最重要項目だからね。・・・べ、別に不安じゃないよ？そうなたら悲しいとか思っていないよ？ほ、ホントだよ？

ま、まあ、取り敢えず落ち着こう。それを何とかするのが私の役目だ。それを考えると他作品の展開なんて関係ない！あつちは見守る愛でこっちは囲む愛だ!!・・・そろそろ話を戻そう。あれから数日経ったんだ。その間なのはちゃんとの魔法の練習を朝や学校終わりにするという本当に幸せな日々だった。ユーノくんもなのはちゃんに対し

て意識しているような気配もあって眼福眼福。あ、もちろんユーノくんの教えは分かりやすくして訓練の時は常に真剣だったよ。ただ帰るときとかに色々と反応を楽しませてもらいました。初々しいとはこのことだね。なのはちゃんはまだ気が付いていない様子だったけど。

そして、今日。この日のために色々と撮影の準備をしてきた。それが何を意味するかというところ。


~~~~~

「あは♪恭也さんだ」

「あ、恭也お兄ちゃん」

着替え終わってプールへ向かうと監視員姿なのはちゃんのお兄ちゃん、恭也お兄ちゃんを見つけた。

「ああ、アリサとかすみか。早いな？一番乗りか？」

恭也お兄ちゃんは、格好いい。もしなのはちゃんがいなかったら私もやられていただろうくらいには。もちろんなのはちゃんがいない世界は考えられないのでそもそもそのような仮定ができないのだが、もしできるとして考えたときという意味でだ。まあ、考えた所で意味はないけどね。

「はい。なのはとすみかはまだ着替えています」

「そうか。ん？かすみ、その荷物はなんだ？」

恭也お兄ちゃんが私の背負っているバッグに気が付いた。

「あ、これですね？・・・これはですね、・・・」

そう言っただけはバッグの中身を恭也お兄ちゃんに見せるように開いた。

「ん?・・・ティツシユ箱三箱とビデオカメラのバッテリーか?バッテリーは分らないが、ティツシユというのは何でだ?」

「もちろん、なのはちやんの水着姿を見たときの鼻血対策です♪」

恭也お兄ちゃんとアリサちゃんが一気に呆れた顔になった。

「あんたねえ、・・・また去年みたいに鼻血流してぶつ倒れるんじゃないでしょうね?」

「いやいや、今回はなのはちやんの水着も普通のを選んだんだし、流石に鼻血出すだけでしょう」

「鼻血を出すのは前提なんだな・・・」

そう、前回は私がいまにも調子に乗りすぎてなのはちやんとある水着を着せてしまった。あれだよあれ、三角ビキニ!それがあまりにもセクシー過ぎたため私は血の出過ぎで気絶。私だけ恭也お兄ちゃんにおぶられて途中で帰るという失態を犯してしまった。そのおかげでなのはちやんの水着姿を覚えていない。今回はその反省も含めてみんなで一緒に選んで買った。言つとくけどめちやくちや可愛いやつにしたからね。本当にかわいいやつ!!今からたのしみだよ。序でに試着の時は私が見れないようにアリサちゃんとすずかちゃんに阻まれた。まあ、店で鼻血を出すのは流石に申し訳ないしね・・・。

「あ、アリサちゃん、かすみちゃん、お兄ちゃん」

「あ、恭也さん」

噂をすればなんとやら！私はすでにセットしていたビデオカメラを声のしたほうに向ける。そこには――水着姿の天使がいた。

「つて！かすみちゃん！鼻血、鼻血！鼻血でてるよ!!」

「おおっとー」

早速鼻血を出してしまった。バッグからティッシュを取り出し詰める。そんな私なのはちゃん心配そうに見てくる。あ、可愛い。もう一度言う、可愛い。もう死んでもいいかも……。死んだらなのはちゃんが悲しむのでやっぱりなし!!

なのはちゃんの水着はピンクを基調とした色合いでトップス・ボトムスのフリルがゆったり感を出しているもの。タンクトップピキニボトムスもスカート状のフリルが付いているやつだよ!!そして、そしてなにより！トップスとボトムスが分かれていることにより見える、可愛らしい、・・・おへそ!!おへそだよ!!お・へ・そ!!それもなのはちゃんのおへそ!!ちよつと、これヤバイよ!!いやだつてあれだよ!!例えばだよ?例えば、あのなめらかな白い肌の上を滑っていると想像しよ?ええ、しばらく滑っているとだんだんと下へ下へと落ちていく。すると、最終的に到達するのは魅惑的で神秘的なおへそ!!!可愛らしくへこんだ、おへそ!!!あのおへそだよ!!なのはちゃんの、お・へ・そ♪あああああああああああああああああああああああああああああああああ

あああああああああああああああああああああああああああああああああ  
あああああああああつ!!!  
あ、鼻血がまた。

「あんだねえ、少しはじちようしなさいよ・・・」

アリサちゃんバツグの中の追加ティッシュを渡してきた。気が付くとさつき詰めたティッシュは真つ赤になっており、先から鼻血がぽとぽと。あ、これ替えないと。

なのはちゃんを見ると後から来たフアリンさんにパーカーを着せられながら顔を赤くしていた。なんでもさっきの私の思考が口から出ていたとか。アリサちゃん曰く、「他人の振りしたかったわ」とか。さっきの私何してんの!!あつ、でも、なのはちゃんの恥ずかしがっている姿が見れたから、さっきの私グツジョブ!!

「まあ、なんだ。折角似合っている水着だ。血で汚すのもなんだろう?」

「そ、そうですね・・・折角のなのはちゃんの水着を汚すわけにはいきませんからね!」  
「いや、お前のことを言っているんだが・・・」

恭也お兄ちゃんに言われ、自分の水着を見る。純白のワンピース風水着、それもふんだんにレースが使われているやつ。は?なんでこんなお嬢様風の水着?それは昨日の話になる。電気屋さんに行った後すちちゃんが折角だからと言って水着を見ることになった。みんな新しいのをすでに買っているというのにもう一度。更に、何故か私が着せ替え人形になってしまって、仕舞にはこの水着を買ってもらった。あ、買っても

らったのはお金がね……。悪いよって言ったんだけど、「私がかすみちゃんのために買いたいと思ったから」とニヤニヤの一点張りでしぶしぶ。それでアリサちゃんが「買ってもらったんだから明日絶対これ着なさいよ」とこちらもニヤニヤで言われて今の状況。正直この髪に合わないと思ったのだが、まあ恭也お兄ちゃんが言うのだから似合っているのでしょう。この人はあまりお世辞とか得意ではないし、とくに似合わないからと言って恥ずかしくすることも無い。まあ、女の子なんだから少しは気にしてしまうけど……。どうでもいい話だけど、さつき着替えの時私が普通にこの水着を着ていたらすずかちゃんとアリサちゃんが悔しがっていたような……。どうしてだろう？

「あれれ？ 恭ちゃん、かすみちゃんにはそんな言葉がすぐに出るのに、私たちにはないのかな？」

「そうですよ、恭也様。みなさん平等にほめてあげないと」

「え、いや、その……」

恭也お兄ちゃんが口ごもる。流石イケメンお兄ちゃんだ。そう、私が『魔法少女ハーレムなのは計画』を思いついたのは恭也お兄ちゃんがすごくモテていたから。それで時々周りの人がお兄ちゃんを取り合う光景を見て、ピンツと来た。これなのはちゃんできやうりたい……。ああ、序でに前に言ったかもしれないが、昔訊あつて高町家に居候をしていたの。で、そのときの光景の一つがさつき言った恭也お兄ちゃんが修羅場つて

るところです。

まあ、今は恭也お兄ちゃんには忍さんっていう彼女さんがいるから、そうそう修羅場展開は起きていないらしい。でも、そのしゃべりと行動にはモテ要素が豊富だ。だから、なのはちゃんにはお兄ちゃんのマネをしたほうがいいよ、と言ったことがある。……どうなったかって？一部だけだけど御神流をなのはちゃんがマスターしました！流石なのはちゃん♪もう素敵♪それで普通の体育が苦手っていうINNO CENTで見たような可愛らしさ。はあ、もう許されるのなら激しく抱いてほしいな♡……え？何かおかしいだろうって？さて？なんのことやら。

「恭也さん、あれはなんですか？あのお立ち台みたいなのやつ」

「ああ、そのまんまだよ。希望者が歌って踊れるステージなんだよ」

「「ええ〜〜つ!!」」

いつの間にか話が進んでいた。ああ、あのステージね。サウンドステージでは確かアリサちゃんとすずかちゃんが歌っていたつけ。折角なんでアリサちゃんが歌っている映像も撮りましょうか。でも、自然な感じで誘わないと……。

「誰か歌う？あつ、アリサちゃんどう？歌わない?」

「な！何で私なのよ、かすみ！」

「だって、アリサちゃん歌上手いでしょ？」

「いやいやすすかやなのはのほうかうまいでしょ！」

「ええええええ！わ、私無理だよ……」

「わ、私もちよつと……」

ああ、そう言えばなのはちゃんの歌もここで聴いてみたいな♪上手なうえに楽しそうに歌うから本当に、大好き♡まあ、無理強いはいけないよね。

「なら、美由希さんかフアリンさんか」

「だめだめ、私歌下手！」

「わたしなんてもつとですう……」

「やはりここは、言い出した方が先陣を切られるべきでは？ね、かすみお嬢様」

「……………」

あれ？」

何かがおかしい。あれ？ここはアリサちゃんが歌うところじゃなかったっけ？

「かすみの歌を聴いてみたい人……」

「……は……は……いっ……」

あれ？えい！ど、どうして歌うような流れに!? あつ！そう言えばこんな流れだった!! アリサちゃんが言い出して全員が無理って言って、それでノエルさんの最後の一言……。忘れてたよ!!? 仕方がないじゃん! だって、アニメとは違ってサウンドステージは数回し

か聞いたことなかったんだし!!それも前世での話だし!!え?私歌うの!?うつそ!これは何かの罫あ!?!これ誰得!?!ホントに!!ここはあれだ、なんとか言い訳を……。

「ええつと、ちよつと今日はのどの調子が……」

「かすみちゃん、歌わないの?」

なのはちゃんがなんだか残念そうにそう言った……。

結局歌って踊ることになりました。……なんだかすかずちゃんとアリサちゃんがすごく満足そうな顔だったのが印象的だったよ。よくわからないけどすごく悔しかったです。なのはちゃんが私のビデオカメラで私を撮ってくれました。なのはちゃんを撮るために買った新しいビデオカメラなんですけどね……。道行く人々が微笑ましそうにこつちを見ていました。本日プールでの最初の感想、すごく恥ずかしかったよおおおとおおおとおおおおつ／／／

~~~~~

かすみちゃんの歌は上手だった。まあ、何度かみんなでカラオケに行つたときに分かつてはいたんだけどね。歌つているときのかすみちゃんは顔を真っ赤っかにしてと

てもかわいかったの♪いつもは周りをからかうことばかりするけど、たまに見る恥ずかしがっている姿もかすみちゃんらしいと思う。かすみちゃんは嫌がるけど、私は恥ずかしがっている姿も大好きだな。

良い声してたわよってアリサちゃんが言ったら「いやいや釘宮理恵ボイスほど感染力はないよ」って言ってたの。釘宮さんってだれだろう？あと、アリサちゃんとすずかちゃん、特にすずかちゃんは凄く満足そうにしていたな。そんなにかすみちゃんの歌が気に入っちゃったのかな？

その後はふつうにプールを楽しんだ。アリサちゃんはノエルさんに泳ぎを教わっていたし、すずかちゃんはお姉ちゃんどちらが速く泳げるか競争していたし、その後かすみちゃん考案の罰ゲームですずかちゃんがさっきのステージで歌ったり、すごく恥ずかしそうな悔しそうな表情のすずかちゃんと満足そうなかすみちゃんの顔が印象的だったり、ウォータースライダーでフリルが少しめくれただけでかすみちゃんがまた鼻血を出したり、ユーノくんが浮き輪を使って泳いだり、私が浮き輪でぶかぶかしているとかすみちゃんが鼻血を出したり、ユーノくんが少しこら辺を見て回ると言って離れたり、流石に血が足りなくなっとかすみちゃんがベンチで休んだり、色々ど・・・。

でも、そんな中で時々思い出すのは、青い宝石ジュエルシードのこと。ユーノくんは今日は気にせず遊んで言ってくれたけど、やっぱり気になる。今どこにあつて発動

してないか誰かの手にわたってないか、色々と考えてしまう。かすみちゃんは今強力なリミッターをかけられていてあまり戦いには参加できない。ユーノくんも魔力がまだ全然戻っていない。やはり私が頑張らないといけないんだ。

ふと視線が気が付く。ノエルさんに膝枕をしてもらいながらベンチで休むかすみちゃんが残念そうにこちらを見ている。にこつと笑って手を振ると、また鼻血を出した。・・・本当に大丈夫かな？

しばらくジュエルシードについて考えていると、突然感覚が波打った。ジュエルシードだ。発動した？

その後すぐに結界が張られる。時間の流れが極端に遅くなる感覚、周りにいた人が次々に消えていく。ゴチンツ！と音がした。かすみちゃんがベンチに後頭部を打ち付けたのだ。・・・ノエルさん消えたからね。たしか結界っていうのは元の空間を切り取って時間の流れを何とかする的事実なことをユーノくんが言っていた。よくは分からなかったが取り敢えず向こうから見て急に消えたように見えるわけではない、と言うことだ。だから大丈夫らしい。よくわかんなかったけど。

「なのはちゃん！」

ふらふらのかすみちゃんがこつちにやってくる。血が足りなくてまだ休んでいないといけないのに・・・。

「かすみちゃんは休んでて!!」

「で、でも……」

「私が行ってくるから、かすみちゃんは待っててね」

そう言っただけで走る。途中でレイジングハートを起動させて、ユーノクンの念話で説明があつて、誰かを巻き込んだ話を聞いた。それがアリサちゃんとすずかちゃんであつたのは本当に驚いたが、ユーノクンの睡眠魔法で眠らしてくれた。それで魔法を打ち込んだのだが……。

「ジュエルシードがない!?!」

「うん、それにまだ気配が残っている」

「って、うわ!!?!」

水の柱が襲ってきた。レイジングハートが防御魔法を張ってくれたおかげでダメージはなかったが、これは少し厄介なの。触手のようにうねうねと攻撃を仕掛けてくる敵。しかし、本体が分からない!

「ユーノくん! こういつた時どうすればいいの!?!」

「ええつと、こういった場合は拘束魔法で敵を止めて戦うしかないんだけど、僕はまだ魔力が戻ってない「チェーンバインド!」って、かすみ!?!」

紫色のチェーンが水の柱を縛り上げる。しかし、それに反して柱は激しい動きでその

鎖を断ち切ろうとした。更に――

「かすみちゃん!? 危ない!!」

残った水の柱がかすみちゃんを襲う。かすみちゃんはもう片方の手で防御魔法を發動。なんとか防いだが、とても苦しそうだ。

「っーなのはちゃん! 私は魔力出力が制限されているからあまり時間が持たないの!? なのはちゃんのほうで拘束を!!」

拘束魔法。今朝練習したのはそれだが、そのときは失敗した。でも、今度はッ!!
「レストリクトロック!!」

~~~~~

私要らなかつたな〜。

すでになのはちゃんがジュエルシードを封印し終わってからそう思う。まあ、だれも怪我がなくて良かった良かった。私もほとんど何もしていなかったから大分回復したし、・・・そんなに早く戻るのかって? 回復魔法ですよ。笑いたければ笑っていいですよ? 戦う前から回復が必要な状況ってことに。それもなのはちゃんに興奮しすぎ鼻血出し過ぎて・・・。いまでは普通に歩いてなのはちゃんのもとに行けるぐらいには回復し

ました。ええ、本当にバカらしいですね！ま、ビデオカメラも一緒に持ってきたから、帰ったらいい動画が見れるけどね♪そう言えばさっきのジユエルシード、サウンドで聞いた時よりなんだか状況が違うような……まあ、あまり聴いてなかったから記憶違いかな。

「あ、かすみちゃん大丈夫？」

「あ、うん。さっきの間回復魔法使ってたから……それよりさっきの拘束魔法何!? 収束系!」

「ああ、なのはが使ってたのは収束系の上位魔法だね。なかなか使い手がない魔法だよ」

「流星なのはちゃん♪たしか収束系ってかなりの魔力や集中力があるんだよね? なのはちゃん疲れたりしてない？」

私もユ一ノくんほどではないがなのはちゃんよりは長く魔法の勉強をしている。だから分かるのだが、収束系の魔法はそれ自体が難易度が高い。周辺に散らばった魔力素を一点もしくは線や面状に集めて固める。特にどういう風を集めるのかによって魔力と集中を要する。私は収束系で使えるのは回復系の魔法のみ。それも使った後はかなりふらつく。しかし、なのはちゃんはケロッとしていた。

「あ、ううん。集中はしたけどそこまで疲れてないよ?」

「うーくん。たしかに魔力はほとんど消費していないね」

「もしかしてレアスキル？」

「そうかも」

「レアスキルって？」

あ、なのはちゃんが可愛く首をかしげる。うなじがキレイに映る。ああ、めっ、つちや天使!!・・・あ、また鼻血が。やっぱりさつきなので鼻血がちよつとばかり出やすくなってるな・・・。

ユーノくんがレアスキルの説明をしている。簡単に言えば、レアなスキル。・・・：簡単すぎって？でも、本当にそれぐらいしか説明ができないんだよね。取り敢えず、定義としては一般に人が持たない・持つことができな<sup>い</sup>技能。これは訓練とか練習とかで手に入るとかではなく、もともとある程度使える人が全く使えない人に大別されるという<sup>イクス</sup>ことを示している。それならX以降のティアナはどうなるのかって？知らないよそんなの！私<sup>が</sup>分かるわけないでしょ!？まあ、そこら辺は追々わかっていくということ<sup>で</sup>・・・。

「まあ、なのはちゃんのレアスキルは魔力を収束させるのにほとんどもしくはまったく魔力を用いないってところかな？」

「うーくん、たぶん、おそらく。もつと色々試さないと分からないけど・・・」

「あ、ついでに私もレアスキルあるよ」

「え？」

あら？ 言つてなかったっけ？ まあ、いいや、そう！ あるんですね。レアスキル。これこそまさに神様からもらった特典だ。

「かすみちゃんのレアスキルって何？」

なのはちゃんが期待するような視線を送ってくれる。うん！ その期待に応えたい！

「私のレアスキル、それは!!」

「そ、それは？」

「一言で言うのなら！……探知不可」

ユーノくんは驚いたような顔をしたが、なのはちゃんはいまだよくわかっていないようだ。もつと正確に言うど”隠蔽”になるのだが、……。

転生する前神様が「一つ選べ!!」と言つてトランプ枚数ぐらゐのカード束を突き出した。抜いたカードには”隠蔽”とだけ書かれていた。はあ？ インペイ？ どういうこと？ どの厨二病？ と最初思つたよ。いやだつて、何が”隠蔽”されるとか、何が”隠蔽”できるとか一切書かれていなかったんだよ！ それでどういつた転生特典なのか本当にわかんなかった。あのときまでは……。

分かつている者もいると思う、そう！ なのはちゃんの御着替え中の写真だ。つまり、

下着姿のなのはちゃん。

当時はまだ小学校入学前で私のなのはちゃんLoveもまだまだ未熟で暴走していた時であつた。なつかしい……。え？今でも暴走しているって？残念。今の私でも引いてしまうくらいに変態でした……。バカだったよ!!……。話を戻そう。その時に転生特典のことを思い出して「もしかして……」と思つて部屋に忍び込んでばれない”イメージ”をしたら、できてしまった。さらにアリサちゃんたちにその写真を見せるまでそのままばれずにいた……。もうやるなよつて？うんやらない。その後おじいちゃんを呼ばれた上で土郎お父さんと桃子お母さんに注意された。その時初めておじいちゃんが怒つた……。もう怒らしたくない。いや、それだけじゃないよ!?!なのはちゃんもさすがに怒つていたから……。あのときのなのはちゃんは怒つてるような恥ずかしそうな涙目で、……。すごくよかつた。いやいや反省してるよ!?!一歩間違えてるとなのはちゃんを悲しませてしまつてたから……。なのはちゃんに誓つてもう絶対にしません!!

とまあ、そんなことがあつて取り敢えず身を隠せるということが分かつたのだが、アルファスが現れてからそれがレアスキルであるということと、また魔力変換資質として魔力隠蔽なるものがあると分かつた。もつと正確に言うると魔力及び視認による探知に引つかからないというものだ。その時のアルファスはうるさかつたなく。魔力反応



がないのに魔法が使えるとか、どちらも前例がないとか、流石お嬢さんだとか。こっちとしては、なのはちゃんのためになるかどうかさえ分かればいいだけなので必要などころだけ訊いて他は全部黙殺した。ただ自分のリンカーコアも隠せるので闇の書事件では襲われなとかはあるけどね。ただ自分と自分の魔法、それから自分が触れているものに対してしか発動できないということ。これでもすごいと思うのだけれど、離れたなのはちゃんを隠して助けるのは不可能だ。だから、なのはちゃんは間違いなく襲われる。

余談だが、リーゼアリアさんに見つかつたのはそれを使わず認識障害の魔法の練習もかねて現場に向かつたから。認識障害の魔法は魔力がある程度ある人には普通に見破れる。つまり、アリアさんには簡単にばれた。そして、その後焦つて使うの忘れて捕まつた。レアスキルと言えど、意識して使わないと使えない。．．．．．いざというときに使えていないって．．．．．私つて凄く無能なんじゃ．．．．．あとこれも余談で、隠蔽魔法の多くはA Aランク。それをレアスキルでAーランク程度の実力で出せるようになっていゝのだが、どっちにしても魔力出力リミットで使えない。．．．．．本当に何もできないんじゃないのかな？

ま、まあ、それは考えない様にしよう。取り敢えず、転生や原作云々を除いてなのはちゃんたちに教えたら、凄く残念なものを見るような顔で見られた。

「かすみちゃんって、そんな希少なちからをそんなことに使ってたなんて…….ほんとに残念なの」

「ぐっ!」

「ま、まあ、姿が隠せるっていうのはすごく便利だよね」

「例えば?」

「え、えっと、潜入調査だったり、相手から逃げるときだったり……」

「戦いには何か役に立つの?」

「…….…….隠れたり逃げたり?」

あれ?今思ったのだけれど、私ってリミットがかかってなくても使えない奴なんじゃ……。使えたとしてもほとんど直接戦闘に関係ない!?…….…….本当に要らない子。

「ああ!ひとつ!一つあるよ!!」

「え?どんなの?」

「隠れて背後からの奇襲!!」

「それってジュエルシード相手でも役に立つの?」

「…….」

容赦ない一言が私の胸を貫いた。魔力出力が制限されているからあまり意味がない

ですね……。

「……どうせ、どうせ、私なんて、無能……。」

「あつ、……ええつと、ほら、かすみちゃん？元氣出して？ええつと、な、なのは別にそんなこと思っていないよ!!なのはかすみちゃんが近くに来てくれるだけでうれしー!!」

「そ、そうだよ！一人よりも二人の方が戦術の幅も広がるし！ジュエルシード封印には直接かかわれなくても……か、かすみも役に立っていないわけじゃないんだよ？」

「いいよいいよ！ふたりして慰めなくても！流石のなのはちゃんでも同情や慰めはいらないの!!いいもんいいもん!!今日はなのはちゃんの戦闘シーンを見て気分を紛らわせるもん!!」

二人が複雑そうな表情をする。でも、仕方がないと思う。私は結構活躍できると思っていたわけだけど、よく考えると戦闘向きじゃないし、幻術が使えるかというとまだ使えないし、つていうかあれランクはそこそただけど魔力量がかなり食われるからほとんどじつとしくしかかないし。今さらながらにティアナってすごいと思うよ。

そんなことを考えながら私は絶好の撮影場所に設置したビデオカメラを手にする。そして、気が付いた。

「あ……」

「ん？どうしたの？かすみちゃん？」

なのはちゃんの声が遠い気がする。だって、  
.  
.  
.  
.  
.

「ビデオカメラの電源入れるの忘れてた〜!!」

ベンチに横になっている時切ってました。

## 第五話 魔法少女ハーレムなのは計画 脇道

なのはちゃんと秘密を共有してから一週間が経とうとしていた。

プールでの一個と学校での一個を合わせて、なのはちゃんが所有しているジュエルシードは五個になった。ん？プールの時は大丈夫だったかって？そうなんですよ。撮影ができていないと気が付いたときの絶望感ほちよつと本気でどうしようかと思いましたがね。ですが！心配無用!!なんと、アルファスが映像を撮ってくれていました！流石アルファス！というかよくよく考えるとアニメとかで映像撮っているのってデバイスでしたね。忘れていましたよ……。最近本当に物忘れが激しいような気がする。特に前世での記憶が。もしかして前世の記憶少しづつ忘れている？ただたんにど忘れ？そもそもすぐに思い出すから大丈夫だと思っただけれど……。心配し過ぎかな？

と、まあその話はおいておいて、アルファスが撮ってくれました！さらにレイジングハートも映像を提供してくれたので、動画編集も完璧♪あ、なのはちゃんにも編集を手伝ってもらいました。え？なのはちゃんがよく許したなって？そこは強引に、ね♡なのはちゃん、機械系の話になると目の色を変えるから、手伝わないと云ったにも拘らずついつい口をはさんでしまつて。それに気が付いて顔を赤くしてそっぽを向く……。

めっちゃ可愛いかったよ〜。ん？ただ撮影し忘れていたのを同情されていただけだつて？……それは忘れて。

序でに、訓練の時間はもちろんちゃんとしたけど、休むのも訓練のうちってユーノくんが言ってたから、それで無理やり共同作業させた♪ああ、無理やりって言葉が何だかいけないことしているような!!ベッドに無理やり押し倒されたのはちゃん!信じていたものからの裏切り!涙目なのはちゃん!そして、震えながら言うの「な、なんで? どうして? どうしてこんなことするの?」って!!……ふう、妄想はそこまでにしよう。もちろんなのはちゃんが本当に嫌がついていたらしないよ。長い付き合いだからそう言った見極めはお手の物。これはまだアリサちゃんやすずかちゃんにはできない私のアドバンテージ♪……まあ、いつかそんなのもなくなるんだろうけども。

学校のジュエルシードでもなのはちゃん大活躍!!今度はビデオカメラとふたつのデバイスを使つての撮影に加え、サーチャーマも使いました!え?魔法の無駄使い?なのはちゃんの活躍が撮れるのに、どこが無駄遣いなのだよ!!ちよつとOHANASHIしようか!?

ああ、そうそう。学校のジュエルシードだけアニメとかではすぐに終わってたけど、校舎の中にまで入ってジュエルシードを探しました。結局見つからず外に出て校舎

全体を覆う封印魔法で丸つと飲み込こんで封印完了。簡単に封印してたけど、流石のなのはちゃんもお疲れ気味……。私が手伝えたらいいんだけど、まだ一か月経ってないからね。まだ四分の一もいつてない。

そして、明日はいよいよあのバカツプルが、じやなくてリア充のサッカー少年とマネジャーの女の子がジュエルシードを発動させてしまう。そして、なのはちゃんは昼間男の子が持っていたのに気が付いたのを気のせいと思い、でもそれは気のせいじゃなくて発動してしまい、自分を責めると……。私はそれを絶対に阻止したい!!もちろん、これはなのはちゃんが自分の気持ちに対してしっかりと向き合う大事なシーンでもある。それによって将来エースオブエースにまでなつて頑張つていけるのだと思う。しかし、それはつまりストッパーが壊れかけているとも言える。人間は無意識下で力をセーブするものだが、原作のなのはちゃんはそれが狂つていたと思う。狂つて無茶が出来る。流石になのはちゃんに無茶はしてほしくない。それならば、例えエースオブエースになれなくともストッパー付きの無茶をしない方向になのはちゃんを向かわせる、と言うのが私の考え。まあ、ストッパーが付いていたとしてもなのはちゃんなら上り詰められるだろうとも樂觀視しているが。それよりも私というイレギュラーもいるんだ。墜落のシーンが大げがじゃ済まなくなる可能性もある。それなら早い段階でその芽を摘みたい。



という訳で、明日はなるべく早起きしてサッカー観戦時のシミュレーションをしておこう。

・・・・・そんなことを思っていた時期が、私にもありました。

まさか寝坊するなんて！あり得ない！目覚まし時計が止まっていたのも充電器のコ

ンセントがぬけていたのも最悪だったが、今日と言う今日に限って、おじいちゃんが朝早くに出かけてしまっていて起こしてくれることもなかった。いや、いつも同じくらい早いから起こす習慣がないのだろうけど……。でもこのままだと遅刻してしまう！ そうなると、昨日考えた完璧無敵のプランが簡単に破棄されてしまう。急いで準備するが、部屋の時計は原因不明の沈黙（きつと電池切れ）を放っている。今度こそ充電されている携帯電話はサッカーが始まっている時刻を示していた。遅れのメールはもうしてある。そして、このままだとサッカー観戦のほとんどを見れないことも確定している。まあ、それはいい。ジュエルシードの確認及び封印を行えばいいのだから。それよりも試合に遅れあまつさえ観戦できなかつたりすれば、アリサちゃんの雷が落ちる事間違いなし。

「そもそも、何で起こしてくれなかったのよ?! アルファス!!」

「I called you over and over again. But no reaction from you」《何度も何度も起こしたわ。だけれども、まったく反応がなかったのよ》

アルファスの言葉を聞きながら取り敢えず、家から飛び出した。あと五分でバスが到着する。すぐの四つ角を右に曲がり、林を抜け、廃墟を横目にしながら走る。

私の住んでいる場所は山側の住宅地。試合のある河川敷のサッカー場までは約20

キ口。バスはあるが自宅の近くのバス停は本数が少なく、今本数の多いところまで足を酷使しているところだ。まあ、多いと言つてもに10分に五台中一台しか向かわない。一つ乗り遅れるだけでサッカーが終わる。

腕時計を見る。あと2、3分以内に着かないといけないとわかる。

四つ角を左に折れ、小川の橋を渡り、病院を横目にしながら通りに入る。バス停が見えた。いや、バスが停まっている！腕時計は時刻表とぴつたり。急ぐ、間に合え！

「え？きやつ！」

「ほわっ!?なっ！」

……横道から急に出て来た車椅子にぶつかり横転。乗っていた少女は目を回して倒れている。停まっていたバスは発車した。そのとき、私は「急がば回れ」という言葉を思い出していた。

くくく

前半戦、サッカーの試合はお父さんのチームが得点を入れてハーフタイムとなった。相手のチームもいいところまで行つたのだが、キーパーがシュート全てを弾くというフラインプレーをして休憩となる。そこで漸くかすみちゃんのメールに気が付き、アリ

サちゃんが爆発していた。

「何よアイツ！毎回毎回呪われてんの!?!あんだけ言つときながら当日遅刻つて、阿保か!?!」

すずかちゃんと二人でアリサちゃんをなだめながらも苦笑してしまう。

かすみちゃんは楽しみにしていた行事のほとんどをまともに参加したことがない。一年の時の遠足も事故を起こし病院へ、一緒に温泉宿に泊まりに行つても途中で発熱し病院へ、海やプールでは鼻血を出しすぎてこれまた病院へ。

「これでまた病院に行ったら、一週間で二回も病院に行くことになるわね!」

「この間のプールも帰る時になって倒れちゃったからね……」

すずかちゃんがなんとも言えないような顔をして眉を寄せる。三人で一緒に溜息を吐いた。

「……かすみつてなのは絡むと……なんというか、よりダメになるのよね」

「あ、うん。言いたいこと分かるよ、アリサちゃん。今日だつて、そうだしね」

「ん?どういうこと?アリサちゃん、すずかちゃん」

こちらを向く二人にそう言うのと、アリサちゃんとすずかちゃんが呆れたように溜息を吐いた。私、何か変なこと言ったのかな?

「取り敢えず、かすみはいつ来れるつて?」

「えっとね、あと三十分くらいだって」

「それって、・・・試合終わるじゃない！何しに来んのよアイツ!？」

アリサちゃんの再熱した声がフィールドに響く。はっと周りを見ると注目されていた。三人で赤くなりながら小さくなつて今度こそ鎮火した。

そこで、携帯の着信が入った。

“なのはちゃんへ”

病院で検査をすることになりました。

応援行けなくなり、本当にごめんなさい。

茅野かすみ”

さてと、アリサちゃんにどう伝えようか・・・。。。

~~~~~

背筋と言わず頭と言わず、冷汗が流れるし思考停止に陥っている今日この頃。いかがお過ごしでしょうか？私は茅野かすみ、絶賛車椅子の少女を押し倒しています。

目の前の少女は美少女でなのはちゃんやアリサちゃんたちと並ぶほど可愛いです。左の前髪にバッテン印の髪留めがアクセントとなつて彼女の愛らしさを引き立ててい

ます。まつげも長いし、鼻もすつと伸び将来美人さんになるでしょう。湿ってつやのある唇なんて齧り付きーっって、こんなこと考えてる場合じゃない!!

「だ、大丈夫ですか!?!」

急いで立ち上がり、呼びかけながら彼女の身体を確認する。反応はないが少なくとも血が出るような怪我はしていない。それが唯一の救いだ。

今度は身体を揺すってみる。反応がない。周りを見る。そこそこ交通量があるというのに歩いている人はいない。車もただ通り過ぎて行くだけ。．．．．．別にやましいことなんて考えていません。電話して救急車を呼ぶか?近くに大病院があるから担ぎ込んだ方が早いかな?を考えていただけです。

「ん、んんん．．．?」

逡巡していると、少女の意識が戻った。

「だ、大丈夫ですか?」

「ん、つと．．．．．えつと、どちらさんですか?」

少女と目が合いながら関西弁イントネーションと敬語の混じった独特の返事を聞く。

「覚えていませんか?先ほどぶつかってしまったものなのですが．．．．．」

そう言いことのあらましを説明していく。少女は最初ボーっとしていたが私の話を聞かされた時に意識がはつきりしていった。徐々に反応を取り戻していく。

「ああっ！あゝあゝ、思い出したわ。って、あんた大丈夫やったんか!?うち、結構なスビード出てたやろ?」

「………すいません。魔法で身体強化して走ってたので無事でした。むやみやたらと使うなどアリアさんに言われたというのに守らなかつたどころか、人を轢いてしまった。車とは行かないが、自転車ほどの力が出ていたと思う。」

「私は大丈夫だけれども、あなたは?私もかなり速く走っていたから」

「うちは大丈夫やけど………あつ」

ん?、と思い少女の向いた方へ振り向くと車輪が拉げた車椅子が倒れていた。頭から血の気がすつと引いた。これほどの力でぶつかったという証拠だ。下手をしたら大怪我だ。少女の顔も引き攣っているように見える。

「ほ、本当にごめんなさい!車椅子弁償します!!身体大丈夫!?早く病院に行こう!!」

「え、ちよつと!」

ろくに返事も聞かずに少女を抱えて近くの病院へ急ぐ。ここが大学病院の前でよかった。今はまだ大丈夫そうだが、急に様態が変わったら怖い。近くならすぐに対処ができるだろうし、そもそも運ぶことも簡単だ。

病院内に入る。入ると大勢の視線にさらされるが気にしないで受付に行く。

突然やってきた私たちに目を見開いた受付の看護婦さんに事と次第を伝える。互い

に走っていたこと、ぶつかかったこと、車椅子が壊れたこと、そのまま病院に来たこと……
etc. 女性は話を聞くと柔和な笑顔に戻り待つように言った。

私たちはソファアールへと向かう。いろいろと落ち着いたからか、そこで漸く少女の視線に気が付いた。

「あ、えつと、ごめん。抱えられるの嫌だった?」

「え? う、ううん、べつに大丈夫やで。ああ、ただそろそろ降ろしてくれへんか? 結構視線が集まつてるからな」

「視線? 私は別に気にしないけど」

「うちが気にするんや!!」

すぐに検査室に行けるようにと思ったのだが、顔を真っ赤にして言うので、そのまま少女を椅子に下ろす。魔法を使っていたから私は平気だが、抱えられたままだと彼女が辛いかもしれないね。周りの人たちが微笑ましいものを見るようにこちらを見ているが、なぜだろう? 見当がつかない。

序でに、車椅子は病院の人が取りに行ってくれるようだ。車椅子どうするか失念していたから助かった。

「それよりも自分、結構力持ちなんやな。急にお姫様抱っこされたときはビビったけど、なんやすつごい安定しとったしあつたかいしで安心してもらたわ。それで速いと来た。

見た目普通の女の子なのに、まるで魔法でもつこーとるような」

少しまだ赤いが可愛らしく少女は微笑む。しかし、私の心臓は一回ビクリと大きく鳴った。

「え！えつと、ま、まあ、普段から鍛えてるからね？こ、これくらい余裕だよ？魔法なんて使つてないよ？ホントだよ？」

「ん？どうしたんや、急に慌てて？」

あ！阿保だわ自分。こんな怪しく否定しても意味ない！な、なにか話題をそらさないといけない。

「な、なんでもないわ！それより私たちまだ自己紹介がまだだったわね。私、茅野かすみ。かすみでいいわ。あなたは？」

「そ、それもそうやな。うちは八神はやて。よろしゅうな」

捲し立てるように言うと、はやては少し引き気味に答える。よかった。反省したすぐ後に魔法を使うなんてちよつと動揺していたようだ。それで追及されるとは、目も当てられない。まあ、追及は逸らせたからいいが……。つて、あれ？八神はやて？…………はて、どこかで聞いたことあるような名前だが…………思い出せん。

顎に手を当て考えていると、後ろから慌てた声がかかった。

「はやてちゃん、大丈夫!?轢かれたって聞いたけど……………」

「石田先生、さつきぶりです。轢かれた言うんはちよつと大袈裟ですが」

「・・・ほ、ほんどね。どうやら大丈夫そうね。だけど、一応検査はしてもらいわ。・・・で、えつと、それでその子は？」

こちらに気がつく女性。私は自己紹介と事情説明をする。もちろん魔法のことは伏せて。はやてもどころどころ補足してくれる。

そこで初めてはやての方の事情を聞いた。どうやら急に車椅子の調子が悪くなつて速度が制御できず飛び出してきたらしい。だからと言つて私の件（魔法使用）はどちらにしてもギルティだが。

「ならあなたも検査していきなさい」

「え、でもお金今そんなに持つてないですよ」

「今回は私が払うわよ」

「え、でも流石にそれは・・・」

「いいのよ。今回だけだから」

「しかし・・・」

石田先生が検査を押ししてくる。身体強化をしていたのですが必要がないが先生が安心するならした方がいいだろう。但し今行くのはこちらの事情で行けない。正直今から河川敷に向かつてても試合には間に合わないが、行かなかつたら行かなかつたでアリサ

ちゃんが怖い。それにジュエルシードを抑えないといけない。なのはちゃんが気が付いたのも翠屋でのことだし今からでも間に合うだろう。それにお金を払ってもらうのは申し訳ない。それならあとでおいちちゃんと一緒に来た方がいいだろう。故に渋る私を見て、少し考える石田先生。

「もし検査しないでどこかで倒れたら大変でしょ？」

「それは、まあ、理解してます」

「それなら、はやてちゃんと一緒に検査してもらったほうが、こちらとしても助かるんだけど。そっちのほうが手間もかからないだろうし」

確かに、ばらばらで来られるよりも二人だけなら一緒にやった方が手間がかからない。それに病院の先生ならお金の負担も少ないと言われた。ここまで強く推す理由が分からないが、先生は折れる気がなさそうである。そもそも返事をする前に検査室に連れてこられた。それでも嫌そうな私に、担当の人にもう話をつけているから、と言われ、いつの間にか逃げ場所を塞がられていたことを知らされる。なぜここまで強引なのだろうか？そして、諦めた。そのあとなのはちゃんにごめんなさいメールを送った。

「なんかごめんなく。いつもは優しくして冷静な先生なんやけど・・・」

次に会った時のアリサちゃんの反応に怯えていると、新しい車椅子に乗ったはやてが苦笑いする。

はやてすら知らない事実。一体何が石田先生をそこまでさせるのか。も、もしや、私があまりにも可憐すぎで先生と生徒との禁断の恋か?! いやだめだ、私には心に決めたなのはちゃんがいるのだから。先生すいませんが、あなたの気持ちにこたえられそうもありません!!

「そんな心配しなくても大丈夫だからね。それと、私は先生だけど、あなたとの関係はどちらかと言うと先生と患者さんかな」

「な! いつの間に私の心の声を!?!」

「いや、口に出てたで」

おっと、妄想駄々もれ。これは流石に恥ずかしい。顔を抑えながら検査室に連行される私。

検査自体はすぐに終わった。先に検査してもらったため、今ははやての番で少し待たされている。今からなのはちゃんの許に行きたいがしばしの我慢だ。加害者である私に先に帰っていい訳がないのである。

そうすると白衣ポケットに手をつ突っ込んだ石田先生がこちらに来た。

「えっと、かすみちゃん。だったわよね」

「あ、はい。はやてのほうは終わりましたか?」

「んー、もう少しかな。その前に少しだけ私とお話ししない?」

なるほど、OHANASHI☆ですね。わかります。気を許した後に背後からズドンですね。その手には乗りませんよ。

「いや！本当におしやべりだから！」

「いや、私を無理矢理連れてきた前科があります。あれでしょ？私にエロいことするんでしょ!!エロ同人みたいに!!エロ同人みたいに!!」

「………はやてちゃんのことなんだけど」

あ、はい。すいませんでした。

私は少し自重するように身を縮めた。序でに頭を抱えた。最近の私、頭沸いているな
〜。

「かすみちゃんにはやてちゃんとは今日初めて会ったのよね？」

「え、ええ……。そうですね。始まりはしばしば街角で起こりますから」

おや？自分で言ってる今気が付いたが、これって恋愛もののテンプレ的な出会いだな。但し今回は登下校中でも、パンを啜えている訳でもなかったが。

「その、出来ればでいいんだけど、これからはやてちゃんと会ってあげてほしいのよ。友達として」

「?………えっと、よければ理由を教えてくださいもいいですか？」

急に真面目な顔になる石田先生。心なしか雰囲気重いものになっている気がする。

もしかして訊いちゃいけないことだった？いやいやそれならあんなお願いしたりしないだろう。

案の定、石田先生は語り出した。はやてが原因不明の病気にかかっており足が動かないこと。両親が事故で亡くしており、病気の急変も心配されるため学校には通っていないこと。海外の親戚が現保護者で頻繁に会えず、今は独り暮らしであること。重い内容から胡散臭い内容まで色々と言われた。というか、どつかで聞いたことある内容だ。「本人は平気なふりをしているけど・・・やっぱり寂しそうなのよね。だから、何か楽しみを見つけてほしいのよ」

「なるほど・・・それで手っ取り早いのが同年代の友達を作ること、と・・・」

石田先生は一つ頷くとこちらの反応をうかがう。これはあれだ。あんなにも検査を強引に押し進めて来た理由はこれを言うためか。もちろん本当にこちらを心配しているのは本当だろうし、はやてと一緒にの方が二度手間にならなくてよいというのも本当だろう。だけれども、軽くやられた感があった。

「ここまでやられちゃ仕様がない。返事なんて決まっている。」

「あなたにはやてちゃんの友達になってほしいの」

「お断りします」

ええ、そりやあもういい笑顔で言つてやりましたよ。痛い沈黙が場を支配するのを覚悟で。

予想外の言葉だったのか石田先生は数秒固まった後、なんでつて顔をした。私はそんな先生には目もくれずに声をかける。

「はやて、終わったんでしょ？」

検査室のドアの向こうでびくつと反応がある。こちとら魔法使い。手に取るように居場所がわかる。というか最初から扉が少しだけ開いていたのに気が付いていたのだ。盗み聞きとは情けないぞ、はやてくん。

扉を開けてはやてが顔を出した。私はその手を強引につかみ、引っ張り出す。

「帰るわよ」

「………え？」

「それでは石田先生。私たちはこれで帰りますので。失礼します」

喋らなくなった石田先生を尻目に私ははやての車椅子を押しして病院を出た。はやても私も終始無言であった。

同じバスに乗った。乗る時に手伝つてはやてからありがとうと言われたが無視した。私は非常に機嫌が悪くなっていたのだ。

春の陽気はのんびりしているのに、私たちの周り一メートルは冷えていた。ビールはキンキンに冷やした方がおいしいからね。降りる時はやての降りる所で降り、はやての家まで車椅子を押していった。はやてはどうしていいかわからないように借りてきた猫のように座っていた。私は時々道を聞く以外何も話さなかった。

「えつと、……ここがうちの家や。かすみちゃん、ここまででええよ……」

「……………」

「……………」

ここまでで何度も繰り返した会話をすると、諦めてはやてはカギを開けた。そして、二人して中に入る。車椅子は内と外用と分けていたので、再びお姫様抱っこして乗せ換えた。

そのままリビングに行き周りを見渡す。昼間の閑静な住宅街の閑静な家。誰もいない。仕事に出ていないとか、買い物に出かけていないとかではない。嫌なことを思い出して余計機嫌が悪くなる。

「……………本当に独りで暮らしているんだ」

「え？……ああ、うん。石田先生も言いよつたやろ？五年前事故で亡くなってもうてな。まあ、もう慣れたから特段気にすることもないんやけどな」

私ははやての言葉を聞きかじりながらダイニングのふかふかソファーに身を沈める。

「えっと、かすみちゃん・・・なんでここまで来たん？」

「別に？普通だよ」

「いやいや！普通やあらへん！普通やつたら友達になりたくないもん所に行こう思わんやろ!？」

流石に少し切れ気味なはやてさん。まあ、無理もない。石田先生のお願いを却下して、急にテンションが変わって、傍若無人にも家にまで上がり込んでソファでふんぞり返る。私ならすでに怒鳴り散らしている所だろう。しかし、一つだけ訂正しておきたい。

「私は別にはやてと友達になりたくないとか思っていないよ」

「は、はあ？ならなんで石田先生にはあんなこと言ったん？」

「簡単よ。ムカついたから」

私のセリフを聞いたはやては頬を引き攣らせながら、子供かよ、と吐き捨てた。それは否定しない。と言うか否定できない。絶賛子供なのだから。

「で？なんでムカついたん？事と物次第じゃ怒るで」

「・・・言つとくけど、私は石田先生に怒っている訳じゃないわよ」

「ん？じゃあ、誰に怒ってるん？」

小首を傾げるはやて。それに対して私はすごくいい笑顔で言い放った。

「・・・あなたに怒っているのよ。はやて」

狸みたいな顔のくせに鳩のように驚くはやて。ますます腹が立つ。理解していないのが余計に腹立つ。

「あなた、大人にお願いしてもらった子と友達になろうと思ったの?」

「そ、それがどないしたんや?別に普通やる?」

低音の私にはやては流石に身構えている。一度大きく息を吐き出す。溜息ともつく深い吐息。そして、息を吸い込みはやてを睨みつける。

「別に普通?どの口がほざくのかしら?友達作ろうという気がなくせに!そうじゃなきゃ石田先生が心配したりしないでしょ!作ったとしても大人から与えられて上っ面の関係で済ませようとして!そう!さっきの話よ!!知ってる?子供が興味を失ったおもちやの埃被った姿。想像できないと言わせないわよ!あなたは私をそんなもののように扱おうとしたのよ!!失礼にもほどがあるわ!!そんな扱いにするくらいならあのと き飛び出て『うちは人をおもちやくらいにしか思えへんから友達作らんのや』って思ってたまま言いなさい!この!半端な寂しがり屋め!!それともなに?そんなことはミジンコも思ってたかったというの?それこそ逃げよね。あなたの病気が何なのかは知らないけど、何もかも諦めた面しなさんな!辛気臭い!!加齢臭より酷く臭うわよ!!自分に酔うな!自分を飲んでも飲まれるな!!この酔っ払い!!」

一気に言い終わり、息が荒れる。呆氣にとられたはやてはしばらくして何を言われたのか理解して顔を真っ赤にして口をパクパクさせる。

確信した。凶星を突いてやったと。どの言葉が核心を付いたかは知らないが、どうやら逆鱗に触れられて怒り心頭。作った二つの握りこぶしを太ももの上にめり込ませていた。

「で？何か言いたい事でもある？言いたい事あるならどうぞ？お目々真っ赤つかさん」

「……………う……………と……………せに」

「はあ？なに？聴こえないわ。口あるの？言葉分かる？ごめんなさい、私睨まれて伝わるような星の住人じゃないのよ。……………それとも怖くなって何も言えないとか？」

「うちのこと、なんも知らんくせに」

「ちっさい!!」

すると、はやては唾を飛ばさん勢いで怒鳴り出した。

「うちの気持ち知らんくせに、よう言うわ!!寂しくて何が悪い!?そもそもうちは人様に迷惑かけてあらへんで!!あんたが言ったことぜーんぶあんたが勝手に思っただけの妄想なんや!!被害妄想!捏造!ダメ絶対!ただの痛いやつやん!!なん妄想でどつき倒すんや!!阿保なん?バカなん?妄想癖あるとかマジ怖いわ!現実と妄想の区別付いとりますか?お医者さん紹介しましょうか?妄想癖変態女!!」

「はあ？何他人に対して期待しているようなこと言ってるの？」「言つたらんわ！」「うちの気持ちはどうタラとか言つたでしょうが！忘れんぼ！」「あんたこそ変態やろが!!」「私の変態ならあなたは糞ニートか引きこもりまっしぐらよ!!自宅を警備してますって（笑）？」

「ならあんたは犯罪者予備軍や！うちの許可なく家に上がり込んでるし、すでに不法侵入しとるやないか！」「それはあなたが止めなかつたからでしょうが！」「止めなかつたら入つてもいいんか!」「気が付いてて止めなかつたら大丈夫でしょ！」「いや、有無を言わせぬ態度やった！恐喝や恐喝!!お巡りさん！ここやで〜。幼気な車椅子の美少女を恐喝して無理矢理家に押し入つた輩がおるで!!」

「自分で幼気（笑）な美少女（笑）とか（笑）。あなたが幼気な美少女なら私は可憐でお淑やかな御令嬢でしょうが!」「ここは捏造大会やあらへんで〜。お帰りはあちらから誰が捏造よ!それはあなたでしょ!!あなたこそ出なさい!!」「ここはうちの家や!」知るかそんなもん!!」

「第一何?大人がお願いした友達?始まりなんてかんけーないやんけ!なに?友達になるのにトイレや風呂の入り方まで気にせんといけんのか?めんどくさい女やわ!」

「別にそんなことは言つてないでしょうが!なに勝手に勘違いしてるんでしょうね、この自称美少女の妄想女が!私はあなたが阿保らしいこと考えているから怒つたのよ!!」

ね、半端なかまってちゃん？」

「誰がかまってちゃんや!!そもあんたの方が妄想女や!!阿保らしいことつて、勝手にあんたが妄想したことやんか!!」「妄想じゃない!」「自覚しい!妄想癖のある変態は変態らしくしいな!」「変態じゃない!!」変態や。どうせうちが気絶してた時もなんや変なこと考えてたんやろ!?!」「……………いや、そこ黙るところちゃうで」

しばしの沈黙。そして、どちらともなく腹の底から笑った。はやては車椅子から落ちないように、私はソファから転げ落ちるように。その家は五年ぶりの笑いで満ちた。

「い、いやあああゝゝ、久し振りに笑いすぎて顎痛いし、腹痛いし」

「ふ、ふふふうゝゝ、鍛え方が足りませんな」

「鍛え方つて、ふふ。笑うためのか?」

「うん、笑うための」

「あはははは!」

床をバンバンたたく。余裕がない。はやてがどうなっているのかわかんない。次に顔を上げるとはやてが車椅子から落ちて床で震えていた。笑いがこみ上げてくる。また、二人して笑った。

「く、く、下らいことで、わ、笑いがあはははは!」

「や、やめい!は、腹が痛くてふ、ふふふふ!」

ただひたすらしばらく笑い続けていた。子供のような喧嘩に、子供のような言い草、そしてくだらないことで笑う。

そうやって、私ははやてと友達になった。

~~~~~

笑ったあとしばらくして帰った。流石にあのまま居続けるのは悪いだろうと思つて。帰るときはやてが寂しそうにしていたが、また来るといふと元気な顔になった。まあ、もう大丈夫でしょう。加齢臭放つ顔からいくぶんか子供らしい表情になつていく。

良いことをした、と思ひルンルン気分で帰路に着こうとする。はて？何か忘れてるような……。

「Lady? Do you forget Jewel seed?」《お嬢さん？ジュエルシードのこと、忘れてない？》

「あつ」

その時、街の方で膨大な魔力反応がした。

## 第六話 魔法少女ハーレムなのは計画 邪魔

ジュエルシードの発動を感じ、なのはと現場に向かう。広域結界がすでに張ってあった。かすみは魔力制限があるから、この規模の結界は作れないはず。一体誰のものなのだろうか？

「ユーノくん！あれ!!」

なのはがビルの上を指差す。金色で目立つ人がいた。僕達はその階段を駆け上がる。

屋上につくと一人の派手な男の子がいた。それもただの子供ではない。その魔力量はなのはの倍はある。この人が結界を張ったのか？

「あなたは誰ですか？管理局の方ですか？それとも・・・」  
警戒しながら訊く。

基本的に魔道士は大きく分けて2グループに分類できる。管理局魔道士と違法魔道士。後者は悪いことをし、前者はそんな人たちを取り締まる。もし目の前の子が管理局の人じゃない場合は戦闘になるだろう。

僕となのはの間で緊張が走る。男の子がこちらを振り向く。すると、目を見開き口元

を釣り上げた。

「おう！俺の嫁！」

えつと、嫁？どういうこと？もちろんなのはに言った言葉だよな？きつとそうさ。うんそうさ。今僕は動物になつてるし、そもそも男だし．．．．．。まあ、女の子に間違われたことは何度もあつたけど．．．．．。流石に今回は大丈夫だろう．．．。

少年は少年には不釣りあいな表情をしていた。顔形は整つていて格好良い。だが、全て台無しだ。髪は金髪で逆だつてゐる。全身は黄金の鎧で派手さと重武装感を醸し出してゐる。目立ちたがり屋にしても趣味が悪い。

男の子は気さくな感じでこちらに近づいてくる。僕は慌てて叫ぶ。

「君！君は一体何者なんだい？この結界を張つたのも君だろ！」

「うっせー、淫獣！俺となのはの会話を邪魔すんじゃね?!」

絶句した。

初対面で暴言を吐くとは。失礼なことをしただろうか？男はそのまま歩いてなののはのところに行く。僕は何も言うことが思いつかなかつた。

「よう！なのは！」

「え、えつと、し、失礼ですが、どこかでお会いしましたっけ？」



なのはが慌てて取り繕う。向こうは親しげだが、やはりなのはの知り合いではなかったようだ。それではなぜこんな態度を取れるのだろうか。

少年は少し考える素振りをして、ニカッと笑った。

「ないな!!」

ないのかよ!ならなんでそんな態度なの!?!って、そんなこと考えてる暇がない!

「なのは!そいつは無視して、早く封印を!」

「う、うん。でも、ジュエルシードの場所が……」

た、確かにこの広範囲に影響が出ている。この場合探すのは手間であった。サーチャーが使えればいいのだが、なのはにはまだ教えていない。いきなりは使えないだろう。

どう探そうかと考える。突然なのはがそうだ、と言って魔法陣を描いた。その絵図に驚愕する。

「……なのは、それって探査魔法だよね」

「うん!町全体を探すのは大変だから魔法で探せないかな?と思つて」

サーチャーが飛び出す。そして、四方に散らばった。それからなのはは集中のため沈黙する。全く教えていない魔法を想像だけで作り出すなんて。レイジングハートの補助があつてもそう簡単にはできない。デバイスがあつてできるのなら管理局は人手不

足にならないだろう。やはりなのはの才能は計り知れない。

おかげで、あとは見つけたら即封印するだけだ。現状特に何もなく魔法が作動している。なのはの魔力量ならそこまで難しくないだろう。それよりも目の前の少年だ。急に黙ってからずつとなのはを見ている。それもよいとは到底言えないような表情で。なのはの気が散るからやめてほしいんだけど……。

「見つかった!」

「そうか! それで、どこにあるんだ?」

なのはが探索を終えるやいなや食いつく少年。目をギラギラさせ、猛獣のようだ。その様子に慌ててなのははジュエルシードがある場所を教えてしまった。

「なら、俺がジュエルシードを封印してやろう」

うんうんと満足そうに首を振りそう言うのと、上空へと舞い上がる。そして、

ゲート・オブ・パピロン  
「王の財宝」

黄金の魔力光が煙のように空間へ広がる。そして、驚くべきことに、その光の中から無数の質量兵器が出てきた。あつと思ふ間もなくそれらはぶつ飛んだ。

ただの質量兵器ではない。一つ一つに膨大な魔力が宿っている。それらはこれまた驚くべき破壊力で街のビルを破壊していった。一発もジュエルシードに当たらずに……。

「ちよつと、町が!!」

「む。なかなか当たらないものだな」

何発かが僕たちがいるビルにぶち当たった。足元が大きく揺れる。

「や、やめて! 代わりに私がやるから壊すのはやめて!!」

「ハハハ、なに遠慮することはない。なのははそこで俺の勇姿を見ているだけでいいのだ!!」

だめだこいつ。言葉のキャッチボールが成り立たない。絶大な魔力の槍が隣を貫いた。

結界が張っているから元に戻る。だから、なのははほど僕は街の心配をしていない。それでも崩壊する建物に目を逸した。普通こんな破壊活動はしない。狂っているのか、ただ単に馬鹿なだけなのか。

なのはも諦めた様子だ。無視して砲撃の準備をする。つて、ここから当てるの!?

なのはの砲撃は見事命中して、木々が消えていった。・・・本当なのはの才能は計り知れない。

男はそれを見て結界を解いた。スプラッタになった町がきれいに戻っていく。

「・・・えつと、それで」

なのはが困った顔で少年を見る。少年はすごくいい顔でこちらを見ていた。

「流石なのはだ！俺ほどではないが一発で封印できるとはな！」

何を言っているのだらうこの人は。悪意という悪意は感じられないが、客観的に考えてその言葉は馬鹿しか口に出せないと思う。

ジュエルシードがなのはの元に飛んで来て、そして、レイジングハートへと格納された。

「えつと、それであなたの名前は何？」

おずおずと尋ねるなのは。そう言えば、といった顔をして少年は髪をどこのボンボンかと思わせるかのように梳きあげた。

「ハハ！俺の名は、ギル・ガ・メツシュ・ゲイツ！この世の財宝は全て俺のものだ!!」

高笑いし始めるギル。そのあまりの異様さに気持ちが悪く後ろへと行ってしまいそうになるが、なんとか踏みとどまる。

「え、えつと、それで君は管理局の人かい？」

「管理局？ふん！あんな偽善集団と一緒にされては困るな」

「……………それじゃ、君はどうしてここに来たんだい？」

「フツ……さつきも言っただろ？この世の財宝は全て俺のものだと。美しいものは全て俺が所有すべきだ」

ま、まさかジュエルシードを!?思わず身構える。やはり違法魔道士なのか!?なのはも

思い至ったのか身構える。さっきも言ったが、魔道士には二種類ある。そしてギルは管理局を否定した。それなら彼は違法な魔道士で、ロストロギアを狙っている可能性が高い。

しかし、彼と敵対して勝てるか？先程は命中率の低さに目が行った。しかし、その一つ一つの一撃は先程なのが放った砲撃の倍の魔力をまとっている。それを何発も放つ底なしの力。二人一緒でも勝負になるだろうか？

少年をにらみつける。そして、口を開いた。ジュエルシードが狙いなのかを訊くために。

「……………それは、つまりジュエ「そう！なのは！お前は美しい!!」……………あれ？」

遮られて戸惑う僕を置いて、彼は続ける。

「お前の美貌に女神は片膝をついている。可憐さは絶頂を纏っているからだ！天女はその大事な羽衣を献上するべき。降りてこないのは奴らが無知なだけだ！小野小町や楊貴妃、クレオパトラがその美貌をあんな世から嫉妬していることよ。俺には分かる!!俺は途方もなく嬉しいぞ!!最高の美に出会ったのだ。全ての美しいものは俺のためにある。なら、なのは！お前は俺の嫁ということだ!!」

一気にしかし饒舌に述べられた口上は呆れを通り越して一種の敬意を感じる。顔も

整っているし、声もきれいだ。スタイルもいい。こんなに完璧な男に告白されたら、きつと異性なら惚れてしまうのかも知れない。……但し、それが初対面で言葉のキャッチボールが出来る人間での場合だが。

戸惑った様子なのは。何か言おうと手振りをせわしなく動かし、やつと口を開けた。

「えつと、お嫁さん。というのはよくわからないんだけど、友達からならいいよ?」

しまった!まさかここでも出るとは!なのは「友達からならいいよ」!これで何人もの男たちが勘違いをして辛酸を嘗めたという。

なのは可愛いから何回か学校で告白されたらしい。前までは丁寧に断っていたらしいが、かすみが余計なことを言つて今の言葉に変えさせた。かすみ曰く、「やったね!なのハーレム要員が増えるよ!!」だ。但し、今回はきつと聴いていたら後悔していることだろう。相手があればなのだから。

ギルを見るとやはり勘違いしている様子だ。普通なのはあの返しは脈アリと考えられるからね。ギルは再び高笑いをしながら、「初い奴め」とかなんとか行つて調子に乗っている。殺意が湧く。

「ということとは、俺とお前とは相思相愛ということだな!!」

「はこや!!」



訝しげにこちらを見る少年。イレギュラーもイレギュラー。最も考えたくなかったうちの一つ。そして、『魔法少女ハーレムなのは計画』の最大の障害となり得るもの。他の異世界転生者”。先程なのはちゃんを知っていたことと前世で知ったテンプレっぽい踏み台のセリフ（若干違うが誤差の範囲）から判断した。

私はなのはちゃんを奴から離しながら、誰だ、と訊かれたことに反応する。

「誰だかんだと訊かれたら！」

「We do answer it for world sympathy!」《応えてあげるが世の情け!》

「世界になのハーレムを築くため!」

「On the worlds, to defence Nano—Harlem!」

《世界のなのハーレムを守るため!》

「愛と真実のなのはちゃんを愛でる!」

「We are lovers of lovely and cute Nanoha!」《ラブリーでキュートなのはの味方!》

「かすみ!!」

「Alphas!!」《アルファス!!》

「次元をかけるなのハーレム要員の二人には」



「Raging Heart, unbearable mind waits us!」  
《レイジングハート、不屈の心が待ってるわ!》

「……………」

決まった。アルファスと一緒に考えた完璧なセリフ。マスコット枠(?) がいないのが欠点だ。今度ユーノくんも誘ってやってみよう。

ユーノくんとの初対面のときに色々と疑われたので、その対策に作った自己紹介シーン。本当はフェイトちゃんとかクロノくんとかの前で披露する予定だったがこの際仕方ない。

……………なんだか三人とも黙っている。そのうち二人が呆れた顔をしている。なんでかな? 感動で打ち震える姿を想像してたのに。

「かすみ……………もうちょつと普通の登場の仕方ないの?」

ユーノくんが、心底つまらなみみたいな顔で苦言を呈した。なぜに!? 最高傑作だったのに!! アルファスも完璧よ、って感動極まった声で言ったのに!! どう言うこと!?

……………取り敢えず、仕切り直した。この場は流そう。

「そ、それよりも、なのはちゃん! なのはちゃんはもう少し危機感を持ったほうがいいよ!」

話の矛先をなのはちゃんに向ける。当のご本人はなんのことかといったご様子。こ

れは気がついていないようだ。ここは幼馴染としてしっかりと注意しておこう。

「あのね、なのはちゃん。そう簡単にキスされそうになつちやだめなんだよ。それでキスされちやつたら嫌でしょ？」

「え？でも、キスするのはもつと友達になりたいって意思表示なんですよ？この間かすみちゃん、そう言つてなかった？」

はい！言いました。私のせいでした。あいすいません！！

「ででで、でもね。こんな見るからに悪い顔する人とはキスしちやだめだよ？」

「カスミちゃん！そんなこと言つちやだめだよ！！ギルくんだって好きであんな顔してるわけじゃないんだから！！」

「いやいや、あんな表情をするのは悪いこと考えている証拠だよ？」

「本当の意味で悪いことを考えている人はいないんだよ。悪いことをしてしまうのはそれ相応の理由があるの。だから、かすみちゃんも簡単にギルくんを悪者扱いしちやだめなの！！」

な、なんと心の清いなのはちゃんなのか。こいつを庇った上に「ギルくん」と呼んで友達扱い。でも、ここはしっかりと現実を教えなさいといけない。そうしなければ、後々大変なことになる。これはなのはちゃんのためだ。真実を教えるのは辛いが致し方ない。ああいった人に騙されないようするためにはそれしかない！

「なのはちゃん、だけどね」

「そもそもかすみちゃんだって、よくあんな顔してるでしょ？ かすみちゃんは悪い人じゃないから、あの人も悪い人のはずないよ!!」

「.....」  
ハイ、ソノトウリデゴザイマス。ワタシガマチガツテマシタ」

なのはちゃんに言い負かされた。いやこれは負かされたというより自爆しただけなのだけれども.....。なのはちゃんは、すごくいい顔をしている。ユーノくんは呆れて何も言えなくなってしまうてる。

って、あれ？

「えっと、あいつ。ギルがいなくなってるんだけど.....」

「え!?!」

二人が周りを見渡す。あたりは三人だけだ。金ピカの目立つ少年はどこにもいない。ビルの下から車や人の雑踏が聞こえる。空の雲は朱色を写していた。そろそろ帰らないといけない時刻だ。

しばらく三人で探したが見つからないままそれぞれ家に帰った。

~~~~~

通学用バスから降り、下駄箱に行き、階段を登って、教室の扉を開ける。いくつかの机を通り過ぎ、自分の机の前の席にたどり着く。

「え、えつと、ア、アリサちゃん……？」

そこにはかすみがいた。

「こんの……バカチンが!!」

ヒツ、と声を上げ頭をかばうかすみ。私は精一杯声を張り上げて睨みつける。

「何が」絶対に遅刻しないから安心して”だ！遅刻どころか来やしない!!病院って何よ!?!また病院かよって思ったたら人轢いたって何してんのよ!注意散漫!!遅刻厳禁!!なんで学校には遅刻しないのに、休日は遅刻すんのよ!?!呪われてんのか!?!阿呆なの?馬鹿なの?それとも間抜けか!?!この……バカチンが!!」

一気に喋って一気に疲れた。呼吸が乱れる。なんで私はこいつのことになるとここまで怒りが湧いてくるのか。聖祥七大不思議に選ばれても不思議じゃないわね。

かすみは縮こまって、「あいすいませんあいすいません」と何度も謝ってる。流星に怒り過ぎたかしら。

「ちよつと、アリサちゃん。廊下は走っちゃいけないってこの間も言ったよね」

教室に来たすずかが荷物を置きながら注意する。

「怒鳴り声も外まで響いてたよ」

「え、っ！そこまで声出てたの？」

「すずかがうなずく。なのはもやってきて疲れた様子で会話に加わる。」

「ア、アリサちゃん。流石にかすみちゃんが可愛そうだよ？」

「かすみを見ると、壊れたテープレコーダーのように謝り続けている。少し反省。」

「え、えつと、かすみ。その・・・怒りすぎたわ。ごめんなさい」

「・・・ううん。行けなかつた私が悪いから」

「ええ。それは否定しないわ」

「間髪入れずに返すとかすみがいじけた。こいつはまだこりてない。」

「私は怒鳴ったことに対しては謝る。しかし、来なかつたことを許しはしない。いつもああ言つて流されて許してしまうのだ。そして、すぐに忘れたように私達をからかってくる。今回はその手に乗らない。すでにこいつの手口は見切っているわ！」

「そう言えば、かすみちゃんとアリサちゃんって、今日日直だよね」

「すずかがふとそんなこと言った。え、と思つて黒板端を見ると”茅野かすみ”と”アリサ・バニングス”の字が書いてあつた。知らない、覚えていない。休日を跨いでいたからか、すっかり忘れてしまつていたのか。」

「あつ！今朝の当番はやつておいたから大丈夫だよ。あとは宿題ノートを集めて職員室

に持つていけばいいだけだよ、アリサちゃん♪」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ありがとう。昨日のことは許してあげるわ」

ドヤ顔をするかすみ。悔しい！こいつに負けた！今日こそはお灸を据えてやろうと思つてたのに!!

朝のホームルーム前、宿題を全員分集めて職員室に降りる。かすみと二人で分けて運ぶ。

かすみは普段の調子を取り戻してニコニコ。私は悔しさに顔をブスツとさせている自信がある。

「・・・・・・・・言えよ。結局試合の日は何があつたのか詳しく訊いてなかつたわね」

「え？えつと、本当に人とぶつかっただけで、その後一緒に病院行つてお互いに検査して、つてただだよ。ホントだよ・・・・・・・・」

最後片言になつた気がしたが・・・・・・・・。。。

「男？女？」

「女の子だよ。私達と同一年の」

「ふ~~~~ん。で、検査つてそんな時間がかかるわけ？」

「それが予想以上に時間がかかつてね。本当に行けなくてごめんなさい」

「それはいいのよ……もう。それより検査って何やったの?」

かすみが説明する。X線写真を撮ったとか、どこか痛いところはないか訊かれたとか。しかし、二人合わせてもそれだけで応援に行けなくなるほど時間がかかるとは思えない。

「え、えつとね。そ、その子ね、車椅子だったんだ。だから少しそれで、少し遅れた、のかすみは明らかに冷や汗をかいているし、しどろもどろにもなっている。非常に怪しい。たとえ車椅子が本当であったとしても試合後の翠屋での打ち上げには行けたんじゃないだろうか?」

「……. 怪しい」

「いやいや、怪しさなんてどこにもないでしょ?」

「車椅子の子とは連絡取れる?」

「あ、えつと、連絡先訊くの忘れてた」

「嘘じゃないでしょうね?」

「ホントホント!嘘じゃないよ!携帯の連絡帳見ていいから」

怪しさ満点である。しかし、今は判断材料が少ない。ぶつかつた子と連絡が取れれば証拠も揃つたんだろうけど、今の言い方だと本当に連絡は取れないらしい。

そんなことを言い合っていると職員室前まで来た。かすみが開けようと、片足立ちで

太ももにノートを置いた。扉に手を伸ばす。しかし、先に中からドアが開いた。

「あ、すいません。今どきま、す……!」

「ああ、すいま、せ、ん……!」

中から出てきたのは、ブロンドの髪を耳が隠れるぐらいに伸ばした少年だ。顔は驚くほど整っており、百人が百人美少年と言うだろう。しかし、一番目を引きつけたのは、その紅い瞳だ。神々しさまで感じてしまうほどで、目が離せなくなる。

聖祥大付属の制服を着ている。転校生だろうか。しかし、そんな話は聞いてない上にこんな時期の転校だ。訳ありで急な話なのだろう。別に珍しい話でもない。

……それよりもかすみと少年が見つめ合つて固まっている。少年は目を見開いて、かすみは睨みつけている。一体どういうことなのか? 知り合い? しかし、金髪の知り合いなんて聞いたことないわね。なのほも言つてなかつたし。それにかすみの目つきは威嚇警戒のそれだ。あまり見ない表情だ。かすみはなのはと出会う前は海鳴りにいなかったと言つていた。その時の関係だろうか?

沈黙を破つたのは少年の方だった。

「お、お前はTS変態野郎!」

TS? なんの略称だろうか? と思つた途端、かすみの拳が少年の顎に突き刺さる。目が警戒から明らかな激怒に変わっている。彼はそのまま職員室に舞い戻つた。

「ちよ、ちよつと、かすみ!？」

「さて、アリサちゃん。さっさとノート提出して教室に戻ろっか」

かすみか床に散らばったノートを拾いながら言う。無表情なのが怖い。

「い、いや、その人どうすんのよ」

「何? アリサちゃんはこいつの肩もつの?」

かすみの言葉にたじろぐ。そんな言い方されるとは思わなかった。というか、かすみが怒つたのを初めて見た。こいつこんなふうになるの? いつもヘラヘラニコニコしていた。何言っても何をしても怒らなかつた。しかし、今は怒っている。それほどT Sという言葉は彼女にとってひどい言葉なのか? 序に、変態は自他共に認めているので、それで怒つたわけではないと分かる。

「ちよつと待て!?! テメー、よくもやり上がったな!?! T S野郎!?!」

「誰がT Sだ!?! 私は身も心も女だ! 現世でせっかく女の子らしい身体になったのに、また漢女とか言われてたまるか!?!」

そう言つて再び少年に殴りかかろうとしたので、流石に腕にしがみついて止めた。騒ぎを聞きつけて先生たちも止めに入る。

「ちよつと茅野さんどうしたの? いつも元気だけど、あんなことするような子じゃなかつたでしょ?」

担任の先生がかすみに諭すように尋ねる。掴み抑えられたかすみは少年を睨みつけ指をさした。

「あいつが！TS！transsexual！性転換した変態って言つてバカにしたから!!」

なるほど、TSとはその略なのか。でも、かすみがそうだと聞いていない。見た目相応に可愛らしい女の子だ。本人も今さつきTSを否定した。それなら根拠がない。三年の付き合いだ。根拠なしにここまで怒るとは思えなかった。

確かにあいつの言動は人に向けるべき言葉ではない。ましてや相手が本当にTSしていた場合は差別になってしまう。

それでも目の前のかすみは私が知ってるかすみでなかった。

先生が今度は少年に問い詰める。そこで少年の名がギルといい、私達のクラスに入ることを知った。少年は一切反省した様子はなく、殴ったことに対しかすみに謝罪を求めてきた。その態度にムカツとしたが、かすみがそれに反論してまた状況が混乱してギルは別室に連れて行かれた。話はまた放課後、となった。

かすみはギルが消えていった方を睨みつけている。身体が未だ震えている。どうすればいいのか。居心地の悪さに手持ち無沙汰になる。そこで持ってきたノートをかすみ同様撒き散らしていたことに気がつく。

先生もそれに気が付き一緒に拾うことにした。

拾い終わると申し訳なさそうにかすみが私達へ話しかけた。右手で左腕の震えを抑えるようにしていた。その右手も定まっていな。声も抑えるようにしているが、ところどころつつかえた。今の彼女は何もかもが珍しい。泣きこそしていないが、感情の高ぶりが見て取れる。話した内容は私達に迷惑かけたことへの謝罪と自分でも激怒したことへの驚愕だった。

「ごめんね。アリサちゃん」

だいぶ落ち着いてかすみが再び謝った。心底落ち込んでいる。

「何がよ？迷惑への謝罪はさつき聞いたわよ」

「驚かせたこと」

一瞬息が止まった。よく見てる。今でもさつきのがかすみとは思えないのは確かだ。その様子を感じ取ったのだろう。まあ冷静でなかったから、もしかしたら私が彼女を嫌ったと勘違いもしているかも。

しかし、私は大きいため息をついた。

「ええ、びつくりしたわ。あんた、怒るとああなるのね」

「怖かった？」

「まあね。怖かったわね」

「そう……ごめんね」

「まったく謝らないでよね。こつちとしては友達の普段見れない面が見られて良かったと思ってるんだから」

えっ、と呆けた顔になるかすみ。私は顔が赤くなりそうになるのを誤魔化しながら続ける。呆れたように振る舞いながら。

「そんな元気のない顔して教室に戻ったらなのは達が心配するわ。早くいつも通りになりなさいよ」

「え、えっと」

「それともなのは達に心配されたいの？格好悪いところを知られたいの？」

「い、いや。で、でも」

「何!?なんか文句あんの!?!はつきり言いなさい!!」

「い、いや。え、えっと、ありません」

「つつかえるな! Speak smoothly!!」

「はい! 文句ありません!」

「英語で言いなさい!」

「イ、イエッサー!」

「ma'amでしようが!!」

「イエス、ママ！」

「声が小さい!!」

「イエス！ママ!!」

「……何をやっているのだろうか、私は。こんな馬鹿なことやって。しかし、そのやり取りを何度か続けてかすみが元の調子に戻っていくのがわかる。無駄にならないくてよかつたとしておこう。」

一段落して大きく息を吐く。遠慮がちにかすみはニッコリと笑った。

「……何よ」

「あつ、いや。……ありがとう、アリサちゃん。元気づけようとしてくれて」

「別に、陰気な顔されたらこっちも気が滅入るのよ。それが嫌なだけ」

「それでも、……ありがとう♥」

めちやくちやニコニコしやがって。さつきまでの悲壮感はどこに行ったのよ！一割ぐらいは残しておきなさいよ。腹立たしい。

そう思いながらもホツとしてしまっている私もだ。いぶこの子に懐いたもんだと、心の底でおかしくなった。

「そう言えば、バニングスさんはどうしてここにいるの？」

担任の先生が今思い出したかのように口を開く。腕にはクラス全員分のノートが抱えられていた。

「私今日は日直で、茅野さんと宿題のノートを職員室まで運んできたんです」

そう言うと、先生が怪訝な顔をした。

「あれ？今日の日直って茅野さんと日野くんじゃなかったっけ？」

「……え？」

日野とはカスミの前の席の男の子だ。そう言えば、そうだった気がする。しかし、さっき見たときは「日野春人」ではなく代わりに「アリサ・バニングス」と書いてあった。どういうことだ？

「かすみ、あんた何か知らない？……って!？」

隣にいたはずのかすみがない。廊下の先に目を向けてやつといた。忍び足で階段の方へ曲がろうとしている。

そこで思い出した。日直欄、消したような跡の上に名前が書かれていたことを。つまり、誰かが書き換えた。

「あんたか!!かすみ!!」

かすみが走った。私は追いかけた。先生が後ろから声をかける。

「廊下は走っちゃいけません!!」

第七話 魔法少女ハーレムなのは計画 主人公

行つてきますの一言で家を出る。暖かな陽気に伸びをした。今日も小粋な小春日和。

おじいちゃんの短い返事を背中に、扉を閉め、今日はすずかちゃんの家遊びに行く。まあ、遊びと言つたが実際その大半はお茶会なのでなんとも遊びに行くという感じがないが。いや、TVゲームもあるのだから遊ぶことには遊ぶんだけれどもね。まあ、若い子達がキャツキャウフフしてるのが見れるからいいか。え？お前も若いって？いや確かに身体は子供だけど、頭脳は大人っていうか……。

そこで私は先週の踏台あいつとのことを思い出す。怒り罵倒、そして震え。いい大人がするようなことではない。私は頭を抱え、顔から煙が出た。

メツチャ子供っぽかったよ……!!何が体は子供、頭脳は大人(笑)だ!?!どっちも子供だろ!!何あれ、私つてあんなに怒りっぽかったっけ!?これでも前世含めると三十代半ば。なのに子供っぽくみつともなく!!さらにアリサちゃんと先生にまで見られてメチャクチャ恥ずかしい!!穴があつたら入りたい!!実際に家に帰つて蔵の中に逃げ込んだ。扉が扉だけに横穴に思えたのよきつと。アルファスが嘲笑の目を向けてきたのは忘れられない。デバイスだから目なんてないかもしれないけれども、そう感じたのよ!!

アリサちゃんは黙っていてくれるようだけれども、それを盾にイジれなくなるかもしれないし。唯一の救いがみんなの前では露も気にしている風に見せていないことだけ。……そうだよね？できてるよね？できてなかつたら泣きます。というか、泣いてます。

これも全てあのギルガメッシュのせいだ。もろFateだよ！よく二次創作で扱われる踏台転生者そのままじゃない!?学校でもなのはちやん、アリサちゃん、すずかちゃんにバカの一つ覚えのように気持ち悪く言い寄っている。そして私には敵対している……。

あれ？これってもしかして、二次創作テンプレのオリ主？私って主人公だった!?ま、まさか!?!しかし、そんな気が……。踏み台がいて、それに対するオリ主が女って言うのは珍しいが、別にいけないわけでもないだろう。しかし、オリ主っていうのは面倒くさそうだな。なってなにか良いことでもあるのかな？思い付かない。原作介入とか？それ自体は当初の予定通りだから問題はない。私のはちやん守り隊所属だからね。そもそもオリ主になるとどうなる？一番に思いつくのが、踏台あいつに絡まれること。それならなりたくないとは思わないな。踏台あいつとは関わりたくないし、話もしたくないし、二度と顔も見たくない。しかし、残酷なほどに同じクラスである……。話を戻すが、そもそも主人公はなのはちやんだ。それ以外に誰が考えられるというの

だ。私が主人公であるとかなるとかはあり得ない。私はなのハーレムの構成員で、なのはちやんの取り巻き第一号だ。なのはちやんこそがハーレム主人公であり、終いにはほとんどの人がその加護を受けることになるだろう。そこにオリ主という存在はいない。すべての者がなのはちやんの下で平等になる。なのハーレム構成員となるのだ。長くなつたが端的に言うとなのはちやんは可愛い！それ以外認めない!!

勿論あの金ピカがなのはちやん達に危害を加えるというのなら容赦はしない。拜むべき神もとい主人公もといなのはちやんを間違えているのだから。その時は徹底的にヤツを叩き潰す。……なんだか宗教っぽいな。いや、なのはちやんを女神様と置くとはごく説明しやすいのは確かなんだけど、……まあいいか。

ああだこうだと悩んだり当たり前なことを再確認したり決意表明したりしていると、病院が見えてきた。今日は家近くのバス停を使わずに病院前のを利用する。こつちの方がすずかちやんの家に向かう本数が多い。私は小走りしてバス停へ急いだ。今回別に遅刻している訳ではない。バスもまだ余裕がある。遅刻だけで急ぐ訳ではないのだよ。

「かすみ〜!」

バス停に可憐な美少女が一人。先週仲良くなつた八神はやてだ。今日は一緒にすずかちやんの家に遊びに行く約束をした。勿論すずかちやん達には言つてある。

え？連絡先はどうしたんだって？……ああ、もしかして前回アリサちゃんに連絡先知らないって言ったこと気にしてる？……連絡先を聞き忘れたと言ったな。……あれは嘘だ。あの場限りの逃げだ。

「何一人でニヤケとん？気持ち悪いで」

「ふふんつ、美少女のニヤケ顔なんてめつたに見られるものじゃないでしょ」

「誰が美少女や。冗談キツイで」

「なんだ?!はやて、あなたは全国のかすみファンに喧嘩を売ったわ。覚悟なさい!!……」

まあ、いるかどうかもわからないかすみファンよりも目の前で楽しそうにしている美少女のほうが大事よね。これは世界の心理です。そもそも私にファンなんているはずがないよね。……いや、一人くらいはいるかも。

「そう言えば、すずかちゃんの家ってどこなん？」

「ん、まあ、着けばわかるよ」

「……こないだからそればかりやな。なんか企んどんやない？」

冷や汗が出る。はやては結構鋭い子だ。

実は、はやてにすずかちゃん地が豪邸であるということを隠している。お茶会というのも遊びに行くと言って誤魔化している。何故かって？お屋敷を見て美少女が驚き慌

てる姿を見てみたいだけなんですよ！口をあんぐり開けて、口内乾燥起こさせてやりた
いだけなんですよ！！ハハハハハハ！

怪訝そうな顔をするはやて。悟られないようにと笑いを堪えているとバスが来た。

~~~~~

はやてちゃんは柔らかな関西弁の優しそうな子だった。門の所で会ったが、口をあんぐり開けていたのは印象的。初めて私がすずかちゃんの家を訪ねたときと同じ反応だったので共感してうれしい。仲良くなれる気がするの。しかし、何か嫌な感じを受けた。暗く深く冷たい感じ。それが何によるものなのかははつきりわからずモヤモヤしていたけれど、かすみちゃんの笑い声にどうでも良くなってきた。きつと気のせいだったのだろう。

驚いたことに、はやてちゃんとすずかちゃんがすでに友達で仲良く話をしていた。お互いに図書館で何度か見かけて気になっていたらしく、二週間くらい前に車椅子の車輪が段差に挟まったのをすずかちゃんが助けてそれから話すようになったという。だから最初から苗字ではなく名前で呼び合っていたのかと理解した。それを聞いたかすみちゃんがあんぐりと驚いて、はやてちゃんが「どや？さっきの仕返しや」とか満足そうにしていた。すずかちゃんも笑っていたけど、私とアリサちゃんとユーノくんは首を傾

げた。

「いや、話し方からお嬢様お嬢様とは想像してたけど、本当にお嬢様やったとはな」  
「そんなことないよ。普通だよ」

すずかちゃんは謙遜したが、はやてちゃんが胡乱な目になる。二人はお互いのことをまだ話し合っていないかつたようだ。まあ、出会って二週間だから当たり前かな。はやてちゃんが隣のかすみちゃんに囁いた。

「かすみ、私が間違つてんのかな？ すずかちゃん、こんなすつこい屋敷に住んどつて、当たり前顔でこれが普通やて」

「大丈夫よ、はやて。すずかちゃんは天然のときがあるから」

そうよな、私間違つたらんよな、とはやてちゃんがホツとする。隣のすずかちゃんが可愛らしくむくれていたのが印象的だった。頬を突つつきたい衝動を軽く感じたが我慢するの。

「あんた達、呼び捨てで呼んでんのね」

半眼のアリサちゃんがボソツと言った。横を向くと対面のかすみちゃんを呆れたように見ている。若干不機嫌そうだ。

ホントだ、とすずかちゃんが呟いた。かすみちゃんが人を呼び捨てするのは珍しい。記憶の中を探るが、初めてかもしれない。でも、呼び捨てくらいでここまでの反応をす

るのはどうなのだろう？そもそもアリサちゃんは呼び捨てが基本なのに。

「おやおや？嫉妬ですかなあ、アリサちゃん」

「……………べつに、あんたが誰と仲良くしようと思わないわよ。けど」

アリサちゃんが真っ直ぐとはやてちゃんの方を見た。キツくさせた両目に、はやてちゃんが息を呑む。アリサちゃん、もしかして怒ってるの？なんで？

「あんた、はやてって言ったかしら？」

「は、はいそうですが……………」

「一つだけ訊いていい？」

はやてちゃんがどうぞと言う。アリサちゃんがため息のように吐き出した。

「はやて。あなた、かすみに何されたのよ？まさか脅されてる？弱みとか握られてない？大丈夫？相談ならのるわよ。良い弁護士も紹介してあげるわ。脅されてないのなら、かすみと仲良くしようと思うやつなんて普通じゃないでしょ」

「ちよつと待ってよ、アリサちゃん!!どうしてそうなるの!?私そんなふうに見える!?!と  
いうか、そんなこと思ってたの!?!」

「私もなのはっていう人質がいるからね」

どういふことだろうか？かすみちゃんも首をひねったが、すぐに思いついたようにニンマリとした。しかし、アリサちゃんがじろつと睨みながら口パクで「アノコトイウワ

「ヨ」と動かす。かすみちゃんは、そんなうと言つて崩れた。あのこつてなんのこどだろう？というか、人質つてなんのこど？」

アリサちゃんは当然のごとくかすみちゃんを無視してはやてちゃんに話を振る。

「で、どうなの？」

はやてちゃんは我に返つて、少し悲しそうな顔を作つた。まるで有名な女優のように迫真の演技だ。

「せや、アリサちゃん。かすみはうちの大事なもんを奪い取つたんや」

アリサちゃんの目が釣り上がる。かすみちゃんは「やっぱり!!」と叫びながら逃げ回る。はやてちゃんはお腹を抱えて笑つていた。

私とすずかちゃんは眉根を寄せて苦笑いを続けるしかなかった。どういふ状況なのかよくわからなくて。

その後、かすみちゃんがアリサちゃんに捕まつて、ユーノくんが猫に追いかけられて、フアリンさんが倒れかけて、お茶会はお庭に移動となつた。

ローズマリーの甘い紅茶とミヤーと鳴く猫達に時間の流れを忘れそうになる。助け出されたユーノくんは私の膝の上でぐったりとしていた。そういえばと言つたふうになりサちゃんが口を開く。

「はやては犬派？猫派？」

「犬派やな。猫も好きやけど、やっぱり犬やな」

と言いながら、猫のあご下をコロコロとさせ、私達に目を向けた。

「みんなはどっちなん？」

「私は犬ね。家に何十匹も飼ってるわ」

「何十匹って……」

はやてちゃんが軽く引いた。

「いやなんで引くのよ？ここだって猫何十匹も飼ってるじゃない」

「いや犬と猫じゃ大きさがちやうやろ」

「小さい犬もいるわよダックスとかチワワとか」

「小さい犬ばかりなんか？」

「……基本大きいわね」

ほれ見ろ、と言わんばかりなはやてちゃん。犬は大きくても大丈夫なの、とアリスちゃんのがのりだして言う。それから二人で言い合いが始まった。すずかちゃんはそれを心配そうに、かすみちゃんは逆に焚き付けるように見ていた。

「ええつと、わ私はもちろん猫だよ。この猫たちを見てもらえばわかると思うけど」

すずかちゃんが二人の間に割って入るようにそう言った。二人は言い合いをやめて、

まあそうだろうなというふうには猫たちを見た。猫の毛並みもいいし、お庭に猫の糞も落ちていない。ちゃんとお世話をしている証拠だ。もちろんお金がないと出来なことがけど、しつかりとした愛情がないと続けられるものでもないだろう。

「すずかちゃんの家は猫パラダイス。猫たちの楽園だよね」

「そういうあんたはどうなのよ、かすみ」

「私？私は、なのはちゃんだよ♡なのはちゃん派♡♡」

「あ、．．．うん。それで、なのはは？猫派？犬派？」

いつものことにアリサちゃんはかすみちゃんを無視した。はやてちゃんはとても引いていたが、私達はいつも通りに話を進めた。

「うくくく。どっちだろ？あまり考えたことなかったの」

「ああ、なのはの家は喫茶店だしね。ペット禁止よね」

「うん。強いて言うのなら、フェレット派かな？おとなしいし、家で飼えるからね」

私がそう言うのと膝の上のユーノくんがビクついてなった。急に呼ばれて驚いたのだろう。かすみちゃんが口元を隠し、目をニヤニヤさせていた。なぜだろう？

話は他の動物まで広がった。どんな動物がいいかとか、この動物はちよつととか。私はカップを両手で持ちながら一息つく。麗らかなお昼の一時。のんびりとした気持ちの中で、リラックスしてしまう。こんな日もたまにはいいかな。



そんなことを考えている時、ジュエルシードの反応がした。

~~~~~

はい、ジュエルシードのことすっかり忘れていました、茅野かすみです。

まあ、原作通りユーノくんが走り去ってそれを追う体で、森の中へ。これまた予定通りに大きな子猫に目を回す二人。それには無理もなく、知っていた私でもあまりのシニールさに微妙な顔になった。先ほどの話じゃないけど、大きい動物は何十匹もいると困るよね。

さあ、封印ということになって、ついについにあの子が登場。金髪赤目の美少女。元祖なのはちゃん嫁にして夫(?)の、フェイト・テスタロツサちゃん!!なのハーレム要員期待の星が現れました!!!……って考えている暇ないし!!

フェイトちゃんがひと薙。なのはちゃんが空へと飛ぶ。「Arc saber」バルディツシユの言葉。レイジングハートがプロテクションを張る。弧を描く軌道の魔法の刃。そして、バリアに噛み付いて爆発。そこへフェイトちゃんが突っ込んだ。それを煙の中からなのはちゃんが杖で受け止めた。心なし原作よりも戦えているようで、ホツとする。

「なんで？なんで急にこんな」

「答えても、たぶん意味がない」

両者離れ構える。レイジングハートはシューティングモードに、バルディツシユはデバースモードになる。

その時、子猫の鳴き声が出た。なのはちゃんが気を取られる。

「ごめんね」

光弾が襲う。なのはちゃんは反応が遅れた。魔法も間に合わない。絶体絶命。

あたる、と思ったそのとき、光弾が途中で弾けた。ビリヤードの球のように、見えな
いもので弾かれて。

「……はい、私です。フェイトちゃんのフォトンランサーの横あいから魔法を
あてました。成功してよかったです。」

フェイトちゃんが驚いて周りを見る。特典の“隠蔽”を使っているの、見つからな
い。そのすきに背後に回って、リングバインド。更にチェーンバインドにもう一個リン
グバインド。これですぐに逃げられることもないでしょう。予想以上に簡単な捕縛作
業でした。……さてと、この後どうしよう。冷や汗が止まらない。

なのはちゃんが近づいてくる。フェイトちゃんは拘束を破ろうと四苦八苦している。
本来ならなのはちゃんが負けて怪我をして、フェイトちゃんが勝ってジュエルシードを

奪い去る。そういう流れであったが、どうしてこうなった？

「……………取り敢えず、なのはちゃん。ジュエルシード封印しとこっか」
あまりの呆気なさに私はそう言うしかできなかった。

なのはちゃんがジュエルシードを封印して、フェイトちゃんを囲む。全員地上に降り、一応フェイトちゃんはなのはちゃんのバインドをプラスされ、地面に座っていた。……………本当にどうしよう。原作とぶれまくってるじゃない!? え? これ私のせい? 私がフェイトちゃんを捕まえなければこんなことにならなかっただど!! いやいや捕まえとかないとまたきつとなのはちゃんに攻撃したでしょう。なのはちゃんも逃げないだろうから、また戦ってどっちかが怪我をする。最悪ジュエルシードが再び暴走する可能性も。あの場で思い付く双方が怪我をしない方法を考えたら、こうなった。

……………でもどうしよう。原作崩壊は本望じゃない。ここで踏台あいつが出てきて、フェイトちゃんを助け…………いやあいつに借りを作るのは嫌だな。フェイトちゃんは原作通りなら優しい性格をしているだろうから、あいつに感謝してしまうのでは? そうなったらなのハーレムどころかこの後の人間関係に支障でも出かねないだろうか? う……………ん……………。

すると、なのはちゃんが顔を近づけてきた。

「かすみちゃん。私、あの子と話してみたい」

「……一応訊くけど。なんで？」

「うんつとね。なんて言えばいいかわからないけど、あの子すごく寂しそうな目をしているの。……だから」

原作でも思いましたが、なのはちゃんの洞察力というか、「ホントに子供!」って驚きそうになる。普通“寂しそうな目”ってわかる? 少なくともさっきのフェイトちゃんの間を見て私はそう判断できない。たぶん幼いときのことの原因だと思うけど、すごいと思う。

しかし、今話し合わせて大丈夫だろうか? 原作とかけ離れていき、バットエンドになる可能性もある。

ま、そんなときは私がかするか。なのはちゃんが望むなら、私が叶えてあげないといけない。ということ、私は許可を出した。ユーノくんが若干渋った顔をして止めようとしたが、なだめた。

「私、なのは。高町なのはって言います。私立聖祥大附属小学校三年生で、家は喫茶店をしています。えつと、……あなたのお名前、訊いてもいいかな?」

緊張した面持ちで、しかし優しい顔で尋ねた。対象的にフェイトちゃんは無表情でな

のはちゃんを見つめている。

「……フェイト。フェイト・テストロッサ」

「フェイトちゃんって言うんだ」

なのはちゃんが満面の笑顔になる。フェイトちゃんは怪訝な顔したが、逃げ出すような素振りはなく話に応じるような構えをとった。なのはちゃんのコミュニ力に脱帽です。なのはちゃんが続ける。

「フェイトちゃんもジュエルシードを集めてるの？」

「……ええ」

「どうして集めてるのか、理由教えてくれる？」

「……母さんに頼まれたから。それ以上は言えない」

「じゃあ……」

なのはちゃんとフェイトちゃんの応答を横目に考え事をする。このときのフェイトちゃんは話しをしてくれる精神状態だっただろうか？母親の笑顔を取り戻すために、母親の暴力に耐えながら犯罪に手を染める。原作では、なのはちゃんを取るに足りない相手として油断から名前を名乗った。気の緩みだ。もしくは気まぐれ？何にしても、今回は状況が逆だ。捕まっているし、なのはちゃんも多少は強くなっている。なんせ御神流を少しかじっているのだから。一二撃とはいえその実力はわかっただろう。油断なん

てしないはずだし、気まぐれで話をするわけないだろう。それならフェイトちゃん名前を教えて、かつ話に応じる他の理由として考えられるのは、――時間稼ぎ！

「フェイトオオオオ!!」

アルフさんの登場です。拳がなのはちゃんに伸びる。しかし、なのはちゃんはレイジングハートで受けいなく。修行の成果ありだね。私はそつと“隠蔽”を使う。

「アルフ！気をつけて！もう一人いるよ！」

「わかってる！匂いでわかんだよ！そこだつ!!」

「おおつと！」

拳の衝撃が地面を陥没させる。避けたはずなのに、爆発で集中力が切れる。“隠蔽”が解けた。特典の欠点は集中力が切れると効果が消えるところだ。

匂いか。犬の嗅覚は人の100万倍と言う。姿が見えなくても匂いの残像がアルフさんには見えていたのだろう。

その間にフェイトちゃんはバインドを無理矢理破る。痛みを堪えた顔。それでもジュエルシードを持ったなのはちゃんへと飛び込む。私の前にはアルフさん。拳を握っている。“隠蔽”を使う暇がない。私達二人は絶体絶命になった。

でも、一人忘れてますよね。

「チエーンバインド！」

フェイトちゃんとアルフさんに向かって翠の鎖が巻き付く。二人は何が起こったのかわからない風で、抵抗もなく捕まる。

草影にいたのはユーノくん。魔法陣から二本の鎖が揺れてる。

なのはちゃんと私は、加えて二人に拘束魔法を行使した。これで一段落。

「かすみちゃんすごいよ！かすみちゃんが言ったとおりになったよ!!」

「なのはちゃんに褒めてもらえるなんて、考えたかいいがあったよ!!」

フェイトちゃん達は驚いた顔を崩せずにいる。ユーノくんも驚いた顔をしているが、それは二人とは意味が違っていた。

「ユーノくん、どうしたの？フェレットが豆鉄砲食らったような顔して？」

「いや・・・頭がいい素振りはあるけど、普段が普段だけに、今回の作戦がこんなうまく行くとは思ってなかったから」

うん、驚いてくれるのはありがたいけど、ボケを流さないでほしいな。思った以上に辛いのです。こういった時にアリサちゃんの有り難さが身に沁みる。今度お礼に何かしよう。主にいじる方向で。

今回の作戦、事前に念話で二人に伝えたが、正直驚くことはない。フェイトちゃんが捕まればアルフさんが来るだろうと、原作を知っている者にとっては朝飯前の発想だ。なのはちゃんたちには他に仲間がいるかもと言ったのだ。なのはちゃん達はそれを知

らないから驚いてるだけ。別に私が頭いいとか悪いとかは関係なし。そもそもユーノくんがどこまで回復しているのかわからなかったから、知っていても成功しない可能性もあつた博打的な作戦だつた。成功してよかつたよ。それよりもこの後どうしよう。冷や汗が目にも痛い。

目の前には、拘束された金髪美少女と姉御系犬耳美女。生唾物です。．．．．．すいません、もちろん冗談です。真面目な話、このままでは原作とあまりにも乖離してしまふ。前にも言つたかもしれないが、このままではフェイトちゃん闇墜ちからののはちやん闇墜ちからののはやて闇墜ちで、世界が滅びる。これはいけない。

．．．適当なところで、障害魔法でも拘束にかけておこう。“隠蔽”で私がやつたと誰も気づかないだろうし。障害魔法というのは魔法の効果を弱めるもので、拘束魔法に使用すると拘束が弱くなる。弱めたらフェイトちゃん達は勝手に抜け出すだろう。流石に襲つてくることはないでしょう。ここまでやつとけば迂闊に手を出さなくなるはずだ。これでなのはちやんが怪我をしなくて済む。いや、もしかしたらまだ襲つてくる？目を見ると戦意が失われていない二人。やつぱりこの案はやめたほうがいいかな。しかし、これ以外の方法で原作崩壊を阻止できるのが思いつかない。あとはフェイトちゃんたちと交渉でもするかな。それぐらいだ。

「その子達を解放してもらおう」

「え?」

男の子の声がした。振り向くと、フルフェイスの西洋風の黒兜に全身黒で覆われた鎧。背は同じくらいだが細身。片手には木の棒。……木の棒?

「え、えつと、どちら様ですか?」

警戒しながらも訊いてみる。返事はない。棒切れをこちらに向けてくる。私もアルファスを構える。ユーノくんなのはちゃんもフルアーマーの彼に対した。しかし、木の棒である。

(なんで木の棒?)

踏台あいつがいたから他にも転生者がいる可能性は考慮していた。彼も何かしらの特典を持っているのだろう。しかし、フルアーマーに棒切れである。ギャップに緊張感が出ない。木の棒ではバリアジャケットで護られた私達には一切効かない。フルアーマーだから防御力はあるだろうが、攻撃されてもあまり痛くなさそうだ。男とはいえ少年くらいの腕力(魔法強化有り)ではダメーじが入らないだろう。以上、アルファス談。

「かすみちゃん!」

いつの間にか後ろの木に背中を叩きつけられていた。肺の中の空気が一気に出てむせる。何が起きたかわからない。というか、痛い。

その間彼はフェイトちゃんとアルファさんのところに行き、拘束をいとも簡単に切つ

た。棒切れで。

「行け」

フェイトちゃん達にそう言って、私達に向かい合う鎧。黒い靄のようなものが見える。それが木の棒にも纏われていた。

「え、えつと、あな「ワーハッハッハッ!!」っ!?!」

フェイトちゃんが口を開いたところで、ややこしい事に踏台あいつも来た。

「俺が来たからにはもう安心だぞ、なのは。俺がそのよくわからん鎧を串刺しにしてやる!!」

そう言うか言わないかで王ゲイト・オフ・パピロンの財宝が開く。宝具すべてをぶっ放した。って、なのはちゃん達が!!?

「ふ、くだらん」

全身鎧の少年は棒切れを捨てた。走り出す。なのはちゃんに向かっていた槍を掴んだ。その槍で他の宝具を弾く。そして、槍を捨てる。また、飛んでくる宝具を掴みフェイトちゃんへ向った剣を叩く。捨てる。掴む。弾く。そして、捨てる。曲芸のような動きと速さで繰り返す。魔法で強化した視界でギリギリわかるくらいのレベルだ。

掴んだ斧を投げ返した。踏台の腹部に激突。呻きながら飛ばされて、ドサツと落ちた。それと同時に武器の雨は止んだ。あいつの動きがない。．．．し、死んでないよね

?嫌なやつだけど死ぬのは勘弁だよ。ここすずかちゃんの家でもあるし。

「・・・逃げたか」

ハツと見るとフェイトちゃん達が消えていた。

「さて、ぼ…私も帰るとするか」

「ちよつと待って!」

なのはちゃんが声を上げる。鎧は首を傾げたが、向かい合った。なのはちゃんはオロオロとしている。

「た、助けてくれたの?」

「・・・成り行きだ」

先程踏台あいつから飛んできた槍のことだろう。鎧は成り行きと言ったが、なのはちゃんを助けたことに代わりがない。彼は魔法陣を出した。転移魔法陣のようだ。

「ちよちよつと、君は一体誰なんだ!」

ユーノくんが叫ぶが、鎧は無視して私の方へと顔を向けた。フルフェイスの鎧が殺気を放っているような気がするのだけれども・・・。

『原作介入をするな』

念話が頭の中で響く。どこかで聴いたことがある声だ。しかし、含まれている感情は怒りとか恨みとかそんなところのようだ。正直鳥肌が立つほど、怖い声だった。私が何

かを言おうとした時、彼はどこかへと消えていった。その場には私達と子猫だけしか残っていないかった。

・・・・・私つて他の転生者に嫌われる素質でもあるのだろうか？

~~~~~

戻つてきてから二人の様子がおかしい。なのはちゃんはなにか思い悩むような顔をするようになったし、かすみは時々顔を蒼白にさせては何かを忘れるように首を振る。二人がユーノくんを追つて森に入つてから、よくわからないことが起きたがそれが原因か？世界が変わるような、すずかちやんとアリサちゃんが消えて、一人だけになった世界。正直怖かったが、それもすぐに消えて元通りになつて、二人と一匹が戻つてきたのだ。それについても聞きたいがすずかちやんたちがいる前ではとてもできない。

「なのはちゃんもかすみちゃんもどうしたの？さつきからおかしいよ？」  
すずかちやんが心配そうに尋ねる。

「え？だ、大丈夫だよ、うん。ね、かすみちゃん」

「そ、そうね。それよりも私としてははやてとすずかちやんがどうやって友達になつたのか知りたいかな」

「・・・何言ってるのよ、かすみ。それ、今日最初に話してたでしょーが」

「あれ？そうだっけ？・・・あ、うん。そう言えばそうだったね。はまった車輪を助けたって言ってたね・・・」

「・・・沈黙が重い。何が起こったんや！ホンマに!? かすみらしくない!! 当の本人は落ち込んでるし、すずかちゃんは心配してるし、なのはちゃんは驚いてるし、アリサちゃんは問い詰めようとしてるし。めっちゃ話し変えたい。なんかないか？話し変える話変える・・・。あつ、これや。」

「そ、そういえば、四人はどうやって知り合ったん？」

「「「え？」」」

見事にはまる四人。仲良えな。私は話を続けた。

「いや、普通に考えたら、不思議やで。アリサちゃんは世界的富豪の一人娘。すずかちゃんには日本有数の社長令嬢。ここまでは接点はわかる。同じお嬢様やんけな。けど、喫茶店の末っ子に、ただの変人「いや、ちよつと私だけひどくない!」・・・ここらの接点って想像つかんへんのか」

かすみ、無視されたとか言ってるけど、まあほつとしてみんなを見る。「私達の出会い、ね・・・まあ、端的に言えば、なのはのおかげよね」

そう言ってるアリサちゃんが話し始めた。アリサちゃんがすずかちゃんのカチュー

シヤを奪ったこと。なのはちやんがアリサちやんを叩いたこと。二人の喧嘩をすずかちやんが止めたこと。なのはちやんが時々恥ずかしそうにして、顔を覆ったのは可愛らしかった。かすみが言うだけのことはあるな。……って、かすみの話が一切出てこなかったのはなんでや？

「えつと、で。かすみは？」

「ああ、かすみはなのはのおまけで付いてきたのよ」

「酷いよ！アリサちやん!!春のパン祭りじゃないんだから!!」

「はいはい。でも、間違っていないでしょ？」

「うゝ……そりや、出会いはそうだけど……」

「あら、その後も似たようなもんだったでしょ」

「……今のは普通に傷ついたよ、アリサちやん」

「え?ご、ごめんなさい。冗談よ冗談」

「うえーん!なのはちやん。アリサちやんがいじめめるよ〜」

「もうアリサちやん、かすみちやんをいじめないの」

ふうー。良かった。さつきまでの雰囲気に戻った。良かった良かった。なんだかアリサちやんが押され気味になってるけど、まあ尊い犠牲やな。

「え、えつと……そそういえば、すずかのカチューシヤって誰に買ってもらったの?す

ごく大事なものつてのはあのとき知ったけど、詳しくは聞いてなかったわね」

アリスちゃんも苦し紛れに話を変える。すずかちゃんがしやうがないなと言う感じでカチューシャを外し手にとった。

「このカチューシャ、お姉ちゃんが買ってくれたの」

「忍さんが？だから、大事にしてるの？」

「うーん。ちよつと違うかな。・・・説明すると長くなるけどいいかな？」

私達はうなずいた。

「えつとね。私が人見知りか激しいからって、お姉ちゃんからもらったの。けどこのカチューシャをいつもつけてるのは他にも理由があつてね。あれは私が五歳になったばかりのとき。だから、小学校に上がる前の話だね」

みんなが話に集中する。すずかちゃんは続ける。

「家族で海外に行ったことがあるの。パーティーに家族全員誘われて、ドイツに。けどね、私誘拐されちゃって」

「はいストップ。すずか、あなた、誘拐されすぎ。この間も誘拐されてたつて聞いたわよ。すぐに助け出されたつて言うけど、注意が足りないわよ」

「ご、ごめんなさい」

「ま、まあまあ、すずかちゃんも反省しているし、続き行きましょう」

かすみがそう言つてすずかちゃんに先を促す。

「ええつと、それでね。車で移動されて廃工場に連れてかれて、監禁されたの。その時にどこかでカチューシャを落としたらしくて携帯も取り上げられて、両手両足縛られててすごく心細かった。けどね、そこにね女の子が現れたの」

それからすずかちゃんは不思議な話をしてくれた。現れた女の子は長い白銀の髪を揺らしながら、その場にいた誘拐犯たちを倒して戦闘不能にしていた。全員が動かなくなるはずかちゃんの縄を解いて、落としたカチューシャを渡したという。その子はお屋敷近くで落ちていたカチューシャを届けに来たらしい。屋敷から監禁場所まで遠いし、車で移動した。どうやってここがわかったのか？誘拐犯たちをどうやって倒したのか？色々と言いたいことがあったが、二言三言喋っただけでどこかへと消えていったという。お礼も言えずに。その後忍さんたちがやってきて事件は無事終わった。

「ホント、不思議な話ね。その人、見つかったの？」

「うん。見つかつてないの。だからね、このカチューシャをつけてればまた会えるかなって思つていつも付けてるの。会えたらお礼も言いたいしね」

なるほど、だから大事なものなんやな。

「顔はわかるんか？」

「白いお面をかぶってたから……。ただ、白銀の長くてきれいな髪に、お面から覗く紅



「目が特徴って言うのだけわかってる感じかな」

特徴的な髪色に瞳だけど、少なくとも見つけられるかはわからない。何か考えていたかすみが口を開く。

「えつと、話が若干変わるけど、忍さんはどうやってすずかちゃんの居場所がわかったの？その人が匿名で連絡したとか？それならある程度どこの誰かとかわかるんじゃないの？」

「あ、えつと言ってなかったね。このカチューシャ、センサーがついてるの。それで届けられたお陰で私の居場所がお姉ちゃんに伝わったの」

「センサー……」

アリサちゃんが呟く。かすみが呆れ声で言う。

「えつと、そのセンサー、カチューシャを落としたら意味ないよね。次もそういったことにならないとも限らないでしょう？」

「うん。だからね、あのときの反省からお姉ちゃんがカチューシャを改造しててね。：：お屋敷以外でカチューシャを外すと、お姉ちゃんの携帯に連絡が行くようになって」

「えっ?!」

アリサちゃんが決して乙女の出しではないけない声を出した。

「も、もしかして、私のときも……」

「うん。あまり心配をかけたくなかったんだけど、お姉ちゃんの携帯に連絡が行ってしばらく外していたから、家では大騒ぎになってたらしくて」

「すずかちゃんも苦笑いをする。アリサちゃんは引きつった顔で「ごめんなさいと頭を下げた。……まあ、何にしても人のものをとってはいけないということやな。」

「その他にも色々話をした。今度の連休温泉に行くから一緒に行かないかとか、連絡先をみんなと交換したり、楽しい時間を過ごした。こんな日が毎日続けばいいなと思う。本当に私の人生で稀な幸福日和やな。」

「お茶会が終わり、バスに乗った。家は病院よりも向こうにあるので、かすみとは途中で別れた。あ、かすみにあのとき起こったこと訊くの忘れてた。まあ、次会った時にも訊こうか。」

「バスを降り、独りぼっちになった帰り道。帰っても誰も答えてくれない家。でも、前までの寂しさよりかはまだましやな。」

「あなた、八神はやて、よね」

「前から来た女の子に突然呼びかけられた。髪は桃色。着ている服は青の巫女服(?)に狐の耳としっぽをつけていた。」

「え、ええ。そうですけど」

「古くて鎖で縛られた本を持っているよね」

なんでそんなことを、と思ったがうなずいてしまった。なんだろう、頭がぼーつとしてきた。

いつもは持ち歩いている本。今回はさすがちやんの家に行ったから、気味悪がれるのではと思つて持つていかなかった。まあ、彼女たちなら持つていつても特に何も言わなかっただろう。気に入っているから今度会うときに持つていこうとは思っているが。

「ごめんなさいけど、それ、譲ってもらえないでしょーか」

「えっと、何でか訊いてもいいですか？」

「うーんと、ね。色々とあるのですが、第一に私がもとの場所に帰るために必要なものなんですよ」

帰るために？ どういうことだろうか？ あの本があつたとしても帰れるわけでもない気がするが。なにか特殊な事情があるのだろうか。なんだか眠いし、頭がだるい。

「えっと、あの本があれば帰れるんですか？」

「うーんとね、他にも色々とやらないといけないし、他にも帰れるかもしれない方法があるのだけれど、あの本が一番帰れる可能性が高いし、手にも入りやすいのでここに来たというわけよ」

「わかりました。なら、家にありますので、家までご一緒しますか？」

何でかこの子を誘ってしまった。でも、どうでも良い。あの本は大事なものだ。気がするが、気のせいだったのだろう。この人のためなら何でもあげていいと思えてきた。私は車椅子を進める。狐耳の少女が私の背後に回って、車椅子を押してくれた。

「ありがとうございます……」

彼女は、いいえつと言つて黙つた。私はよくわからないまま家の近くまで押してもらった。

家についた。

「ここが私の家です」

そう言つて、鍵を取り出そうとしたとき、すずかちゃんの家でも感じたことがあるあの気配がした。まるで世界が切り取られるようなあの感じ。私は目が覚めた。

「その子から離れなさい」

振り向くと、頭ピンクの女の子に対して白銀の髪の女の子がいた。お面を被つていて表情はわからないが、鋭い剣を相手に向けている。

「ロリ玉藻とか、それつてあなたの趣味？ 気持ち悪いわね」

「つち、転生者かよ」

と言うやいなや、玉藻と言われた少女は逃げる。しかし、白銀の少女は回り込み一振り。少女は真つ二つになった。と思つたら二枚の紙へと変わり地面へと落ちていく。

「式神ね。面倒くさい」

そう言い、私の方に向き直る。

「あなた、大丈夫？」

「え？ええ、だ、大丈夫です」

「びっくりしたでしょうが、このことは誰にも話さないほうがいいわ。検索するなどは言わないけど、好奇心猫をも殺すと言うからやめときなさい。あなたの身のためにも」  
　　どういふことだろうか。わからないが、取り敢えずうなずいた。彼女はいい子ねつと言つて、背中を見せた。

「それじゃ私は帰るわね。一応近くにはいるわ。あいつみたいなのがあなたに接してきたら、今みたいに追っ払っておくから、安心なさい」

　　そう言つて、彼女は消えたのだった。突然過ぎて置いてけぼりを食らったが一言言える。

　　なんとも不思議な体験だった、と。

## 第八話 魔法少女ハーレムなのは計画 フェイト

どうしてこうなった。それが私こと茅野かすみの思ったことだった。

先日のお茶会から数日たったある日。私は学校帰りの途中道であった。

ジュエルシードの暴走も最近は見当たらず、平和な日常が過ぎていると思っていたのだ。

目の前に、赤眼で金髪ツインテの美少女が、自身の身長ほどある得物をこちらに向けてくるまでは。

「あなたの持つているジュエルシードを渡してください」

金髪幼女ことフェイト・テスタロツサちゃんがそう言う。

なぜこうなっているかって？ 簡単だ。下校時、なのはちゃんたちと途中でお別れ。そして、一人でとぼとぼと帰る途中、曲がり角を曲がったら、フェイトちゃんに出会った。本当に偶然って怖い。

フェイトちゃんはこちらのことを覚えていてすぐに変身、バルディツシュを構えて来た。通常変身物のアニメでは変身時は顔が思いっきり出ているにもかかわらず、友人にもばれないというご都合主義を發揮するのだが、こと『魔法少女リリカルなのは』に限っ

て言えばそうでもないのが、悲しい。

私は両手を上げて、この状況をどうしようかと悩んでいた。

……とりあえず、話しかけてみようかな。

「え、えつと、確かフェイトちゃん、だっけ？」

睨んできた。さぞや前回捕まったのをまだ根に持っているのだろう。なのはちゃんのためとはいえ、なぜあんなことをしてしまったのか。なのはちゃんのためだったの、後悔はないが他になかったのか疑問は残る。

「消えないでください。魔法を使った瞬間に、攻撃します」

アルファスと念話をしようとしたが、やめた。果たして、念話は魔法に入りますか？魔法世界出身ではないので、わかりません。転生特典も使えない。これでどうやって逃げればいいのか。

「痛いことはしたくはありません。どうかジュエルシードをこちらに渡してください」

「……嫌だ、と言えば？」

訊くと、視線が鋭くなる。なんとも、泣き出しそうな表情で、怖さはない。

「その時は、無理矢理にでも、奪います」

「じゃあ、あげる」

「どうしても渡したくないというの……え？」

アルファス、と呼ぶと、アルファスからジュエルシードが吐き出される。それを慎重にフェイトちゃんバルディッシュに渡した。バルディッシュは受け取った。

「え？ え？ え？」

「渡しました。これでいい？」

私が持っているジュエルシード二個を全て渡した。フェイトちゃんは相変わらず、意味がわかっていないようだ。

「渡したから、一つだけお願いを聞いてもらっても良い？」

「お願い……？」

うん、と頷いて言う。

「なのはちゃん……私ともう一人いた女の子だけど、その子の話をしっかりと聞いて話してほしいの。それだけ」

「……」

「お願い、聞いてくれるかな？」

フェイトちゃんは迷った様子を見せる。

「うん、わかった。話してみる」

「ありがとう」

私はできるだけ、柔らかい笑顔を心がけた。